清武町埋蔵文化財調査報告書　第30集

GOTANBATA

五反畑遺跡B地区

県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書

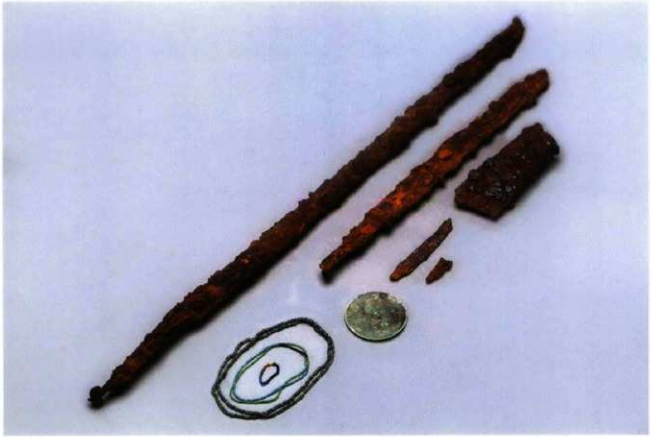
2010

清武町教育委員会

1　旧石器時代ナイフ形石器文化期の主な石器

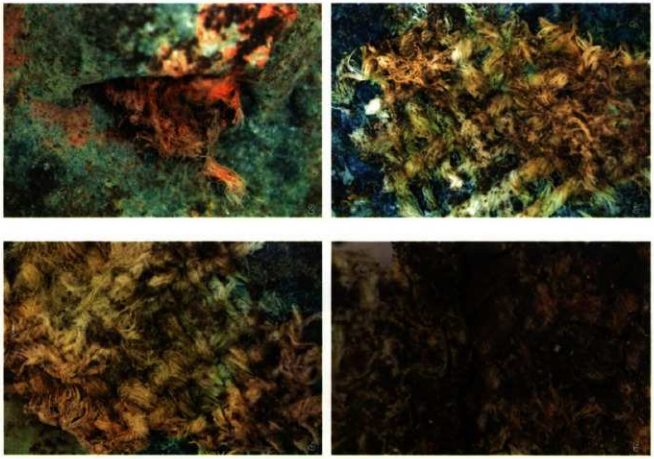
2　縄文時代早期の主な土器

1　1号木棺墓遺物出土状況



2　1号木棺墓出土遺物

1　1号木棺墓出土珠文鏡



2　紐孔部分アップ　　3　布A　　4　布B　　5　鏡から剥落した布片（織耳部分）

1　赤色・上面

2　同左・側面

3　黄色・側面

4　黒色・側面

5　黄緑色・上面

6　同左・側面

7　紺色・上面

8　同左・側面

9　青色・側面

10　淡緑色・側面

11　淡青色・半透明・上面

12　同左・側面

13　淡青色・透明・上面

14　同左・側面

15　淡青・半透明・側面

16　淡青・不透明・側面

17　1号木棺墓出土玉類

※1～16は実体顕微鏡写真である。

序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農免農道整備事業船引２期地区工事に伴い、平成19・20年度事業区で実施した五反畑遺跡Ｂ地区の発掘調査報告書です。

調査の結果、五反畑遺跡Ｂ地区では旧石器時代から近代に至る幅広い時期の遺物・遺構が確認されました。なかでも木棺墓、石棺墓、地下式横穴墓など多様な墳墓が確認され、銅鏡や鉄器、玉類が出土した古墳時代の調査は、これまであまり様相が分からなかった本町の古墳時代の歴史を紐解くうえで重要な資料と考えております。

今年度をもって、本町は宮崎市と合併することになりますが、今後もこれら清武の先人達の残した貴重なメッセージを学校や地域と十分な連携を図り、学校教育や生涯学習の場などをとおして伝えていきたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり多大な御協力をいただきました中部農林振興局及び地元の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成22年２月

清武町教育委員会

教育長　神川　孝志

例　言

1．本書は県営農免農道整備事業船引2期地区工事に伴い、平成19・20年度に実施された五反畑遺跡B地区の発掘調査報告書である。

2．発掘調査期間、調査の経過、調査組織については、本文中「第Ⅰ章」の中に記している。

3．本遺跡の遺跡略号は「GTB」とする。なお、本遺跡は調査区が複数あるため、本調査区については「GTB－B」を略号とする。

4．発掘調査は井田篤、秋成雅博の協力を得て、今村結記が担当した。なお、本調査に従事した発掘作業員は下記のとおりである。

※50音順

5．発掘調査における測量・実測については、今村及び実測補助員が行った。

※50音順

6．遺物・図面の整理及び報告書作成業務については、整理作業員の補助を得て、秋成、今村が担当した。なお、本報告書作成業務に従事した整理作業員は下記のとおりである。

※50音順

7．石器実測及びトレースについては、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。なお、これらの委託業務の監修については秋成の補助を得て今村が行った。

8．本書で使用した写真についてはX線写真を除き、今村が撮影した。

9．遺構の番号については、調査中検出順に通し番号で付けていたが、今回の報告にあたり下記のように番号を付け直した。また調査後、遺構でないと判断したものについては欠番とした。なお、遺物への注記は調査時の番号を記している。

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
礫群		14号集石	SI-36	土坑		18号土坑	SC-73	2号土壙墓	SC-21
1号礫群	SR-80	15号集石	SI-39	1号土坑	SC-12	19号土坑	SC-74	地下式横穴墓	
2号礫群	SR-81	16号集石	SI-41	2号土坑	SC-26	20号土坑	SC-75	1号地下式横穴墓	SD-79
3号礫群	SR-82	17号集石	SI-42	3号土坑	SC-38	21号土坑	SC-3	周溝状遺構	
集石遺構		18号集石	SI-43	4号土坑	SC-40	22号土坑	SC-21	1号周溝状遺構	SD-18周溝
1号集石	SI-4	19号集石	SI-46	5号土坑	SC-54	石器埋納遺構		2号周溝状遺構	SE-30
2号集石	SI-9	20号集石	SI-48	6号土坑	SC-56	1号石器埋納遺構	SZ-55	道路状遺構	
3号集石	SI-16	21号集石	SI-49	7号土坑	SC-57	竪穴式住居跡		1号道路状遺構	SC-45
4号集石	SI-19	22号集石	SI-50	8号土坑	SC-58	1号竪穴式住居跡	SA-5	溝状遺構	
5号集石	SI-20	23号集石	SI-51	9号土坑	SC-60	2号竪穴式住居跡	SA-10	1号溝状遺構	SE-6
6号集石	SI-22	24号集石	SI-52	10号土坑	SC-61	石棺墓		2号溝状遺構	SE-44
7号集石	SI-24	25号集石	SI-53	11号土坑	SC-64	1号石棺墓	SD-8	土器出土状況	
8号集石	SI-25	26号集石	SI-62	12号土坑	SC-65	木棺墓		無文土器(P.65 19)	SZ-77
9号集石	SI-28	27号集石	SI-63	13号土坑	SC-66	1号木棺墓	SD-7	無文土器(P.65 20)	SZ-76
10号集石	SI-29	28号集石	SI-67	14号土坑	SC-68	2号木棺墓	SD-27		
11号集石	SI-31	29号集石	SI-71	15号土坑	SC-69	3号木棺墓	SD-18		
12号集石	SI-34	30号集石	SI-78	16号土坑	SC-70	土壙墓			
13号集石	SI-35	31号集石	SC-15	17号土坑	SC-72	1号土壙墓	SD-11		

10. 本書で使用した土層および土器等の色調については、『新版　標準土色帖（1997年後期版）』の土色に準拠した。

11. 本書では、磁北と座標北の２種類の方位を使用している。（座標北を用いる場合のみG.Nと表示している。）

12. 標高は海抜絶対高である。

13. 本書の遺物番号は次のとおりである。
第Ⅱ章　旧石器時代の調査　No.1～163
第Ⅲ章　縄文時代の調査　No.1～202
第Ⅳ章　弥生時代の調査　No.1～17
第Ⅴ章　古墳時代の調査　No.1～33
第Ⅵ章　古代以降の調査　No.1～13

14. 本書で使用した土層番号（ローマ数字で記載しているもの）については、「第７図基本土層図」の番号を使用している。

15. 土器の器種名について、本来であれば「甕形土器」「壺形土器」などのように「○○形土器」と表記すべきであるが、本書中では「甕」「壺」などのように略して表記している。

16. 本書の執筆と編集については今村が担当した。なお、細石器の所見については秋成の協力を得た。

17. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々にご教示・ご協力をいただいた。記して深く感謝申し上げます。
柳沢一男（宮崎大学）、橋本達也、藤井大祐（鹿児島大学総合研究博物館）、高妻洋成（奈良文化財研究所）、東徹志（弥生文化博物館）、松田清孝（宮崎県総合博物館）、石川悦雄、今塩屋毅行、大野義人、甲斐康大、谷口武範、丹俊祠、藤木聡、堀田孝博、森田利枝（宮崎県埋蔵文化財センター）、稲岡洋道、西嶋剛広（宮崎市教育委員会）、加覧淳一、栗山葉子、近沢恒典、中村友昭（都城市教育委員会）、三好栄太郎（香芝市教育委員会）、南健太郎（熊本大学大学院）　※順不同　敬称略　所属は当時
また、第Ⅶ章第２節に第17回宮崎縄文研究会例会で発表した内容の一部を改変して利用している。例会において宮崎縄文研究会の諸氏から多大なご教示を賜った。あわせて深く感謝申し上げます。

18. 鉄器の取り上げ及びＸ線写真撮影・保存処理については(株)葵文化に委託した。

19. 出土遺物及びその他諸記録は、清武町埋蔵文化財センターに保管している。

20. 観察表・計測表表記凡例は下記のとおりである。
・「文様及び調整」における部位の表現〔口：口縁部、頸：頸部、胴：胴部、杯：杯部、脚：脚部、底：底部（なお、　残存している部位すべてが、同じ文様・調整の場合は部位名を記載していない。）〕
・「残存部位」における口縁部～底部まで残存している資料の表現〔完形：残存率が100％の場合、ほぼ完形：残存率が90％以上100％未満の場合、口縁部～底部：残存率が90％未満の場合〕
・観察表の「法量」において、括弧内に記載している数字は復元径の値である。
・計測表の「法量」「重量」において、括弧内に記載している数字は残存値である。
・遺構外出土遺物のうち、「層位」の欄で空欄のものは撹乱坑出土資料、表土出土資料、表採資料である。

21. 図中表記凡例は下記のとおりである。
・石器実測図中の網掛け範囲は、磨面を示す。
・石器実測図中の斜線は節理面、点描は自然面、白抜きは折れ面、黒のベタ塗りは新しい傷（ガジリ）を示す。

目　次

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯と調査組織 ………………………… 1
第2節　遺跡の環境 ………………………… 2
第3節　発掘調査の経過と方法 ………………………… 2
第4節　基本土層 ………………………… 5

第Ⅱ章　旧石器時代の調査

第1節　遺構 ………………………… 7
第2節　石器の時期認定について ………………………… 7
第3節　ナイフ形石器文化期の遺物 ………………………… 9
第4節　細石器文化期の遺物 ………………………… 24

第Ⅲ章　縄文時代の調査

第1節　遺構 ………………………… 51
第2節　包含層出土遺物 ………………………… 63

第Ⅳ章　弥生時代の調査

第1節　遺構 ………………………… 95
第2節　包含層出土遺物 ………………………… 99

第Ⅴ章　古墳時代の調査

第1節　遺構 ………………………… 100
第2節　遺構外出土遺物 ………………………… 111

第Ⅵ章　古代以降の調査

第1節　遺構 ………………………… 113
第2節　遺構外出土遺物 ………………………… 116

第Ⅶ章　まとめ

第1節　旧石器時代における五反畑遺跡B地区の位置付け ………………………… 117
第2節　縄文時代における五反畑遺跡B地区の位置付け ………………………… 117
第3節　古墳時代における五反畑遺跡B地区の位置付け ………………………… 118

調査抄録 ………………………… 149

挿図目次

第1図 発掘調査風景① …… 1
第2図 発掘調査風景② …… 1
第3図 遺跡位置図 …… 3
第4図 遺跡周辺地形図 …… 4
第5図 グリッド図 …… 5
第6図 表土除去後調査区削平状況及びコンタ図 …… 5
第7図 基本土層図 …… 6
第8図 基本土層 …… 6
第9図 ラミナ堆積状況 …… 6
第10図 礫層と宮崎層群の関係 …… 6
第11図 礫群実測図 …… 7
第12図 旧石器時代遺構配置図及び礫の分布状況 …… 8
第13図 ナイフ形石器文化期出土石器分布図【器種別】… 10
第14図 ナイフ形石器文化期出土石器分布図【石材別】… 11
第15図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図① …… 12
第16図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図② …… 13
第17図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図③ …… 14
第18図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図④ …… 15
第19図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑤ …… 16
第20図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑥ …… 17
第21図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑦ …… 18
第22図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑧ …… 19
第23図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑨ …… 20
第24図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑩ …… 21
第25図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑪ …… 22
第26図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑫ …… 23
第27図 ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑬ …… 24
第28図 細石器文化期出土石器分布図【器種別】 …… 25
第29図 細石器文化期出土石器分布図【石材別】 …… 26
第30図 細石器文化期出土石器実測図① …… 27
第31図 細石器文化期出土石器実測図② …… 28
第32図 細石器文化期出土石器実測図③ …… 29
第33図 細石器文化期出土石器実測図④ …… 30
第34図 細石器文化期出土石器実測図⑤ …… 31
第35図 細石器文化期出土石器実測図⑥ …… 32
第36図 細石器文化期出土石器実測図⑦ …… 33
第37図 細石器文化期出土石器実測図⑧ …… 34
第38図 細石器文化期出土石器実測図⑨ …… 35
第39図 細石器文化期出土石器実測図⑩ …… 36
第40図 細石器文化期出土石器実測図⑪ …… 37
第41図 細石器文化期出土石器実測図⑫ …… 38
第42図 細石器文化期出土石器実測図⑬ …… 39
第43図 細石器文化期出土石器実測図⑭ …… 40
第44図 細石器文化期出土石器実測図⑮ …… 41
第45図 細石器文化期出土石器実測図⑯ …… 42
第46図 細石器文化期出土石器実測図⑰ …… 43
第47図 細石器文化期出土石器実測図⑱ …… 44
第48図 細石器文化期出土石器実測図⑲ …… 45
第49図 細石器文化期出土石器実測図⑳ …… 46
第50図 細石器文化期出土石器実測図㉑ …… 47
第51図 縄文時代遺構配置図及び礫分布図 …… 52
第52図 集石遺構実測図① …… 53
第53図 集石遺構実測図② …… 54
第54図 集石遺構実測図③ …… 55
第55図 集石遺構実測図④ …… 56
第56図 土坑実測図① …… 57
第57図 土坑実測図② …… 58
第58図 土坑実測図③ …… 59
第59図 土坑実測図④ …… 60
第60図 1号石器埋納遺構実測図及び出土遺物実測図 … 61
第61図 遺構内出土遺物実測図 …… 62
第62図 縄文土器出土状況分布図 …… 64
第63図 縄文土器実測図①及び無文土器出土状況実測図 … 65
第64図 縄文土器実測図② …… 66
第65図 縄文土器実測図③ …… 67
第66図 縄文時代草創期～早期遺物包含層出土主要石器分布図【器種別】 …… 69
第67図 縄文時代草創期～早期遺物包含層出土石器分布図【石材別】 …… 70
第68図 縄文時代石器実測図① …… 71
第69図 縄文時代石器実測図② …… 72
第70図 縄文時代石器実測図③ …… 73
第71図 縄文時代石器実測図④ …… 74
第72図 縄文時代石器実測図⑤ …… 75
第73図 縄文時代石器実測図⑥ …… 76
第74図 縄文時代石器実測図⑦ …… 77
第75図 縄文時代石器実測図⑧ …… 79
第76図 縄文時代石器実測図⑨ …… 80
第77図 縄文時代石器実測図⑩ …… 81－82
第78図 縄文時代石器実測図⑪ …… 83
第79図 縄文時代石器実測図⑫ …… 84
第80図 縄文時代石器実測図⑬ …… 85
第81図 縄文時代石器実測図⑭ …… 86
第82図 縄文時代石器実測図⑮ …… 87
第83図 縄文時代石器実測図⑯ …… 88
第84図 縄文時代石器実測図⑰ …… 89
第85図 縄文時代石器実測図⑱ …… 90
第86図 弥生時代遺構配置図 …… 95
第87図 1号竪穴式住居跡実測図及び1号竪穴式住居跡出土遺物実測図 …… 96
第88図 2号竪穴式住居跡実測図及び2号竪穴式住居跡出土遺物実測図 …… 97
第89図 包含層出土弥生時代遺物実測図① …… 98
第90図 包含層出土弥生時代遺物実測図② …… 99
第91図 古墳時代遺構配置図 …… 100
第92図 1号石棺墓平面図・土層断面図及び掘方平面図・断面図 …… 101
第93図 1号石棺墓石棺実測図 …… 101
第94図 1号石棺墓棺外立ち割り区土層断面 …… 101
第95図 1号石棺墓内敷石 …… 101
第96図 1号木棺墓掘方及び土層断面実測図 …… 102
第97図 1号木棺墓棺台及び遺物出土状況実測図 …… 103
第98図 1号木棺墓内敷石 …… 103
第99図 1号木棺墓出土遺物実測図① …… 103
第100図 1号木棺墓出土遺物実測図② …… 104
第101図 1号木棺墓出土遺物実測図③ …… 105

第102図　1号木棺墓出土ガラス製小玉法量分布図 …… 105
第103図　2号木棺墓実測図 …… 107
第104図　2号木棺墓出土遺物実測図 …… 107
第105図　3号木棺墓出土遺物実測図 …… 108
第106図　3号木棺墓実測図 …… 108
第107図　3号木棺墓と1号周溝状遺構の位置図 …… 108
第108図　1号土壙墓実測図 …… 109
第109図　1号土壙墓出土遺物実測図 …… 109
第110図　1号地下式横穴墓実測図 …… 110
第111図　1号地下式横穴墓出土遺物実測図 …… 110
第112図　2号周溝状遺構実測図 …… 111
第113図　包含層出土遺物実測図 …… 111
第114図　古代以降の遺構配置図 …… 113
第115図　2号土壙墓実測図及び2号土壙墓出土遺物実測図 …… 114
第116図　21号土坑実測図 …… 114
第117図　22号土坑実測図 …… 114
第118図　1号道路状遺構実測図 …… 114
第119図　1号溝状遺構実測図及び1号溝状遺構出土遺物実測図 …… 115
第120図　2号溝状遺構実測図 …… 116
第121図　古代以降の遺物実測図 …… 116

図版目次

巻頭図版1　旧石器時代及び縄文時代の主な遺物
巻頭図版2　1号木棺墓及び1号木棺墓出土遺物
巻頭図版3　1号木棺墓出土珠文鏡
巻頭図版4　1号木棺墓出土ガラス製小玉
図版1　遺跡周辺の空中写真及びアカホヤ上面検出遺構・122
図版2　旧石器時代の遺構①及び遺物出土状況 …… 123
図版3　旧石器時代の遺構② …… 124
図版4　縄文時代の遺構① …… 125
図版5　縄文時代の遺構② …… 126
図版6　縄文時代の遺構③ …… 127
図版7　縄文時代の遺構④及び遺物出土状況 …… 128
図版8　弥生時代の遺構 …… 129
図版9　古墳時代の遺構① …… 130
図版10　古墳時代の遺構② …… 131
図版11　古代以後の遺構 …… 132
図版12　ナイフ形石器文化期の遺物① …… 133
図版13　ナイフ形石器文化期の遺物② …… 134
図版14　細石器文化期の遺物① …… 135
図版15　細石器文化期の遺物② …… 136
図版16　細石器文化期の遺物③ …… 137
図版17　縄文時代遺構内出土遺物 …… 138
図版18　縄文時代包含層出土遺物① …… 139
図版19　縄文時代包含層出土遺物② …… 140
図版20　縄文時代包含層出土遺物③ …… 141
図版21　縄文時代包含層出土遺物④ …… 142
図版22　弥生時代の遺物 …… 143
図版23　古墳時代遺構内出土遺物 …… 144
図版24　1号木棺墓出土鉄器 …… 145
図版25　2・3号木棺墓、1号土壙墓出土遺物 …… 146
図版26　1号地下式横穴墓、2号土壙墓出土遺物 …… 147
図版27　古墳時代遺構内出土鉄器X線写真 …… 148

表目次

第1表　層位別遺物及び石器石材組成表 …… 9
第2表　旧石器時代の石器計測表① …… 48
第3表　旧石器時代の石器計測表② …… 49
第4表　旧石器時代の石器計測表③ …… 50
第5表　縄文時代集石遺構観察表 …… 51
第6表　縄文時代土坑観察表 …… 51
第7表　縄文土器観察表 …… 91
第8表　縄文時代の石器計測表① …… 92
第9表　縄文時代の石器計測表② …… 93
第10表　縄文時代の石器計測表③ …… 94
第11表　弥生土器観察表 …… 99
第12表　弥生時代の石器計測表 …… 99
第13表　1号木棺墓出土玉類の出土点数及び法量 …… 105
第14表　珠文鏡計測表 …… 112
第15表　鉄剣・鉄刀計測表 …… 112
第16表　鉄斧計測表 …… 112
第17表　刀子計測表 …… 112
第18表　鉄鏃計測表 …… 112
第19表　玉類計測表 …… 112
第20表　古墳時代の土器観察表 …… 112
第21表　銭貨計測表 …… 116
第22表　古代以降の土器観察表 …… 116

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と調査組織

１．調査に至る経緯

平成17年度より実施されている県営農免農道整備事業船引２期地区工事に伴い、事業区に五反畑遺跡（Ｂ地区）の一部が含まれることが宮崎県教育委員会文化課の試掘結果等により明らかになった。遺跡の取り扱いについて宮崎県中部農林振興局と慎重に協議を重ねた結果、清武町教育委員会が宮崎県中部農林振興局の委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成19・20年度（平成19年12月６日～平成20年５月29日）に行われた。調査面積は約1,120㎡であった。

２．調査組織

五反畑遺跡Ｂ地区の調査組織は以下のとおりである。

調査主体：清武町教育委員会

発掘調査（平成19年度）		発掘調査（平成20年度）		整理作業（平成21年度）	
事務局		**事務局**		**事務局**	
教育長	神川　孝志	教育長	神川　孝志	教育長	神川　孝志
教育次長	児玉　秀樹	教育次長	児玉　秀樹	教育次長	児玉　秀樹
生涯学習課長	長友　公春	生涯学習課長	日高　貞幸	生涯学習課長	日高　貞幸
〃　課長補佐	内藤　和弘	〃　係長	伊東　但	〃　課長補佐	川越　健
〃　係長	伊東　但	〃　主任	井田　篤	〃　主査	井田　篤
〃　主任	井田　篤				
調査員		**調査員**		**調査員**	
生涯学習課主事	秋成　雅博	生涯学習課主任	秋成　雅博	生涯学習課主任	秋成　雅博
〃　嘱託職員	今村　結記	〃　嘱託職員	今村　結記	〃　嘱託職員	今村　結記

第１図　発掘調査風景①

第２図　発掘調査風景②

第２節　遺跡の環境

１．地理的環境

五反畑遺跡Ｂ地区は宮崎郡清武町大字船引字五反畑に所在し、標高約49～48ｍの中位河岸段丘上に位置している。清武町は、県内最大の宮崎平野の南端に位置し、宮崎市の南西に隣接している。宮崎平野の基盤にあたる地層は、「宮崎層群」と呼ばれているが、この地層は第三紀末期（700万年前）～第四紀初頭（150万年前）に九州山地から河川により運ばれた砂礫や泥が浅い海に堆積してできた地層である。

また、宮崎市から清武町にかけて分布する丘陵及び台地状の地形のうち、大淀川より南の丘陵は大淀川南岸丘陵と呼ばれている。丘陵の高さは西方の高岡山地から東へ向かってしだいに低くなり、標高約100ｍの平坦な台地状地形に変わる。本遺跡上段に存在する船引台地も大淀川南岸丘陵の一部を形成している。

本遺跡西側には清武川が流れている。清武川両岸には段丘地形が顕著に発達している。この段丘地形は宮崎平野が第四紀洪新世に数次の隆起をくり返した結果、形成されたものである。清武川両岸の段丘崖には礫層が露出しているが、これは旧河床や氾濫源に堆積した砂礫が、地盤の隆起により崖に現れたものである。

なお、本遺跡の北側の崖面には湧水点が数多く点在しており、遺跡が立地する上での好条件の一つであったと考えられる。

２．歴史的環境

五反畑遺跡Ｂ地区が所在する船引地区には、白ヶ野遺跡・滑川遺跡・坂元遺跡・山田遺跡・清武上猪ノ原遺跡・下猪ノ原遺跡など約20遺跡が確認されている。これらの遺跡は県営ほ場整備事業や東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、縄文時代早期の資料を中心に貴重な発見が続いている。

遺跡周辺の詳細な歴史的環境については『五反畑遺跡Ａ地区』（今村2009）の報告書でまとめているため、そちらを参考にして欲しい。

第３節　発掘調査の経過と方法

１．発掘調査の経過

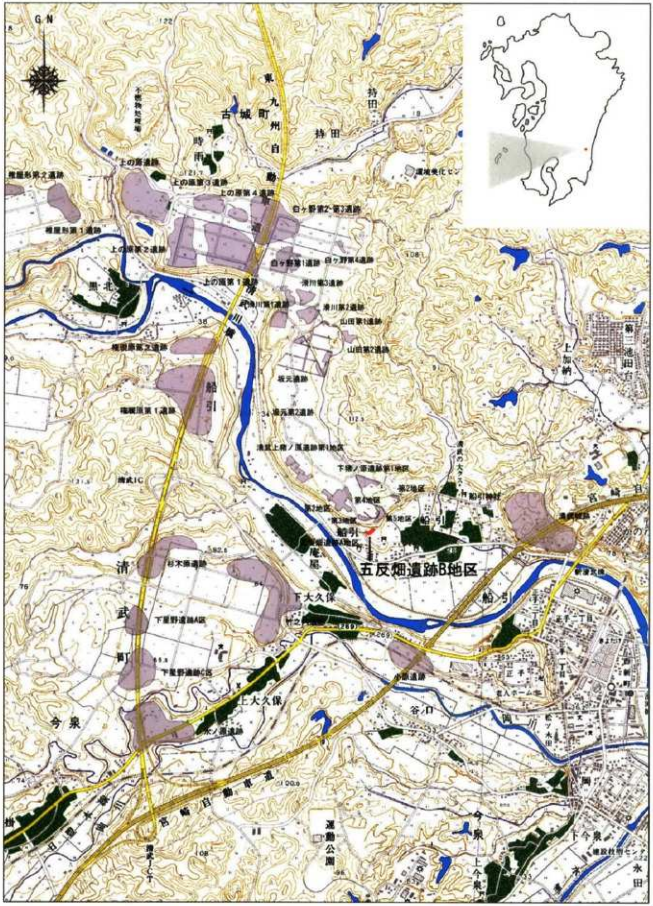
重機による表土の剥ぎ取り後、レベル移動及びグリッドの設定を行った。なお、各グリッドの名称は第５図のとおりである。その後、アカホヤ火山灰層残存範囲において、遺物の取り上げ作業と遺構の検出作業を行った。その結果、弥生時代の竪穴式住居跡や古墳時代の墳墓などが検出された。そのため、遺物の取り上げ作業と並行して遺構の記録作業を行った。

アカホヤ火山灰層上位の調査が終了後人力によりアカホヤ火山灰層を除去し、縄文時代草創期～早期の調査を実施した。その結果、多量の遺物が出土したほか集石遺構・土坑等が検出された。そのため、これらの記録作業を行った。旧石器時代の調査に関しては、縄文時代草創期～早期の調査が終了した範囲にトレンチを設定し掘り下げていくという方法で行った。設定したトレンチから遺物が出土した場合は、そのトレンチを拡張して遺物の広がりを完全に把握するよう心掛けた。しかしながら、広く平面的に遺物包含層の掘り下げを行うことはできなかった。

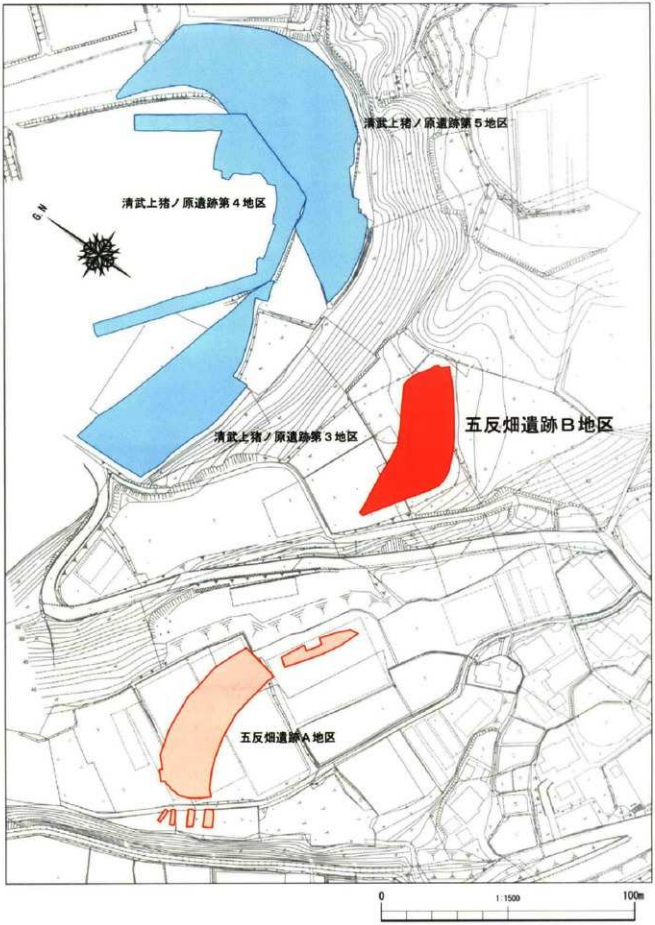
２．発掘調査の方法

本調査区における発掘調査の方法は下記のとおりである。

表土等の剥ぎ取り：調査員の指示のもと重機を使用して実施した。
基準杭の設定：すべて調査員が行った。
遺物包含層の掘り下げ作業：主にジョレン・ねじり鎌で行った。包含層中に存在する遺構の検出作業も兼ねているので、一枚一枚包含層を剥ぐ意識を作業員に徹底させ丁寧に行った。
遺構実測：遺構のサイズに応じて１／５、１／１０、１／２０で作図した。
測量関係：光波測量器及びデータコレクタを使用し、現場でデータを収集した後、清武町埋蔵文化財センターにおいてＡＵＴＯＣＡＤを利用してデジタルデータとして整理・管理した。
写真撮影：６×９版モノクロ・リバーサル、３５mmモノクロ・リバーサル写真を併用して行った。



第３図　遺跡位置図（Ｓ＝1/25000）



第４図　遺跡周辺地形図（Ｓ＝1/1500）

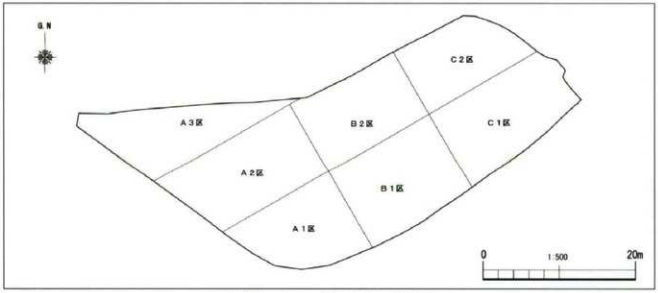
第４節　基本土層

本調査区における基本土層は、グリッドＢ２区北東側壁面にて実測した（第７・８図）。地層対比のうえで鍵となる降下火山灰層を三層確認した。しかし、調査区の南西側は緩やかな斜面となっているため、これらの火山灰の堆積が薄いもしくは確認できない地点も存在した。また、姶良入戸火砕流堆積物と考えられるXⅢ層直上では流水の痕跡であるラミナ（XⅡｂ層、第９図）を確認できた。これは姶良入戸火砕流堆積後に流れた旧河川跡の存在もしくは洪水があったことを示しているものと考えられる。本調査区がある段丘面形成の要因となった可能性も高い。XⅢ層直下には礫層（XⅣ層）を確認したが、これは宮崎層群直上の礫層であると調査区周辺の露頭（第10図）の観察により判断できる。

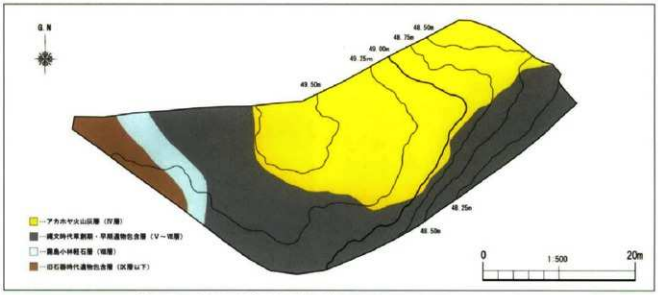
【第Ⅰ章　引用・参考文献】

今村結記　2009　「五反畑遺跡Ａ地区」清武町埋蔵文化財調査報告書第28集　清武町教育委員会

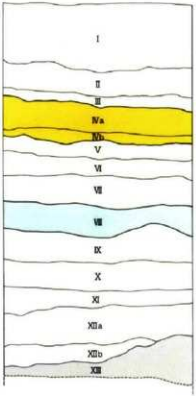
早田勢　1997　「第一節　県内の地形と地質」『宮崎県史　通史編　原始・古代１』　宮崎県



第５図　グリッド図（Ｓ＝1/500）



第６図　表土除去後調査区削平状況及びコンタ図（Ｓ＝1/500）



I　黒褐色シルト質ローム層（10YR2/2）**表土**
II　黒色シルト質ローム層（10YR7/1）
III　暗褐色ローム層（10YR3/3）**二次堆積の鬼界アカホヤ火山灰層**
IVa　明褐色砂質ローム層（10YR7/6）**鬼界アカホヤ火山灰層**
IVb　黄橙色ローム層（10YR7/8）**鬼界幸屋軽石層**
V　黒色ローム層（7.5YR2/1）
VI　極暗褐色ローム層（7.5YR2/3）
VII　褐色ローム層（7.5YR4/4）**霧島小林軽石を少量含む層**
VIII　にぶい黄褐色ローム層（10YR4/3）**霧島小林軽石を多量含む層**
IX　にぶい黄褐色シルト質ローム層（2.5YR6/4）
X　暗褐色ローム層（10YR3/3）
XI　褐色ローム層（7.5YR4/3）
XIIa　灰褐色砂層（7.5YR5/2）直径5cm以下の小礫を多量含む層
XIIb　暗褐色砂層（2.5YR7/6）小礫、砂等が縞状に入る層
XIII　黄褐色砂層（10YR5/8）**姶良入戸火砕流堆積物**
XIV　礫層　※別地点で確認

第7図　基本土層図（S＝1/30）

第8図　基本土層

第9図　ラミナ堆積状況

第10図　礫層と宮崎層群の関係

第Ⅱ章　旧石器時代の調査

第１節　遺構

霧島小林軽石層下位において、Ｂ１・Ｃ１区より旧石器時代に該当する遺構が検出された。検出された遺構は、礫群３基である。検出された遺構の位置関係および礫の分布状況を第12図に示している。以下、各遺構について詳述する。

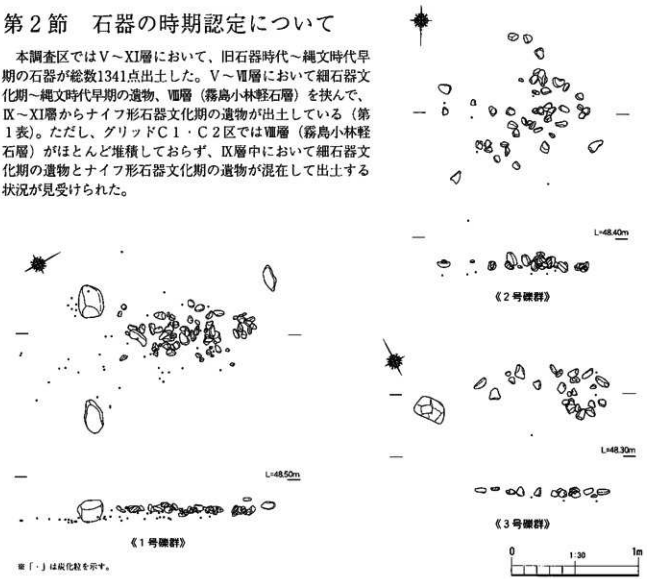
【１号礫群】　グリッドＢ１区に位置する。Ｘ層において検出された。約1.6×0.8mの範囲で礫の広がりを確認した。砂岩の礫で構成され、礫は赤化している。礫群内では炭化粒が確認できる。本礫群の構成礫の点数は62点、総重量は24.4kgであった。

【２号礫群】　グリッドＣ１区に位置する。Ⅸ層において検出された。約1.3×1.2mの範囲で礫の広がりを確認した。砂岩の礫で構成され、礫は赤化している。礫群内では炭化粒が確認できる。本礫群の構成礫の点数は46点、総重量は8.9kgであった。

【３号礫群】　グリッドＣ１区に位置する。Ⅸ層において検出された。約1.55×0.45mの範囲で礫の広がりを確認した。砂岩の礫で構成され、礫は赤化している。礫群内では炭化粒が確認できる。本礫群の構成礫の点数は25点、総重量は6.6kgであった。

第２節　石器の時期認定について

本調査区ではⅤ～ⅪⅠ層において、旧石器時代～縄文時代早期の石器が総数1341点出土した。Ⅴ～Ⅶ層において細石器文化期～縄文時代早期の遺物、Ⅶ層（霧島小林軽石層）を挟んで、Ⅸ～ⅪⅠ層からナイフ形石器文化期の遺物が出土している（第１表）。ただし、グリッドＣ１・Ｃ２区ではⅦ層（霧島小林軽石層）がほとんど堆積しておらず、Ⅸ層中において細石器文化期の遺物とナイフ形石器文化期の遺物が混在して出土する状況が見受けられた。



第11図　礫群実測図（Ｓ＝1/30）

第12図　旧石器時代遺構配置図及び礫の分布状況（S＝1/300）

第１表に出土層位と主要器種及び石器石材関係との関係を示した。次にこの表を用いて石材別に時期認定を行う。まず縄文時代草創期～早期の遺物である土器・石鏃に注目するとⅤ～Ⅶ層において出土していることが分かる。土器・石鏃と出土層位において有機的な関係を示す石材が黒曜石（鹿児島・姫島・西北九州産）・チャート・粘板岩・安山岩・尾鈴山酸性岩である。よって、これらの石材は縄文時代草創期～早期の遺物であると考えられる。特に姫島産黒曜石・安山岩・尾鈴山酸性岩に関しては、これまでの当地域の調査事例でも同様の結果が得られており、今回の結果を補強する材料となっている。桑ノ木津留産黒曜石は石鏃・細石刃・細石刃核に使用されているため、細石器文化期～縄文時代早期に該当する。風化のためか灰黒色不透明で、白色斑点を多く含む産地不明の黒曜石（本遺跡に加え、白ヶ野遺跡や清武上猪ノ原遺跡など船引台地で一定量出土していることから船引ＩＯＸ群と仮称する）は細石刃核に使用されているため、細石器文化期に該当すると考えられる。砂岩・頁岩・流紋岩・ホルンフェルスはⅤ～XI層の各層で出土しているため、ナイフ形石器文化期～縄文時代早期において普遍的に使用された石材と考えられる。

さらに細石器文化器の遺物とナイフ形石器文化期の遺物が混在しているグリッドＣ１・Ｃ２区のIX層出土の石器については、ほぼナイフ形石器文化期の遺物で構成されるＸ・XI層出土石器の分布（第14図第１ブロック参照）と細石器の分布（第29図第５ブロック参照）が異なることを利用し、時期の分離を行った。Ⅴ～Ⅶ層出土の遺物に関しては、確実に細石器文化期の遺物と判断される細石刃・細石刃核及び細石刃製作に関連する遺物のみを抽出した。

なお、本報告書における石材の同定はすべて肉眼観察によるものである。

第３節　ナイフ形石器文化期の遺物

ナイフ形石器文化期に該当する石器は総数150点出土している。石器の集中域及び接合状況から第１ブロック～第４ブロックを設定した（第13・14図）。接合資料が多数検出されたが、各ブロックを結びつける資料は認められなかった。以下、各ブロックの説明を行う。

１．第１ブロック

第１ブロックはグリッドＣ１区を中心とする。出土した石器はナイフ形石器３点、スクレイパー１点、二次加工ある剥片４点、石核７点、砕片・剥片72点である。使用石材は砂岩21点、流紋岩18点、頁岩35点、ホルンフェルス13点である。

ナイフ形石器（１・２）　１は砂岩製の縦長剥片を素材とし、片縁部～基部にかけて刃潰し加工を施す。２は頁岩製の縦長剥片を素材とし、先端部及び基部に刃潰し加工を施す。

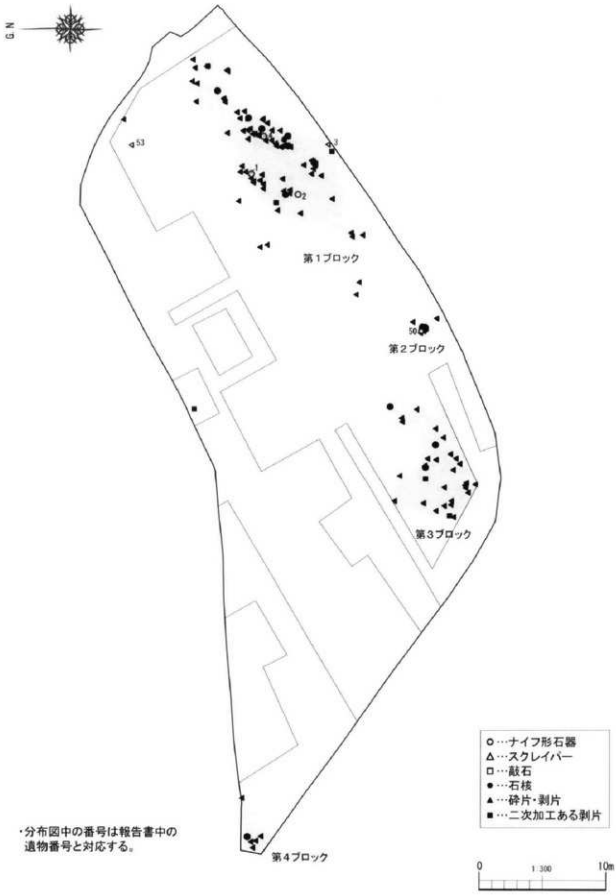
第１表　層位別遺物及び石器石材組成表

	石鏃	石鏃未製品	尖頭状石器	槍先形尖頭器	細石核	細石刃	打面再生剥片（細石器）	作業面再生剥片（細石器）	ナイフ形石器	土器
Ⅴ層	3	1			2					23
Ⅵ層	21	10	3	3	4	3				181
Ⅶ層	12	6	2	1	5	5	1	1		367
Ⅷ層										1
IX層					2	7			1	1
X層						1			1	
XI層						1			1	

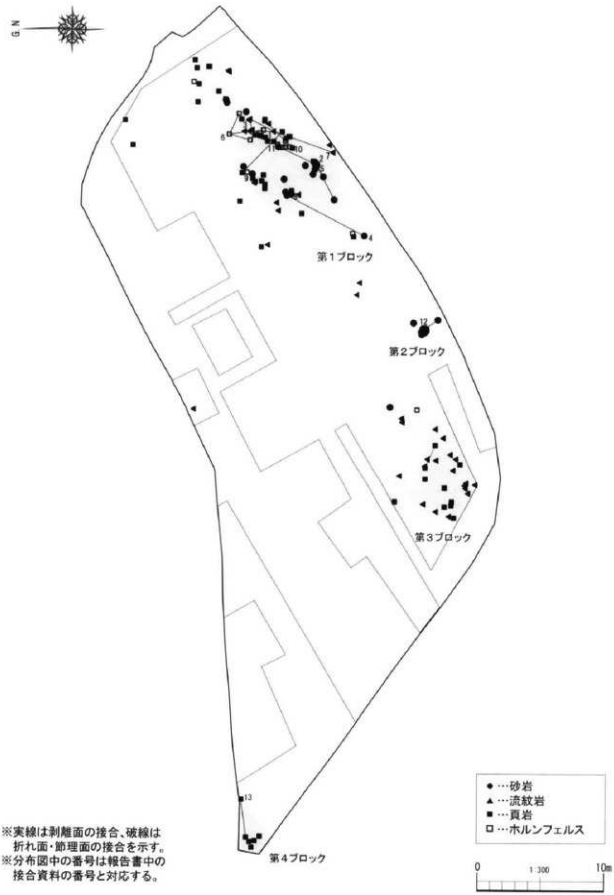
【主要器種別】

	黒曜石（桑ノ木津留）	黒曜石（鹿児島）	黒曜石（姫島）	黒曜石（西北九州）	黒曜石（船引IOX群）	チャート	粘板岩	安山岩	尾鈴山酸性岩	砂岩	頁岩	流紋岩	ホルンフェルス
Ⅴ層	4		1			13	1	1		9	11	8	1
Ⅵ層	31	21	1		1	105	17	1	3	61	87	62	10
Ⅶ層	42	38		2	3	99	13	3	1	102	146	84	22
Ⅷ層	3				2					1	3		3
IX層	20									105	50	24	4
X層	1	1								27	21	20	3
XI層	1									7	22	10	7

【石材別】



第13図　ナイフ形石器文化期出土石器分布図【器種別】（S＝1/300）



第14図　ナイフ形石器文化期出土石器分布図【石材別】（S＝1/300）

スクレイパー（3）　3は流紋岩製である。背面に礫面を残す大型の分割礫を素材とし、一側縁に刃部が形成される。

接合資料①（4～7）　頁岩製で剥片3点・ナイフ形石器1点が接合する。4→7→打面を180°回転後数枚の剥片剥離→5→6という作業工程が復元される。作出した4は片縁部～基部にかけて刃潰し加工を施し、ナイフ形石器とする。先端部は欠損している。5は作業面再生剥片であろう。

接合資料②（8・9）　砂岩製で剥片2点が接合する。9→数枚の剥片剥離→8という作業工程が復元される。

接合資料③（10・11）　流紋岩製で剥片2点が接合する。10→2枚の剥片剥離→11という作業工程が復元される。11は二次加工が施される。

接合資料④（12・13）　砂岩製で剥片1点・石核1点が接合する。13→数枚の剥片剥離→12（残核）という作業工程が復元される。12の形状から作出される目的剥片は横長剥片と考えられる。

接合資料⑤（14～18）　砂岩製で剥片4点・石核1点が接合する。まず、裏面で17→数枚の剥片剥離を行った後表面で、数枚の剥片剥離→16→18→数枚の剥片剥離→15→14（残核）という作業工程を行っている。

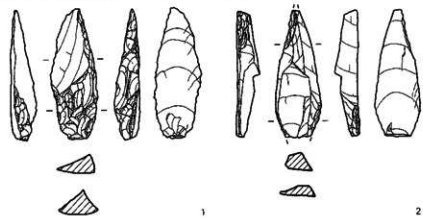
接合資料⑥（19～22）　頁岩製で剥片3点・石核1点が接合する。自然面を打面とし、20→22→数枚の剥離→21→形成された面を打面とし、数枚の剥片剥離→19（残核）という作業工程が復元される。

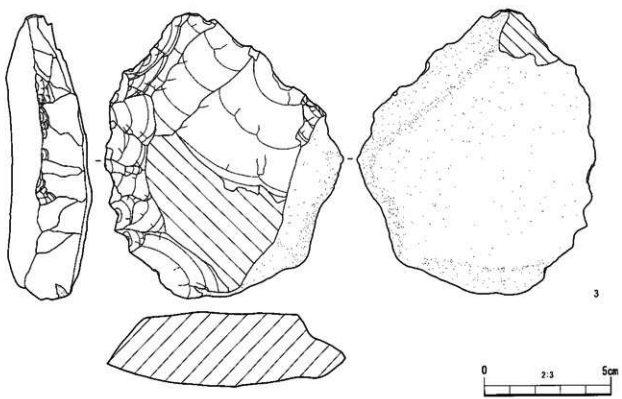
接合資料⑦（23～26）　流紋岩製で剥片3点・石核1点が接合する。23→数枚の剥片剥離→24→数枚の剥片剥離→25と作出した後も打面再生を行いながら剥片剥離を続けたと考えられる。残った石核が26である。24には二次加工が施される。

接合資料⑧（27・28）　砂岩製で剥片2点が接合する。27→28という作業工程が復元される。

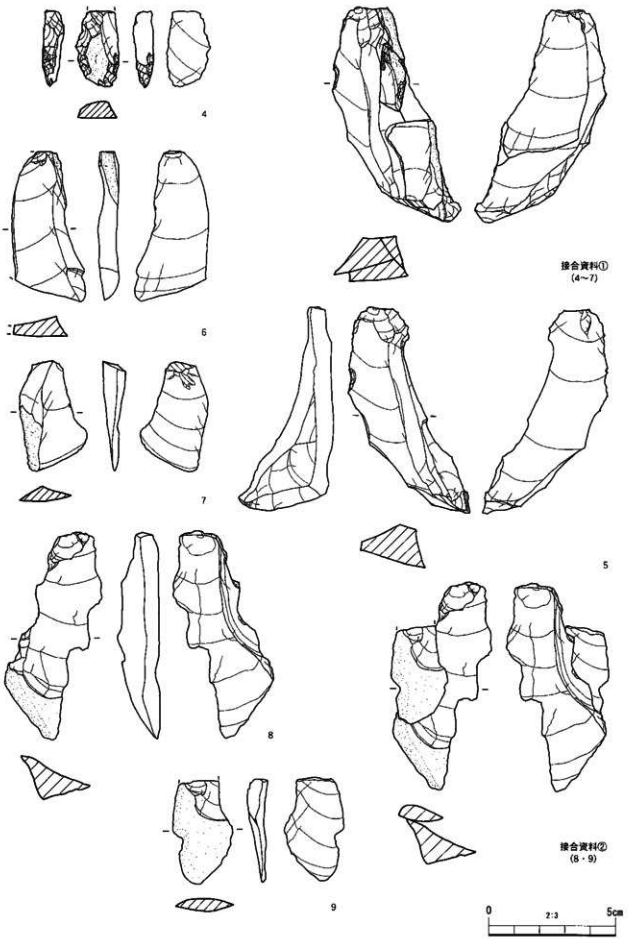
接合資料⑨（29・30）　頁岩製で剥片2点が接合する。30→29という作業工程が復元される。

接合資料⑩（31・32）　頁岩製で剥片2点が接合する。32→31という作業工程が復元される。32は作業面再生剥片であろう。

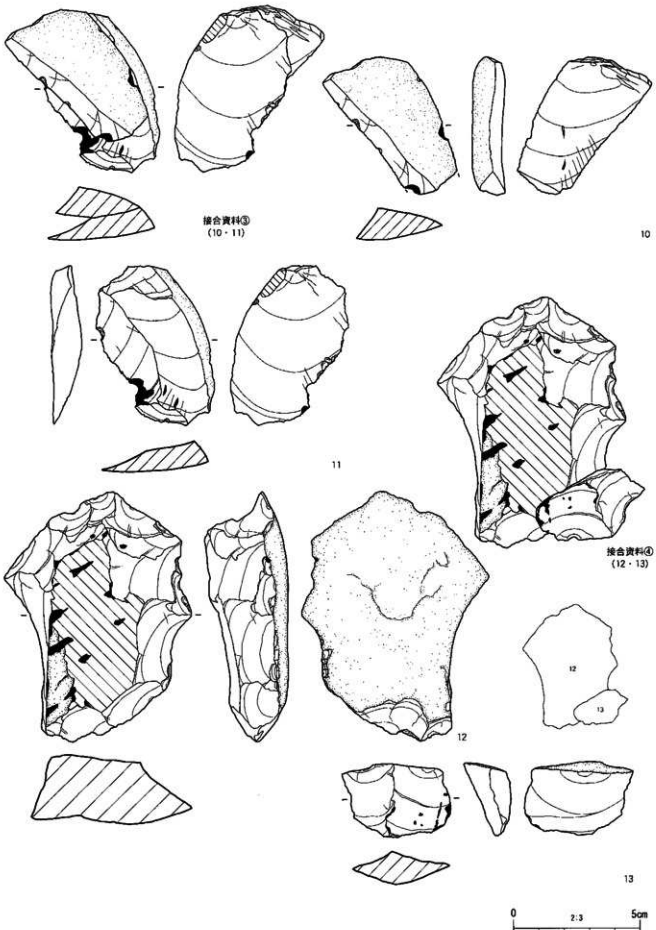




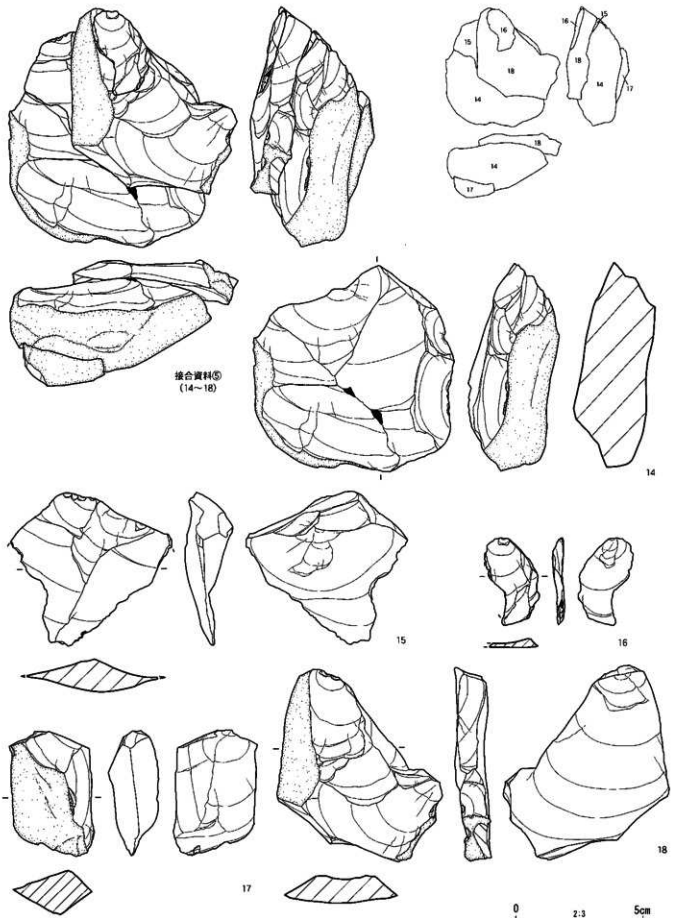
第15図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図①（S＝2/3）



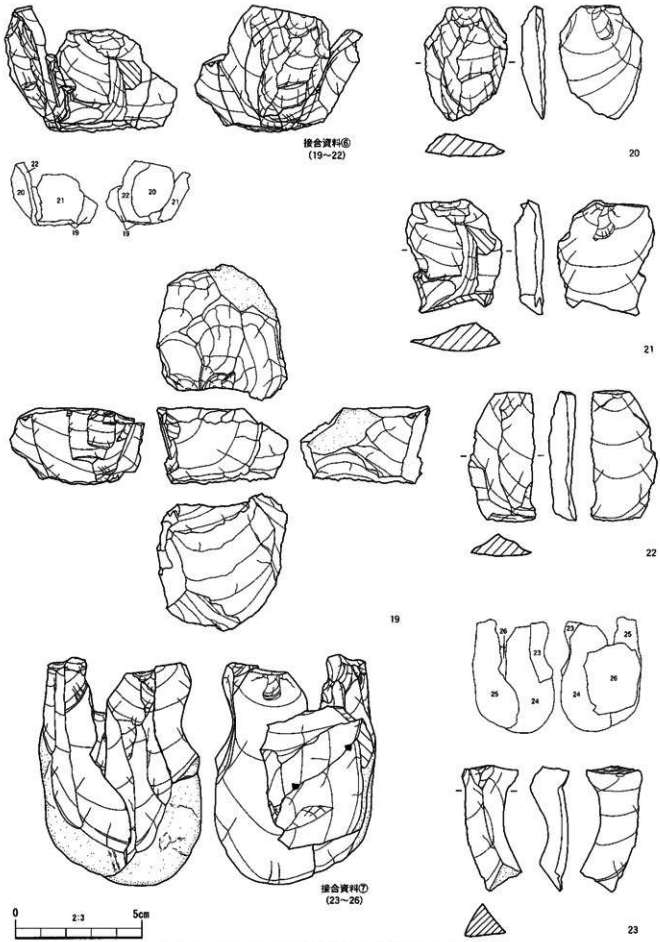
第16図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図②（S＝2/3）



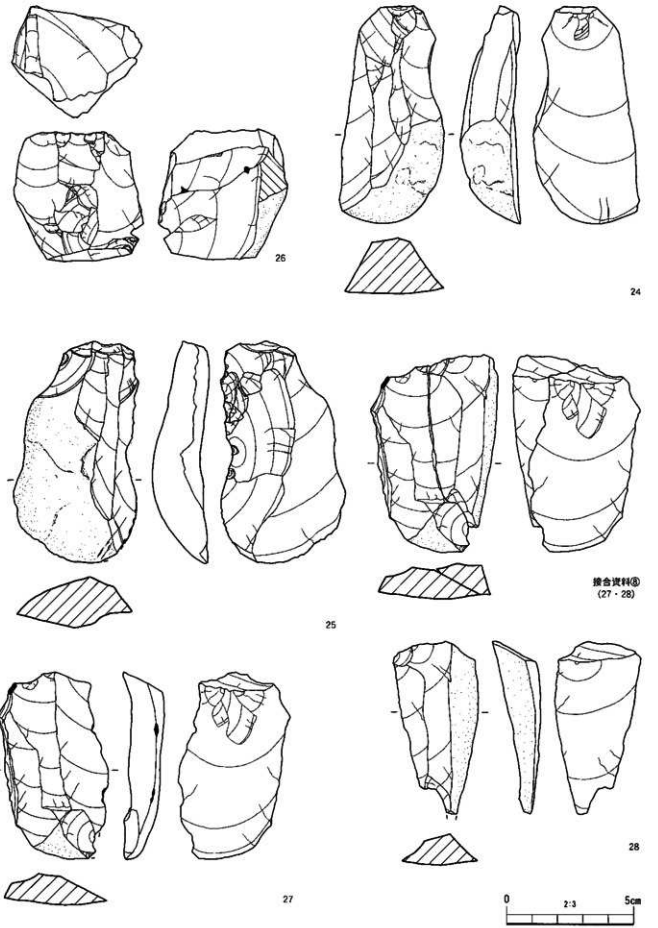
第17図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図③（S＝2/3）



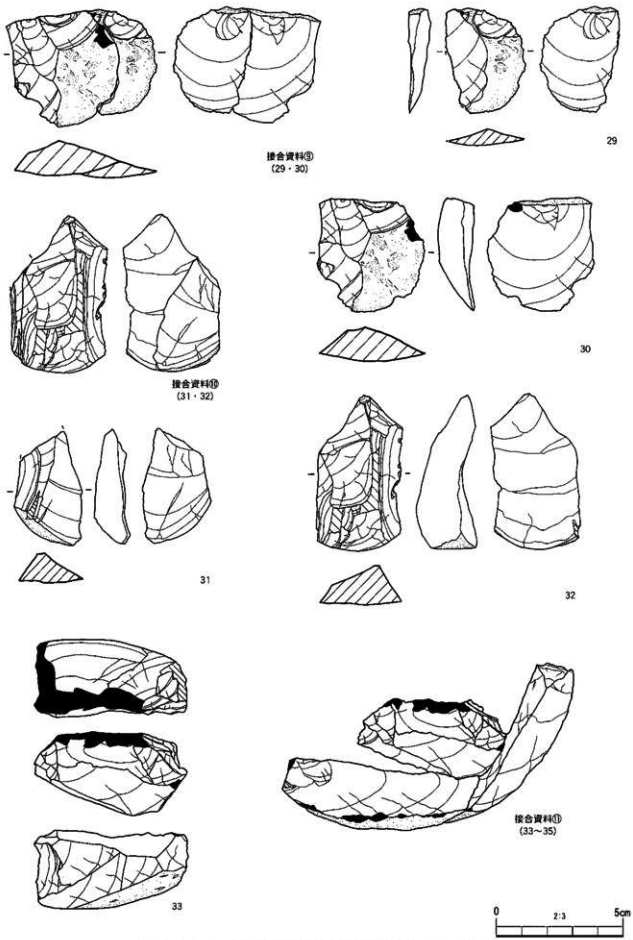
第18図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図④（S＝2/3）



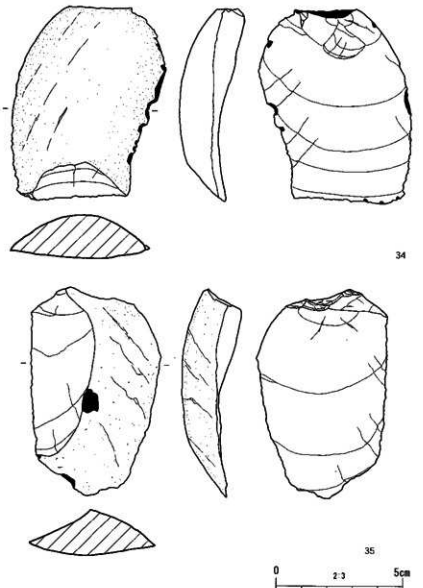
第19図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑤（S＝2/3）



第20図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑥（S＝2/3）



第21図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑦（S＝2/3）



第22図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑧（S＝2/3）

接合資料⑪（33～35）　ホルンフェルス製で剥片２点・石核１点が接合する。35→34と剥離したのち作業面を転回しながら剥片剥離を行ったと考えられる。残った石核が33である。

2．第２ブロック

第２ブロックはグリッドＢ１区で検出された。出土した石器は敲石１点、二次加工ある剥片３点、石核４点、砕片・剥片10点（うち３点は折れ面で接合）である。使用石材は全て砂岩である。第２ブロックでは接合状況から一つの母岩を用いた石器製作のみ行ったと考えられる。

敲石（50）　砂岩製で両端に敲打痕が確認できる。接合資料⑫の石器製作に用いられた敲石と考えられる。

接合資料⑫（36～49）　砂岩製で剥片12点（うち３点は折れ面で接合）・石核４点が接合する。43→数枚の剥片剥離→47→形成された面を打面とする→48→42→数枚の剥片剥離→形成された面を打面とする→46→数枚の剥片剥離→41→１枚の剥片剥離→36→37・45・49→打面を90°回転→40→打面をもとに戻す→39→打面を90°回転→38→打面をもとに戻す→数枚の剥片剥離→44（残核）という作業工程が復元される。なお、37・45・49剥離後、39剥離前の間に37・45・49の打面を180°回転し、一枚の剥片剥離を行っている。剥離後38、40、48を石核に転じている。43、46、47には二次加工が施される。37・45・49は剥離後45→37→49の順でさらに剥離されている。

3．第３ブロック

第３ブロックはグリッドＡ１区で検出された。出土した石器は二次加工ある剥片２点、石核３点（うち２点は折れ面で接合）、砕片・剥片26点である。使用石材は砂岩１点、流紋岩19点、頁岩10点、ホルンフェルス１点である。流紋岩・頁岩が主体のブロックと言えよう。剥離面で接合した資料は１点も出土していない。

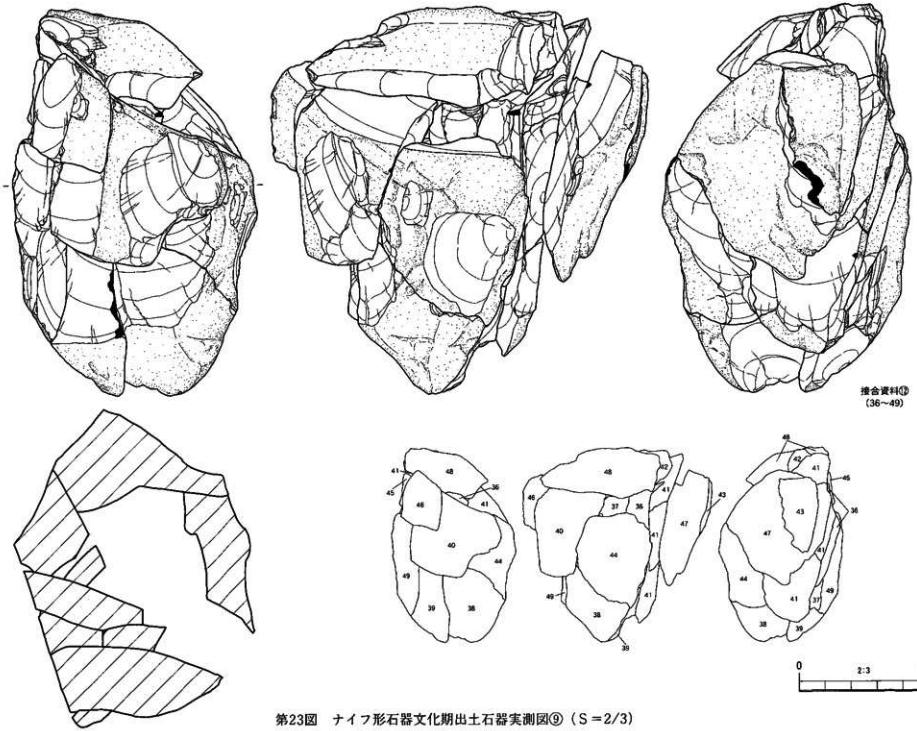
4．第４ブロック

第４ブロックはグリッドＡ３区で検出された。出土した石器は石核１点、砕片・剥片５点である。調査区外にブロックの範囲は広がるものと思われる。使用石材は頁岩５点であり、全て同一母岩と考えられる。

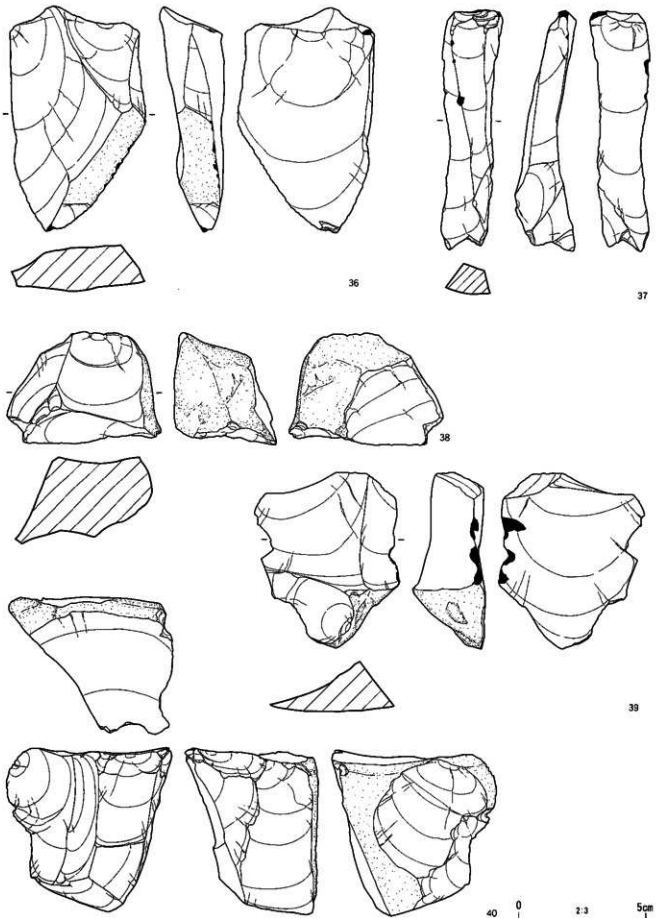
接合資料⑬（51・52）　頁岩製で剥片２点が接合する。52→数枚の剥片剥離→51（残核）という作業工程が復元される。51は左側縁部に刃部調整を施し、スクレイパーに転用している。

5．ブロック以外の石器

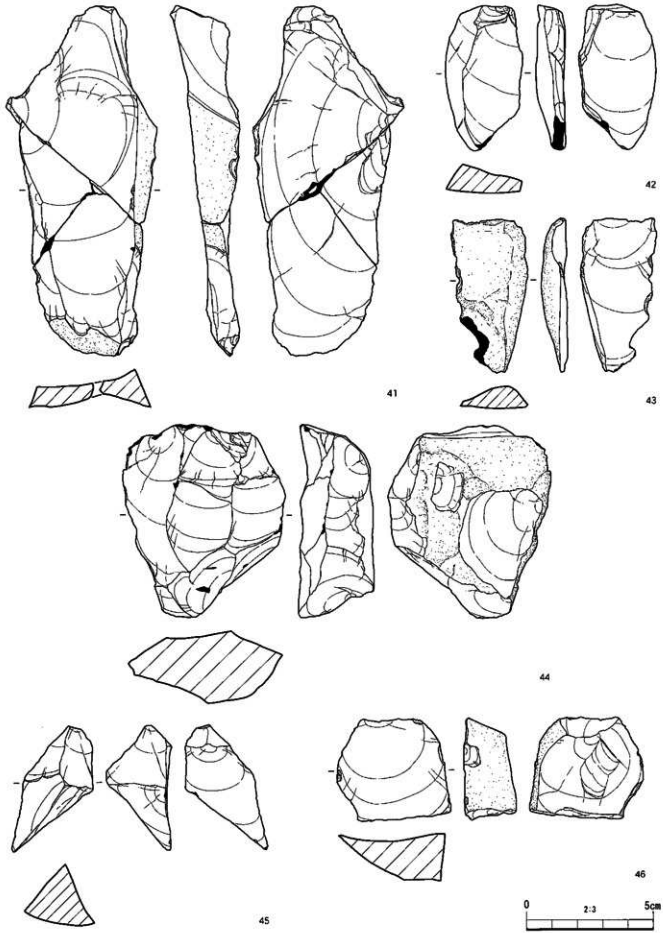
ブロック以外からはスクレイパー１点、二次加工ある剥片１点・砕片・剥片６点出土している。使用石材は流紋岩４点・頁岩４点である。



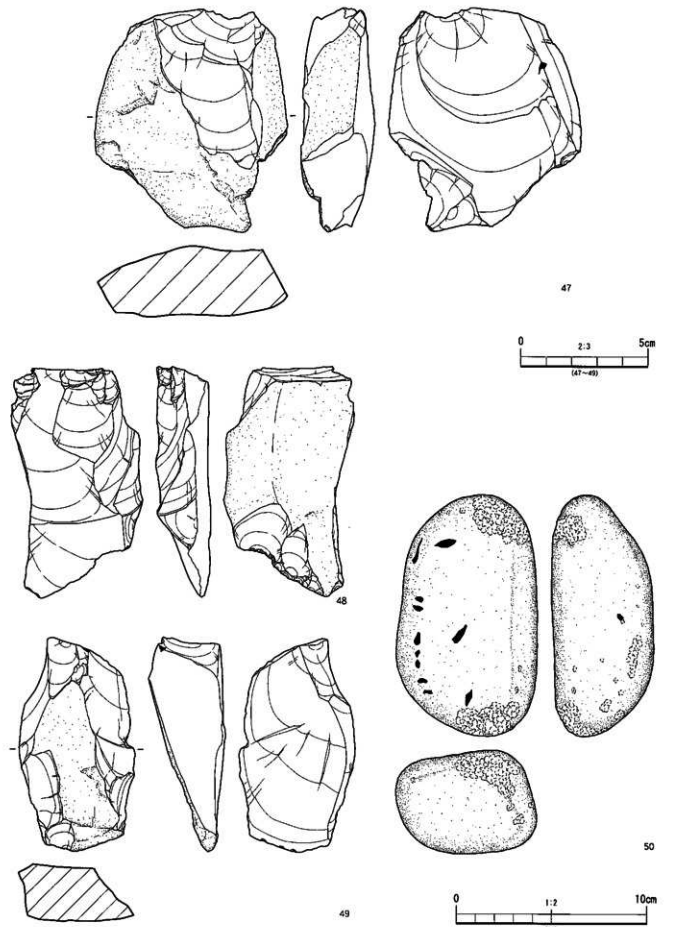
第23図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑨（S＝2/3）



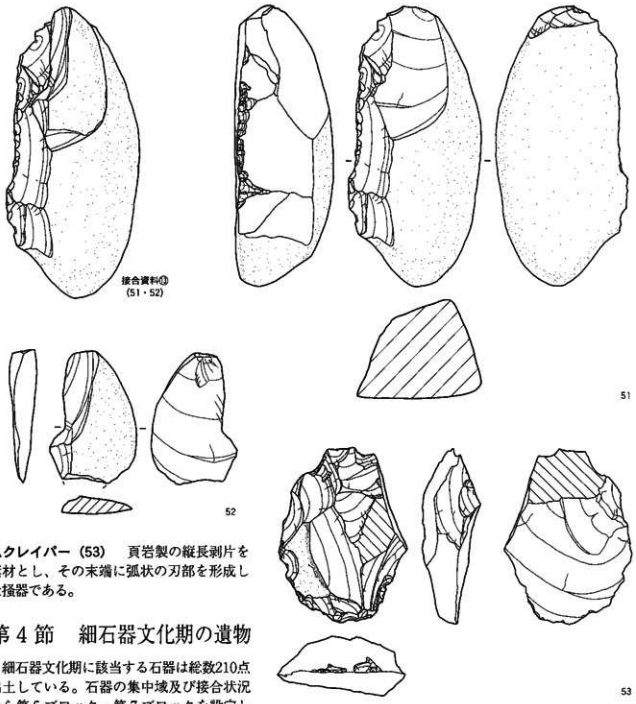
第24図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑩（S＝2/3）



第25図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑪（S＝2/3）



第26図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑫（S＝2/3、1/2）



第27図　ナイフ形石器文化期出土石器実測図⑬（S＝2/3）

スクレイパー（53）　頁岩製の縦長剥片を素材とし、その末端に弧状の刃部を形成した掻器である。

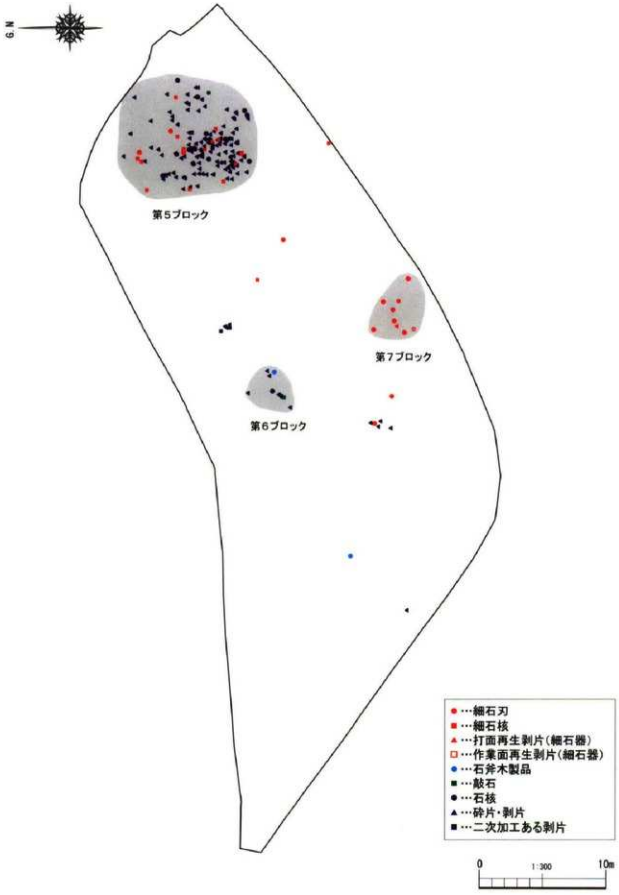
第４節　細石器文化期の遺物

細石器文化期に該当する石器は総数210点出土している。石器の集中域及び接合状況から第５ブロック～第７ブロックを設定した（第28・29図）。接合資料が多数検出されたが、各ブロックを結びつける資料は認められなかった。以下、各ブロックの説明を行う。

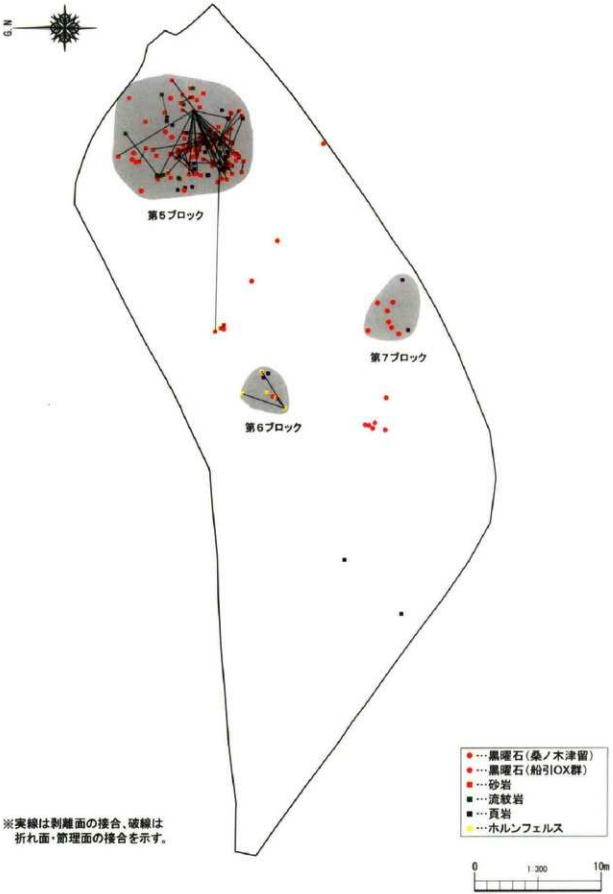
１．第５ブロック

第５ブロックはグリッドＣ１・Ｃ２区を中心とする。出土した石器は細石刃13点、細石刃核４点、敲石１点、石核14点、砕片・剥片143点である。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石17点、砂岩109点、流紋岩13点、頁岩36点である。

細石刃（54～65）　全て桑ノ木津留産黒曜石製である。細石刃は残存状況から完存品（62・63）、下部を折断するもの（57・58・60）、上部を折断するもの（59・64・65）、両端部を折断するもの（54～56・61）に分類できる。打面が残っている資料をみると全て打面調整が行われているようである。なお、57・60・62・65は縁辺に微細剥離が確認される。



第28図　細石器文化期出土石器分布図【器種別】（S＝1/300）



第29図　細石器文化期出土石器分布図【石材別】(S＝1/300)

細石刃核（66～69）　全て桑ノ木津留産黒曜石製である。いずれも自然面を有しており、小型の原礫または分割礫を素材として細石刃の生産には打面調整を施す細石刃核である。66～68は作業面が1面で背面に自然面を残し、細石刃生産が進行した場合には扁平な形態となり、側面観が板状または三角形状になるものである。69は作業面が複数面に及び最終形態が円柱状の形状となるもので、下端部には自然面を有している。

敲石（70）　砂岩製の亜円礫を素材とする。両端に敲打痕を確認できる。

接合資料⑭（71～79）　砂岩製で剥片7点・石核2点が接合する。73剥離後、節理により77を含む個体と71・72・74・75・76・78・79を含む個体の大きく二つに分かれ、それぞれ剥片剥離が行われたと考えられる。71・72・74・75・76・78・79を含む個体では節理面を打面とし、78・72→数枚の剥片剥離→75→形成された剥離面を打面とする→71・76→再び節理面を打面とする→74→79（残核）という作業工程が復元される。73は剥離後石核として利用される。75は二次加工が施される。71・76は1枚の剥片として剥離された後、さらに加撃され分割される。

接合資料⑮（80～97）　砂岩製で剥片17点・石核1点が接合する。節理により82・91が剥離した後、自然面を打面とし94→85→数枚の剥片剥離→86・89→打面を90°回転する→90→打面をもとに戻す→96→数枚の剥片剥離→88→87→95→数枚の剥片剥離→97→数枚の剥片剥離→93（→数枚の剥片剥離→83）・80（→81）→数枚の剥片剥離→87の剥離で生じた剥離面を作業面とする→92→数枚の剥片剥離→84（残核）という作業工程が復元される。86・89は1枚の剥片として剥離された後、さらに加撃され分割される。

接合資料⑯（98～100）　頁岩製で剥片3点が接合する。100→1枚の剥片剥離→98→打面を180°回転→99という作業工程が復元される。礫面を除去するための初期段階の剥片剥離工程を示す資料と考えられる。

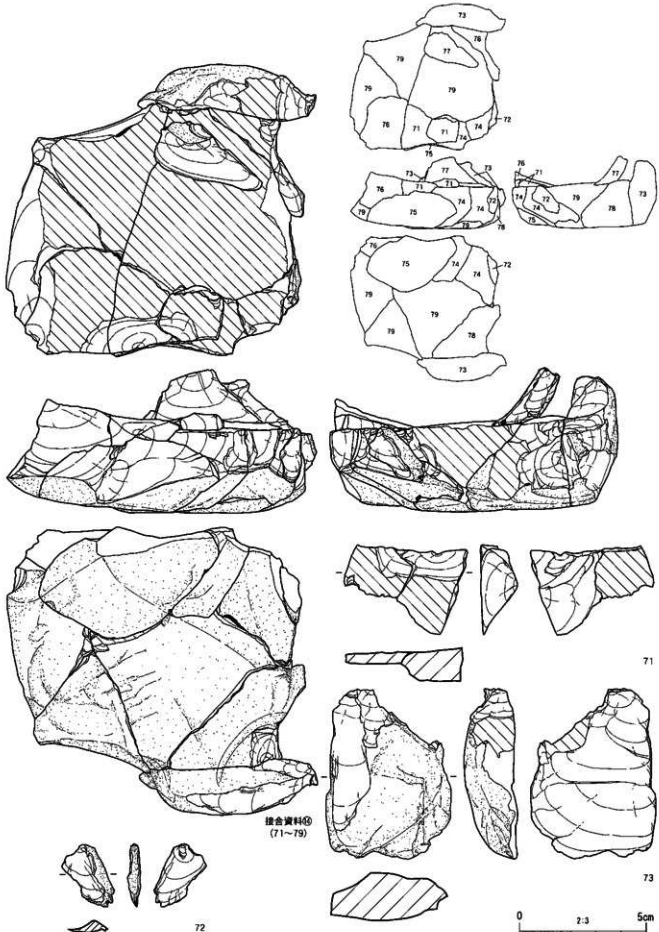
接合資料⑰（101・102）　流紋岩製で剥片2点が接合する。102→数枚の剥片剥離→101という作業工程が復元される。

接合資料⑱（103・104）　砂岩製で剥片2点が接合する。103→数枚の剥片剥離→104という作業工程が復元される。

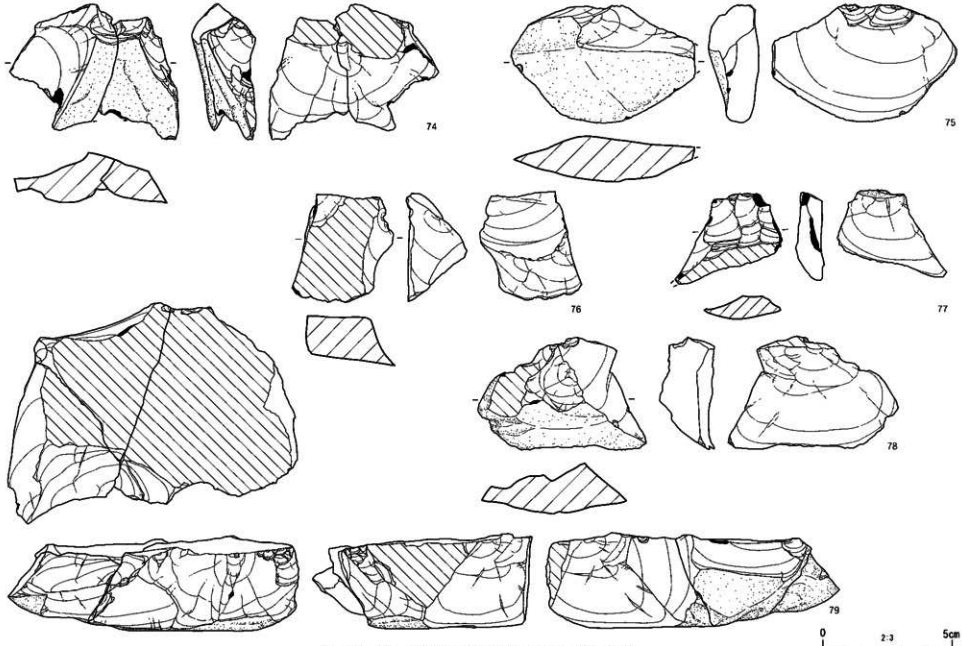
接合資料⑲（105～109）　砂岩製で剥片5点が接合する。105→数枚の剥片剥離→106→打面を90°回転→数枚の剥片剥離→109→108→107という作業工程が復元される。110は接合資料⑲と同一母岩と考えられる石核である。

接合資料⑳（111～113）　砂岩製で剥片2点・石核1点が接合する。節理により111を含む個体と112・113を含む個体の大きく二つに分かれ、それぞれ剥片剥離が行われたと考えられる。112・113を含む個体では112→数枚の剥片剥離→113（残核）という作業工程が復元される。

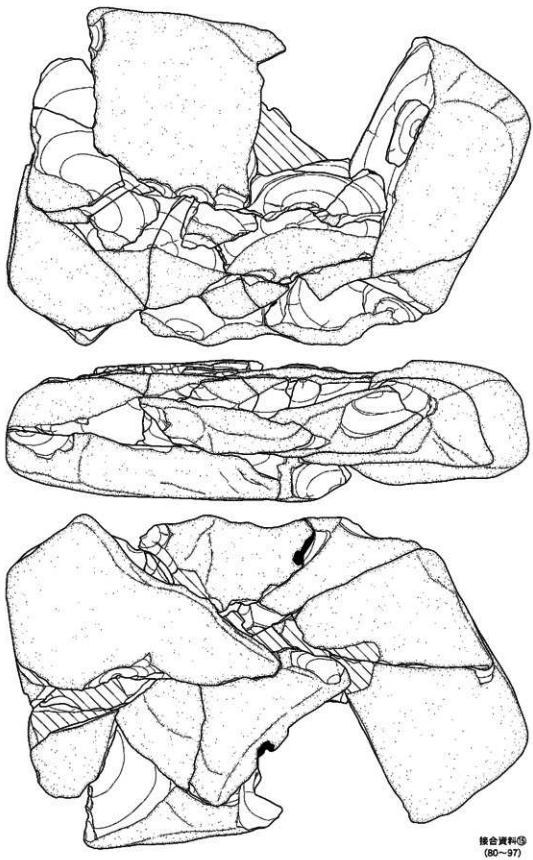
第30図　細石器文化期出土石器実測図①（S＝2/3、1/2）



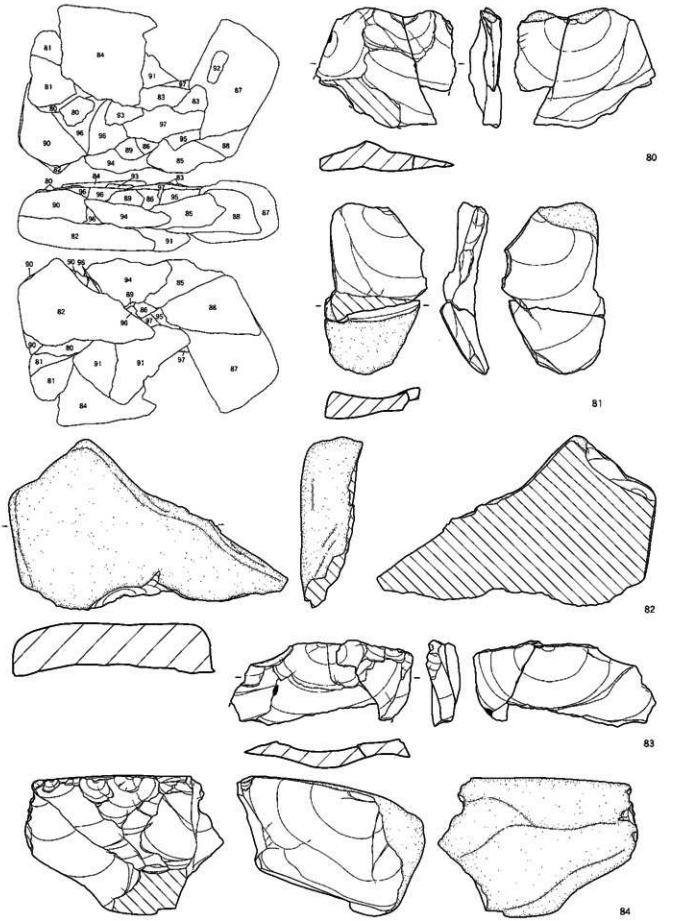
第31図　細石器文化期出土石器実測図②（S＝2/3）



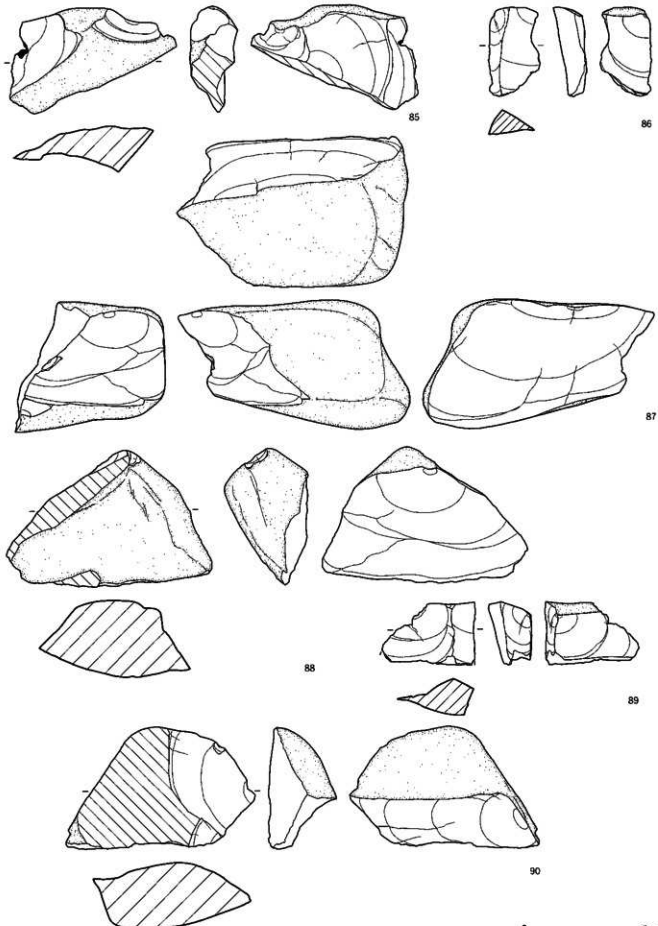
第32図　細石器文化期出土石器実測図③（S＝2/3）



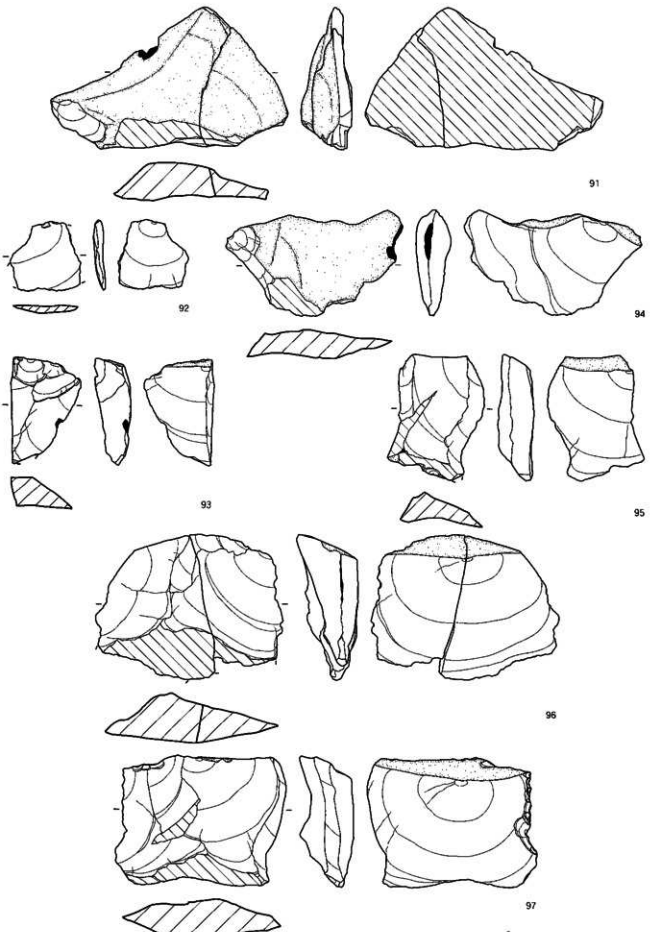
第33図　細石器文化期出土石器実測図④（S＝2/3）



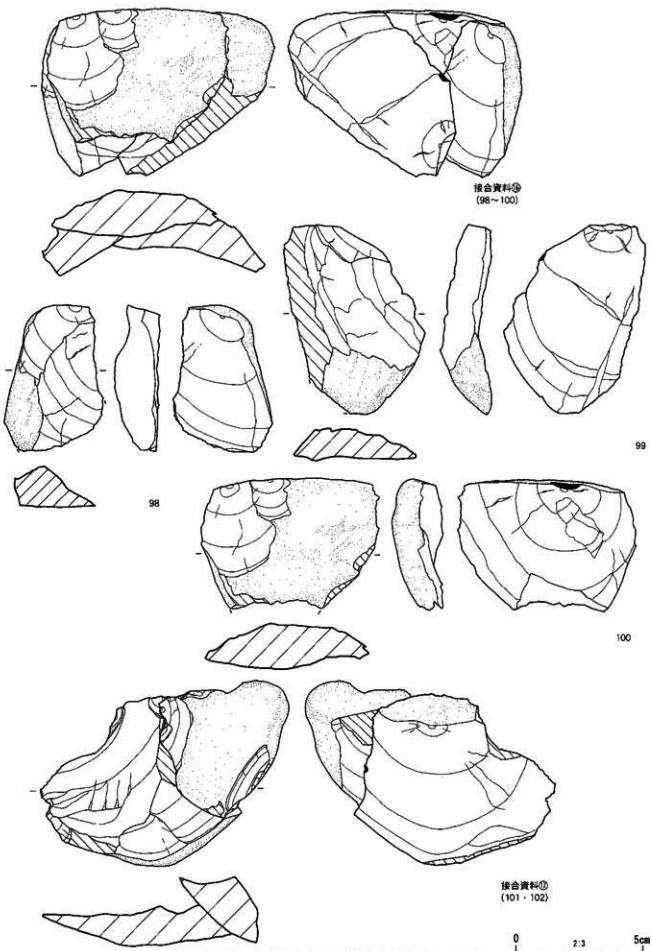
第34図　細石器文化期出土石器実測図⑤（S＝2/3）



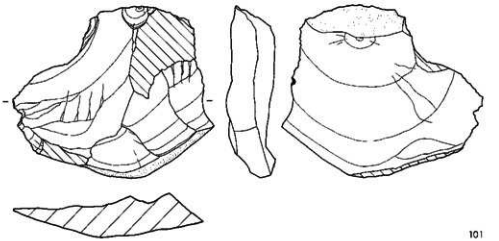
第35図　細石器文化期出土石器実測図⑥（S＝2/3）

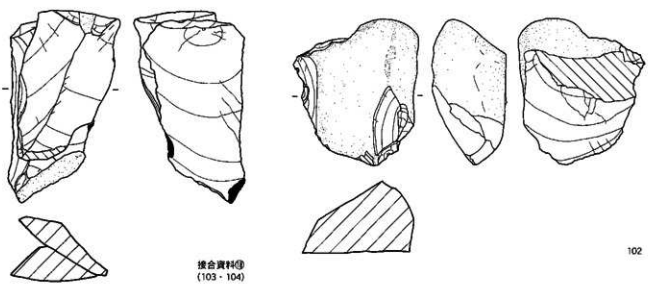


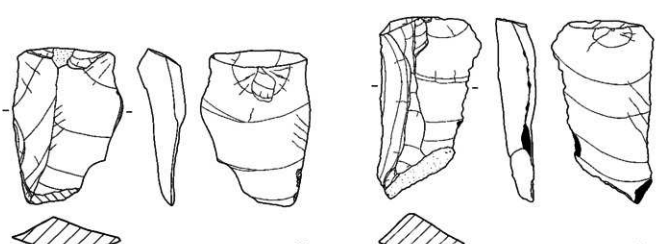
第36図　細石器文化期出土石器実測図⑦（S＝2/3）



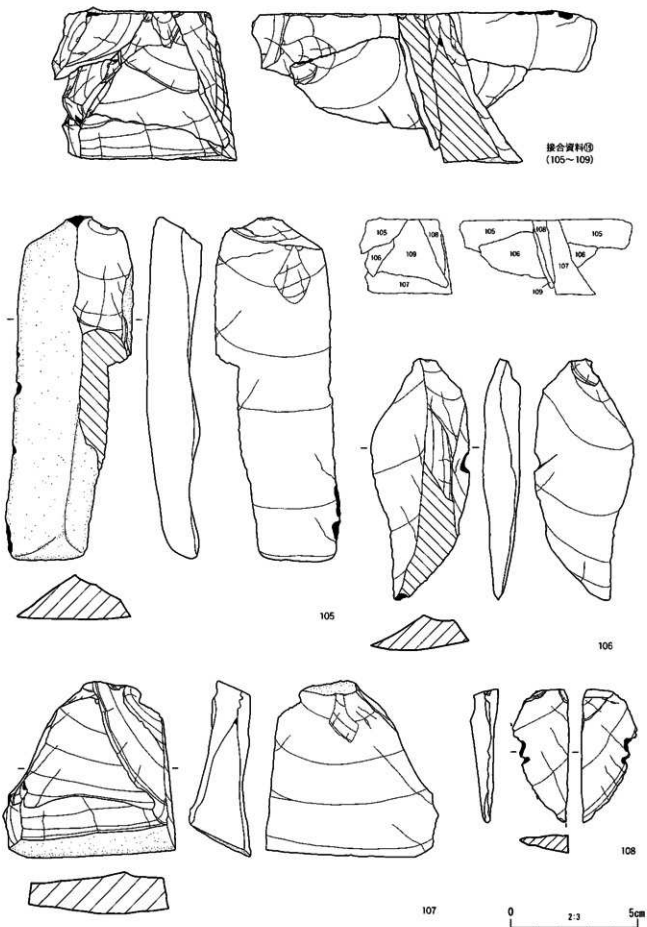
第37図　細石器文化期出土石器実測図⑧（S＝2/3）





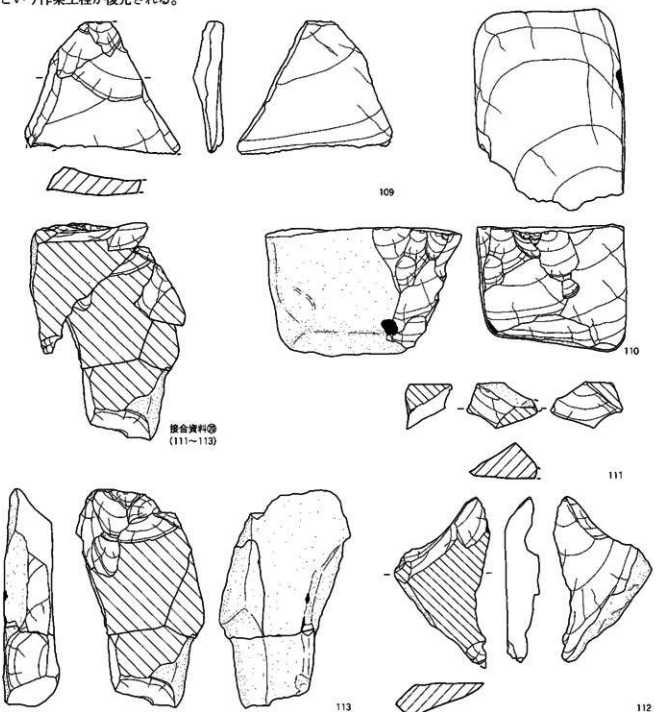


第38図　細石器文化期出土石器実測図⑨（S＝2/3）

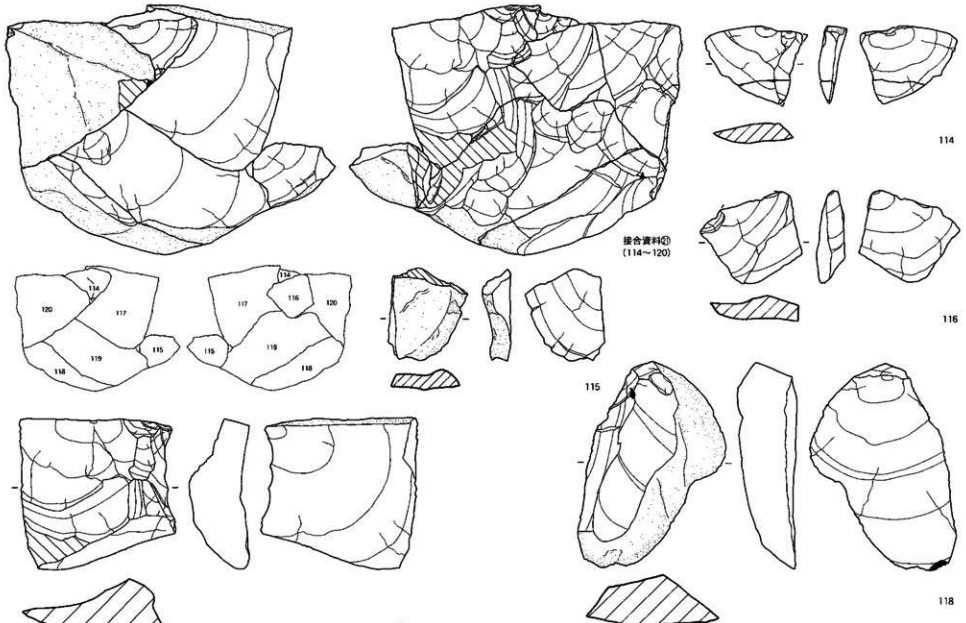


第39図　細石器文化期出土石器実測図⑩（S＝2/3）

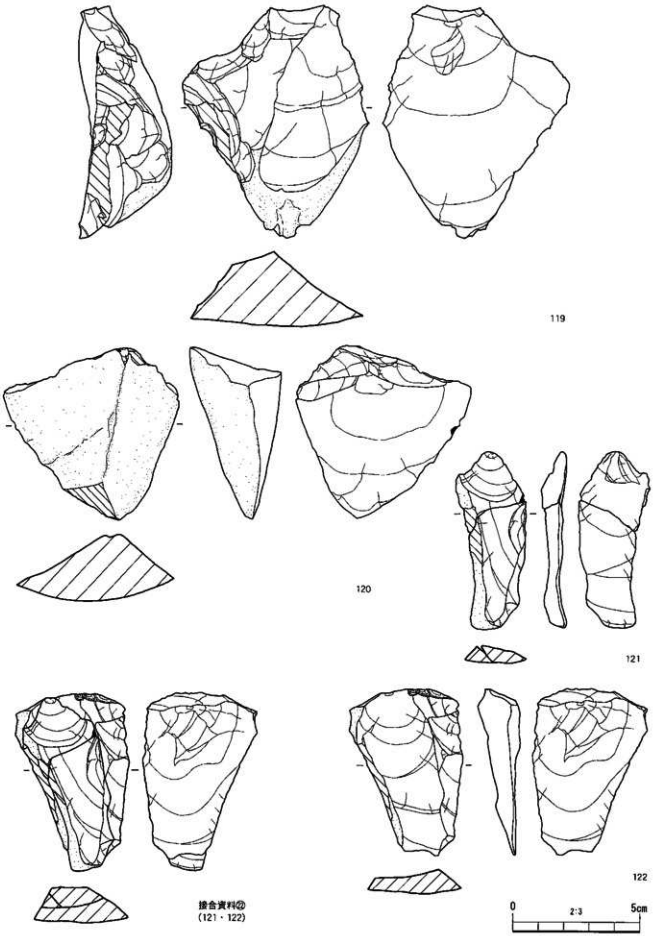
接合資料㉑（114～120）　砂岩製で剥片７点が接合する。115・116→打面を90°回転する→120→形成された面を打面とする→118→119→打面を90°回転する→117→数枚の剥片剥離→114という作業工程が復元される。
接合資料㉒（121・122）　砂岩製で剥片２点が接合する。121→122という作業工程が復元される。
接合資料㉓（123～125）　砂岩製で剥片１点・石核２点が接合する。剥片剥離を行う過程で節理により125を含む個体と123・124を含む個体の大きく二つに分かれ、それぞれ再び剥片剥離が行われたと思われる。123・124を含む個体では123→数枚の剥片剥離→124（残核）という作業工程が復元される。
接合資料㉔（126・127）　流紋岩製で剥片２点が接合する。126→127という作業工程が復元される。
接合資料㉕（128～131）　砂岩製で剥片３点・石核１点が接合する。130→128→129→131（残核）という作業工程が復元される。131は縁辺に連続的な調整を行っている。
接合資料㉖（132～134）　砂岩製で剥片２点・石核１点が接合する。134→数枚の剥片剥離→133→132（残核）という作業工程が復元される。



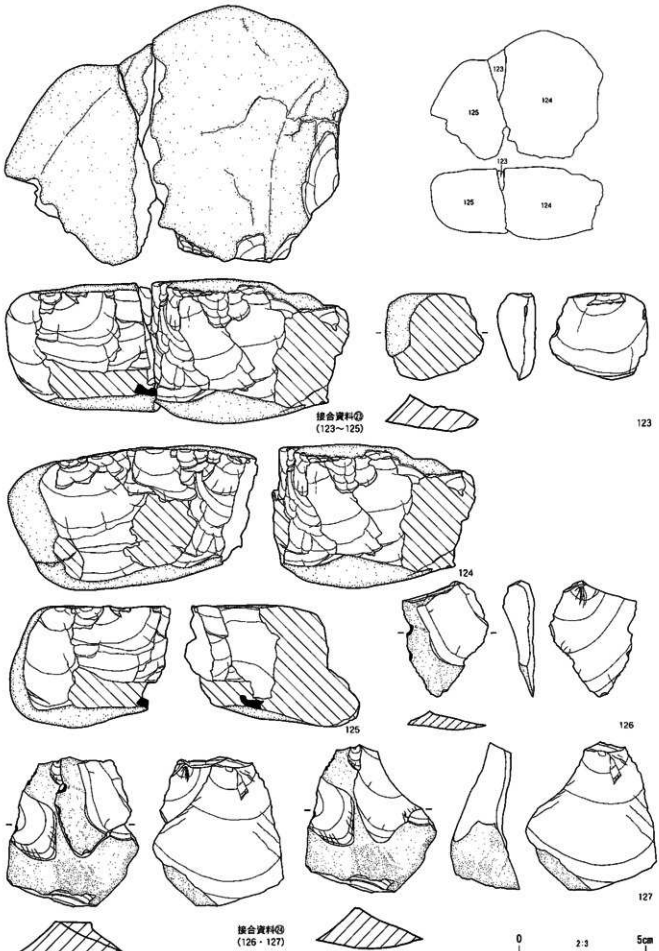
第40図　細石器文化期出土石器実測図①（S＝2/3）



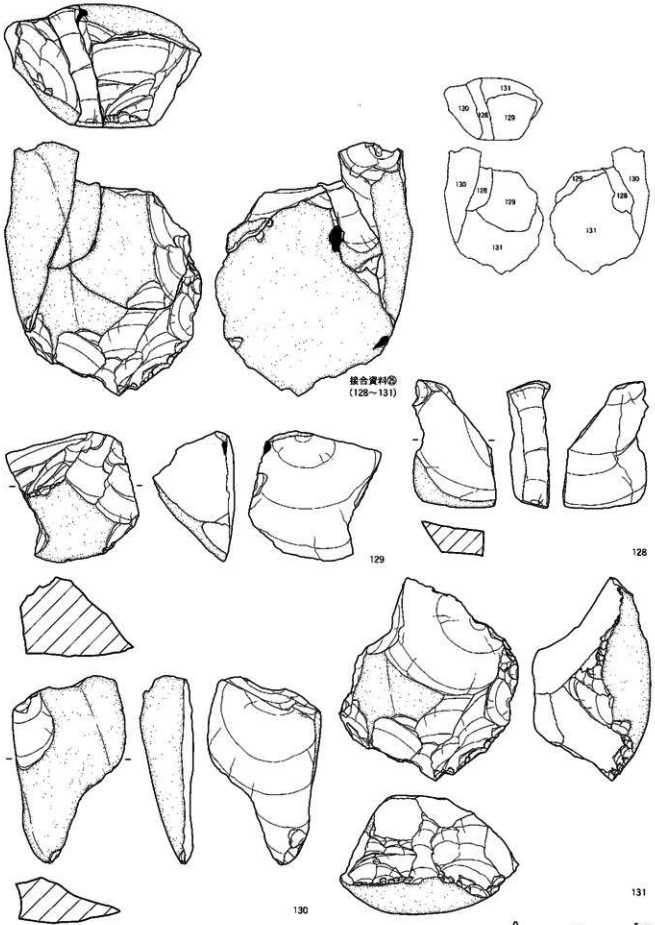
第41図　細石器文化期出土石器実測図⑫（S＝2/3）



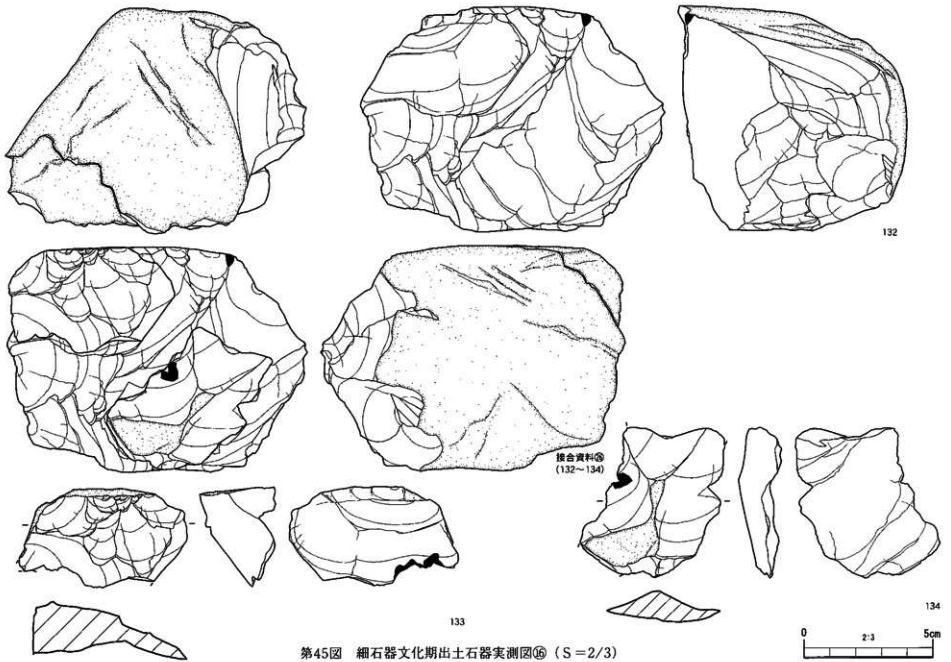
第42図　細石器文化期出土石器実測図⑬（S＝2/3）



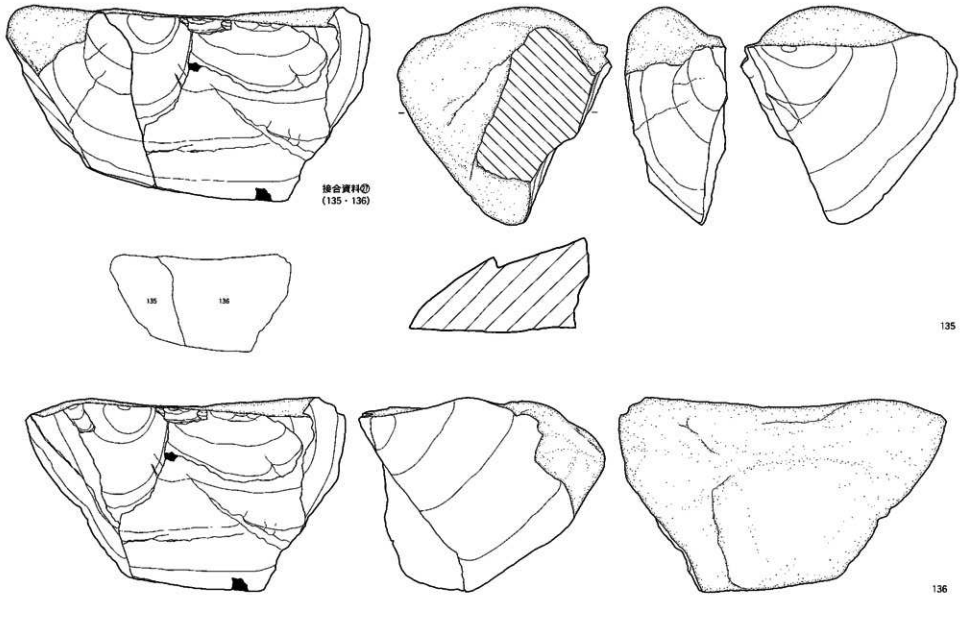
第43図　細石器文化期出土石器実測図⑭（S＝2/3）



第44図　細石器文化期出土石器実測図⑮（S＝2/3）



第45図　細石器文化期出土石器実測図⑯（S＝2/3）



第46図　細石器文化期出土石器実測図⑰（S＝2/3）

接合資料㉗（135・136）　砂岩製で剥片１点・石核１点が接合する。135→数枚の剥片剥離→136（残核）という作業工程が復元される。

接合資料㉘（137・138）　砂岩製で剥片２点が接合する。137→138という作業工程が復元される。

接合資料㉙（139・140）　砂岩製で剥片２点が接合する。140→139という作業工程が復元される。

接合資料㉚（141・142）　砂岩製で剥片２点が接合する。142→数枚の剥片剥離→141という作業工程が復元される。

２．第６ブロック

第６ブロックはグリッドＢ２区に位置する。出土した石器は細石刃１点、敲石１点、石核２点、砕片・剥片５点である。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石１点、船引ＯＸ群黒曜石１点、砂岩１点、頁岩１点、ホルンフェルス５点である。

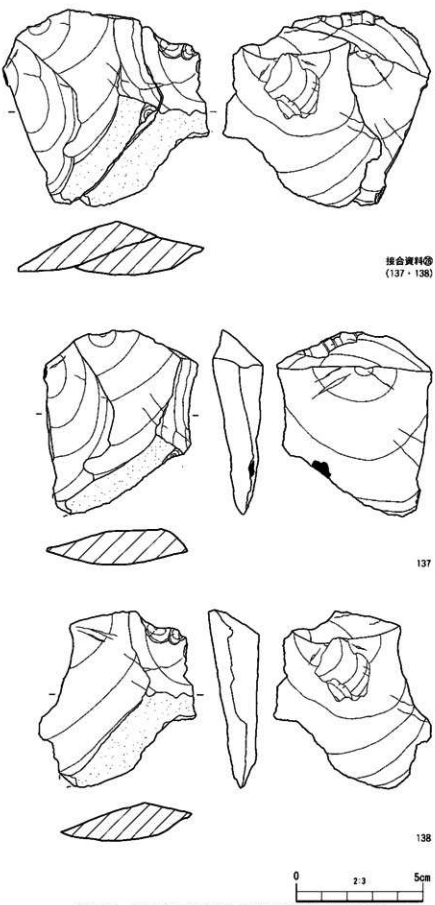
接合資料㉛（143～146）　ホルンフェルス製で剥片２点・石核２点が接合する。節理により143が剥離した後、節理面を打面とし、146→144と剥離される。残った石核が145である。147は接合資料㉛と同一母岩と考えられる石核である。左側縁部に刃部調整を施し、スクレイパーに転用している。

敲石（148）　砂岩製で、両端に敲打痕を確認できる。

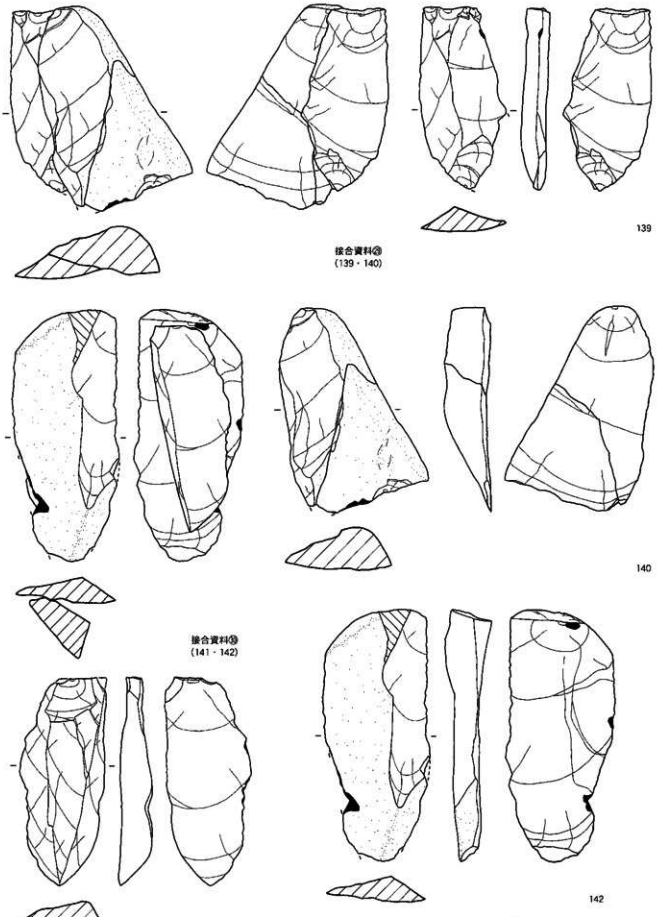
３．第７ブロック

第７ブロックからは細石刃１点、細石刃核６点、打面再生剥片１点、作業面再生剥片１点出土している。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石７点、頁岩２点である。

細石刃核（149～154）　154は頁岩製でその他は全て桑ノ木津留産黒曜石製である。黒曜石製のものは全て自然面を有するもので小型の原礫または分割礫を素材として細石刃の生産には打面調整を施す細石刃核である。頁岩製のものは剥片を素材とする。149・150は第５ブロックの66～68と同じ特徴を持つものである。



第47図　細石器文化期出土石器実測図⑱（Ｓ＝2/3）



第48図　細石器文化期出土石器実測図⑲（S＝2/3）

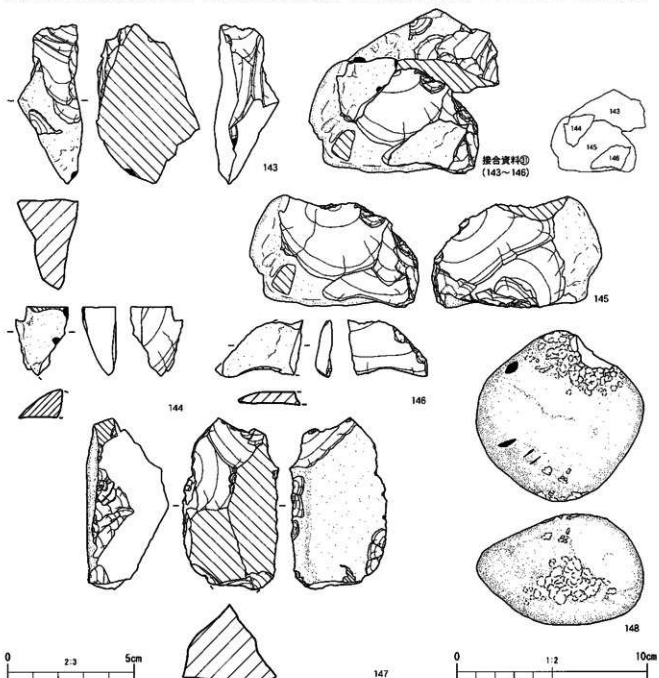
151は作業面を２面設定している。152は作業面を３面設定しておりそのうちの１面は打面を180°転回して細石刃を生産している。153は黒曜石の小型の原礫を素材としており、そのうちの一面に作業面を設定している。打面調整は側面方向と作業面方向からの２方向から行われている。154は頁岩製の剥片を素材としてその下端の木口部分に作業面を設定するものである。打面調整は素材剥片の側縁部に主要剥離面側からの加撃により行う。下縁調整は行われていない。清武上猪ノ原遺跡第５地区のSC−329にて石鏃との共伴が確認された細石刃核と特徴が類似している。

細石刃核打面再生剥片（155）　桑ノ木津留産黒曜石製である。細石刃核の作業面の方向からの打面調整の様子がうかがえ、打面調整と同じ方向からの加撃によって細石刃核から本資料を剥ぎ取っている。

細石刃核作業面再生剥片（156）　頁岩製である。上端部には打面調整の痕跡を残す。

4．ブロック以外の石器

細石刃２点、細石刃核３点、石斧未製品２点、二次加工ある剥片２点、砕片・剥片８点出土している。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石７点、船引ＩＯＸ群黒曜石５点、砂岩１点、頁岩３点、ホルンフェルス１点である。

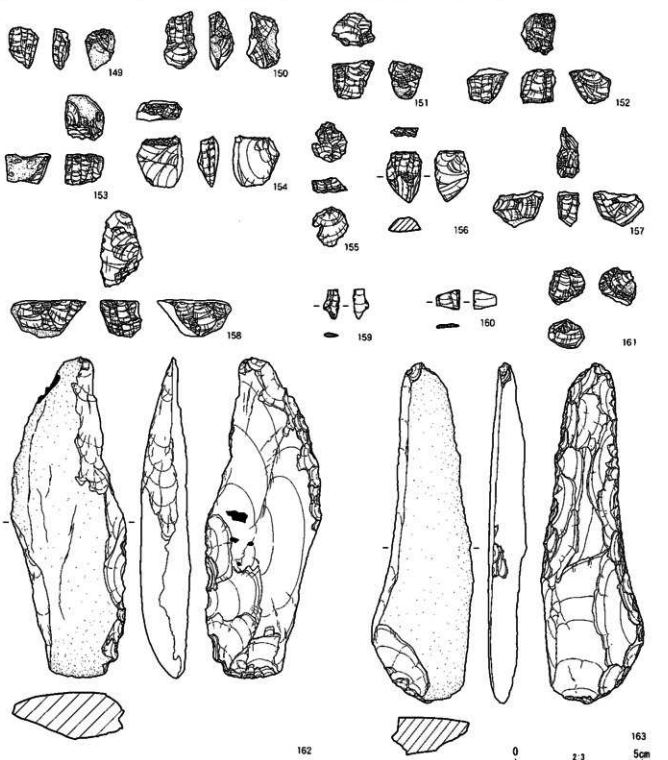


第49図　細石器文化期出土石器実測図②（S＝2/3、1/2）

細石刃（159・160）　桑ノ木津留産黒曜石製で両端部を折断するものである。

細石刃核（157・158・161）　いずれも自然面を有している。157は桑ノ木津留産黒曜石製で素材となる自然面を有する厚手の剥片の側縁部付近に作業面を設定する。体部調整を施し、打面調整は両側縁側から行っている。158は船引ＯＸ群製の細石刃核で素材となる厚手の剥片の下端部に作業面を１面設定し、側面調整を打面方向から施している。細石刃の生産には打面調整を側縁部側と作業面側からの２方向から行っている。161は桑ノ木津留産黒曜石製で、打面調整を行って細石刃を生産し、その後作業面を転回し２面の作業面が接する形で新しい作業面を設定している。

石斧未製品（162・163）　いずれも頁岩製で礫面を残す剥片を素材とする。基部調整は行われているが、刃部調整はあまり行われず明瞭な刃部を形成していない。そのため未製品として報告する。



第50図　細石器文化期出土石器実測図㉑（Ｓ＝2/3）

第２表　旧石器時代の石器計測表①

報告書No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	実測No.
1	ナイフ形石器	C1区	X	砂岩	5.1	1.8	1.0	6.8		144
2	ナイフ形石器	C1区	IX	頁岩	(4.95)	1.8	0.9	(6.1)	欠損あり	145
3	スクレイパー	C1区	IX	流紋岩	11.25	9.45	3.3	393.8		155
4	ナイフ形石器	C1区	X I	頁岩	(2.95)	1.7	0.8	(4.0)	接合資料① 欠損あり	470
5	剥片	C1区	X I	頁岩	8.0	4.9	3.7	49.9	接合資料①	473
6	剥片	C1区	X I	頁岩	5.85	(2.95)	0.8	(14.7)	接合資料① 欠損あり	471
7	剥片	C1区	IX	頁岩	4.3	2.7	0.9	6.3	接合資料①	472
8	剥片	C1区	X	砂岩	8.15	3.9	1.2	24.6	接合資料②	288
9	剥片	C1区	不明	砂岩	(4.05)	2.35	0.5	(5.6)	接合資料② 欠損あり	287
10	剥片	C1区	IX	流紋岩	5.4	5.35	1.3	27.2	接合資料③	214
11	二次加工ある剥片	C1区	X I	流紋岩	6.2	4.65	1.2	24.3	接合資料③	215
12	石核	C1区	IX	砂岩	9.8	7.4	3.35	200.0	接合資料④	394
13	剥片	B1区	VII	砂岩	2.9	4.3	1.85	(14.8)	接合資料④ 欠損あり	395
14	石核	C1区	X	砂岩	8.1	7.95	3.65	210.0	接合資料⑤	374
15	剥片	C1区	X I	砂岩	(4.6)	(4.9)	1.45	(17.5)	接合資料⑤ 欠損あり	378
16	剥片	C1区	X I	砂岩	3.4	(2.15)	0.5	(2.2)	接合資料⑤ 欠損あり	377
17	剥片	C1区	X I	砂岩	4.9	3.35	2.0	29.8	接合資料⑤	375
18	剥片	C1区	X	砂岩	7.6	6.6	1.4	60.5	接合資料⑤	376
19	石核	C1区	X I	頁岩	3.0	5.15	5.35	101.0	接合資料⑥	260
20	剥片	C1区	X I	頁岩	4.4	3.3	0.9	13.4	接合資料⑥	263
21	剥片	C1区	IX	頁岩	4.45	3.8	1.1	18.0	接合資料⑥	261
22	剥片	C1区	VII	頁岩	5.1	2.65	1.05	12.1	接合資料⑥	262
23	剥片	C1区	X I	流紋岩	4.9	2.4	1.5	7.7	接合資料⑦	486
24	二次加工ある剥片	C1区	IX	流紋岩	8.75	5.9	2.25	(72.9)	接合資料⑦ 欠損あり	487
25	剥片	C1区	X I	流紋岩	8.5	4.2	2.4	66.6	接合資料⑦	485
26	石核	C1区	X I	流紋岩	5.05	5.15	4.35	76.7	接合資料⑦	488
27	剥片	C1区	IX	砂岩	7.35	4.4	1.65	(41.7)	接合資料⑧ 欠損あり	223
28	剥片	C1区	VII	砂岩	(6.8)	3.85	1.9	(29.1)	接合資料⑧ 欠損あり	224
29	剥片	C1区	X I	頁岩	4.1	3.15	0.9	(8.1)	接合資料⑨ 欠損あり	233
30	剥片	C1区	X	頁岩	4.4	4.25	0.95	23.9	接合資料⑨	232
31	剥片	C1区	IX	頁岩	(4.5)	2.75	1.3	(12.5)	接合資料⑩ 欠損あり	279
32	剥片	C1区	X	頁岩	6.1	3.5	2.4	41.2	接合資料⑩	280
33	石核	C1区	X I	ホルンフェルス	3.25	6.05	3.05	54.4	接合資料⑪	481
34	剥片	C1区	X I	ホルンフェルス	7.5	6.05	2.5	75.8	接合資料⑪	482
35	剥片	C1区	X I	ホルンフェルス	8.2	5.15	2.3	59.6	接合資料⑪	483
36	剥片	B1区	X	砂岩	8.6	5.35	2.55	84.3	接合資料⑫	343
37	剥片	B1区	X	砂岩	9.2	2.35	1.2	29.9	接合資料⑫	341
38	石核	B1区	X	砂岩	4.4	6.1	4.05	79.1	接合資料⑫	332
39	剥片	B1区	X	砂岩	6.95	5.75	2.9	62.1	接合資料⑫	333
40	石核	B1区	X	砂岩	6.5	6.55	5.25	151.8	接合資料⑫	336
41	剥片	B1区	X	砂岩	13.55	5.95	2.8	(98.7)	接合資料⑫ 欠損あり 折れ面接合	330
42	剥片	B1区	X	砂岩	5.6	3.05	1.65	17.9	接合資料⑫	338
43	二次加工ある剥片	B1区	X	砂岩	5.95	3.05	1.0	16.9	接合資料⑫	335
44	石核	B1区	X	砂岩	7.5	6.45	3.05	112.6	接合資料⑫	331
45	剥片	B1区	X	砂岩	4.85	3.25	2.6	15.7	接合資料⑫	340
46	二次加工ある剥片	B1区	X	砂岩	4.0	4.5	2.1	32.0	接合資料⑫	337
47	二次加工ある剥片	B1区	X	砂岩	8.7	7.65	2.95	198.2	接合資料⑫	334
48	石核	B1区	X	砂岩	9.05	5.2	2.15	93.3	接合資料⑫	339
49	剥片	B1区	X	砂岩	8.4	4.6	3.05	94.5	接合資料⑫	342
50	敲石	B1区	X	砂岩	12.6	7.4	5.4	731.0		65
51	石核	A3区	X I	頁岩	10.9	5.3	3.9	276.5	接合資料⑬ スクレイパーに転用	265
52	剥片	A3区	X I	頁岩	(5.15)	3.4	1.1	(16.6)	接合資料⑬ 欠損あり	266
53	スクレイパー	C2区	X I	頁岩	6.8	5.05	3.3	68.5		154
54	細石刃	C1区	IX	黒曜石(桑ノ木津留)	1.0	0.55	0.15	0.1		173
55	細石刃	C1区	IX	黒曜石(桑ノ木津留)	0.95	0.7	0.15	0.1		171
56	細石刃	C1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.35	0.55	0.2	0.1		176

第３表　旧石器時代の石器計測表②

報告書No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	実測No.
57	細石刃	C2区	Ⅵ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.4	0.75	0.2	0.2		179
58	細石刃	C1区	Ⅸ	黒曜石(桑ノ木津留)	0.9	0.95	0.15	0.1		172
59	細石刃	C1区	Ⅶ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.5	0.75	0.3	0.2		177
60	細石刃	C1区	Ⅸ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.6	0.95	0.2	0.3		174
61	細石刃	C2区	Ⅶ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.5	0.55	0.2	0.1		178
62	細石刃	C2区	Ⅸ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.9	0.75	0.15	0.2		175
63	細石刃	C1区	Ⅹ	黒曜石(桑ノ木津留)	2.65	0.85	0.25	0.4		169
64	細石刃	C1区	Ⅸ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.75	1.2	0.3	0.8		170
65	細石刃	C1区	Ⅹ Ⅰ	黒曜石(桑ノ木津留)	2.75	0.75	0.4	0.7		168
66	細石刃核	C1区	Ⅸ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.8	2.35	1.05	4.4		183
67	細石刃核	C2区	Ⅵ	黒曜石(桑ノ木津留)	2.7	2.0	1.0	4.3		189
68	細石刃核	C1区	Ⅵ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.6	1.65	0.9	2.3		188
69	細石刃核	C1区	Ⅸ	黒曜石(桑ノ木津留)	2.0	1.65	1.4	5.3		182
70	敲石	C1区	Ⅸ	砂岩	7.8	6.25	5.1	328.0		195
71	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	3.5	4.85	1.45	13.6	接合資料④ 折れ面接合	347
72	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	2.5	2.1	0.5	1.4	接合資料④	352
73	石核	C1区	Ⅸ	砂岩	6.75	5.0	2.1	77.7	接合資料④ 折れ面接合	351
74	剥片	C1区	Ⅷ・Ⅸ	砂岩	5.3	6.65	2.55	(52.0)	接合資料④ 欠損あり	349
75	二次加工ある剥片	B2区	Ⅸ	砂岩	4.6	(7.2)	1.95	(57.3)	接合資料④ 欠損あり	350
76	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	4.25	4.0	2.35	31.6	接合資料④	346
77	剥片	C2区	Ⅸ	砂岩	3.45	(4.25)	1.1	(10.3)	接合資料④ 欠損あり	353
78	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	4.45	6.65	2.15	44.0	接合資料④	348
79	石核	C1区	Ⅷ・Ⅸ	砂岩	3.75	11.4	8.65	400.0	接合資料④ 折れ面接合	345
80	剥片	C1・C2区	Ⅸ	砂岩	(4.7)	(5.55)	1.3	(25.1)	接合資料④ 欠損あり 折れ面接合	360
81	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	6.7	4.05	1.9	36.2	接合資料④ 折れ面接合	366
82	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	6.75	11.05	2.5	139.7	接合資料④	357
83	剥片	C1区	Ⅷ・Ⅸ	砂岩	(3.35)	(7.2)	1.35	(19.4)	接合資料④ 欠損あり 折れ面接合	371
84	石核	C1区	Ⅸ	砂岩	5.5	7.85	7.45	290.0	接合資料④	372
85	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	4.1	6.6	1.9	32.8	接合資料④	359
86	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	3.45	2.05	1.35	6.5	接合資料④	368
87	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	5.05	9.15	5.95	290.0	接合資料④	355
88	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	5.35	8.15	3.3	109.5	接合資料④	369
89	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	(2.45)	(3.7)	1.7	(12.5)	接合資料④ 欠損あり	367
90	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	4.8	7.5	2.7	84.1	接合資料④	358
91	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	5.55	9.4	2.05	75.2	接合資料④	356
92	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	2.75	(2.8)	0.45	(3.0)	接合資料④ 欠損あり	364
93	剥片	C2区	Ⅶ	砂岩	4.15	2.3	1.45	(12.9)	接合資料④ 欠損あり	365
94	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	4.15	7.0	1.4	30.7	接合資料④	370
95	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	(4.9)	3.8	1.45	(20.8)	接合資料④ 欠損あり	361
96	剥片	C1区	Ⅷ・Ⅸ	砂岩	(5.7)	(7.45)	2.45	(76.6)	接合資料④ 欠損あり 折れ面接合	363
97	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	5.15	6.75	2.2	69.1	接合資料④	362
98	剥片	C1区	Ⅸ	頁岩	(5.7)	(3.9)	1.8	(34.2)	接合資料④ 欠損あり	245
99	剥片	C1区	Ⅸ	頁岩	7.4	5.6	2.0	(61.1)	接合資料④ 欠損あり	246
100	剥片	C1区	Ⅸ	頁岩	(5.15)	7.05	2.0	(77.9)	接合資料④ 欠損あり	244
101	剥片	C1区	Ⅸ	流紋岩	6.75	8.0	1.9	(85.0)	接合資料④ 欠損あり	230
102	剥片	C1区	Ⅸ	流紋岩	5.7	5.05	2.9	80.0	接合資料④	229
103	剥片	B2区	Ⅸ	砂岩	6.2	4.35	1.9	33.5	接合資料④	238
104	剥片	B2区	Ⅸ	砂岩	7.1	4.05	1.65	37.6	接合資料④	239
105	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	13.38	5.03	2.1	125.7	接合資料④	475
106	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	6.41	3.9	1.95	42.6	接合資料④	476
107	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	7.0	6.8	2.45	104.3	接合資料④	477
108	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	5.3	(2.2)	1.1	(8.9)	接合資料④ 欠損あり	479
109	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	(5.2)	(6.15)	1.2	(24.7)	接合資料④ 欠損あり	478
110	石核	C1区	Ⅸ	砂岩	5.05	5.95	7.8	371.3	接合資料④と同母岩か	271
111	剥片	C1区	Ⅷ	砂岩	1.8	(2.8)	1.8	(5.7)	接合資料④ 欠損あり	457
112	剥片	C1区	Ⅸ	砂岩	(6.59)	3.5	1.3	(18.0)	接合資料④ 欠損あり	456

第4表　旧石器時代の石器計測表③

報告番No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm)			重量(g)	備考	実測No.
					最大長	最大幅	最大厚			
113	石核	C1・C2区	IX	砂岩	8.55	5.2	2.2	(96.4)	接合資料⑤ 欠損あり 折れ面接合	455
114	剥片	C1区	IX	砂岩	(3.5)	3.78	0.75	(9.5)	接合資料⑤ 欠損あり	447
115	剥片	C1区	VII	砂岩	(3.62)	(3.1)	1.1	(11.0)	接合資料⑤ 欠損あり	445
116	剥片	C1区	VII	砂岩	(3.65)	(3.92)	1.0	(12.4)	接合資料⑤ 欠損あり	446
117	剥片	C1区	IX	砂岩	5.95	6.15	2.4	75.4	接合資料⑤	441
118	剥片	C1区	IX	砂岩	8.1	5.8	2.3	84.6	接合資料⑤	444
119	剥片	C1区	IX	砂岩	9.05	7.45	3.7	162.9	接合資料⑤	442
120	剥片	C1区	IX	砂岩	6.8	6.95	3.6	100.3	接合資料⑤	443
121	剥片	C2区	IX	砂岩	7.0	2.8	1.0	(13.8)	接合資料⑤ 欠損あり 折れ面接合	276
122	剥片	C1区	IX	砂岩	6.5	4.5	1.7	34.9	接合資料⑤	277
123	剥片	C1区	IX	砂岩	3.3	3.8	1.5	15.8	接合資料⑤	328
124	石錐	C1区	IX	砂岩	5.6	9.8	7.95	560.0	接合資料⑤	326
125	石核	C1区	IX	砂岩	5.2	6.9	7.5	250.0	接合資料⑤	327
126	剥片	C2区	IX	流紋岩	4.5	3.45	1.25	9.1	接合資料⑤	252
127	剥片	C2区	IX	流紋岩	5.8	5.2	2.7	52.7	接合資料⑤	251
128	剥片	C1区	IX	砂岩	5.0	3.3	1.7	27.3	接合資料⑤	323
129	剥片	C1区	IX	砂岩	5.15	5.25	3.2	69.9	接合資料⑤	322
130	剥片	C1区	IX	砂岩	7.4	4.5	2.15	56.3	接合資料⑤	324
131	石核	C1区	IX	砂岩	8.0	7.05	4.75	210.0	接合資料⑤	321
132	石核	C1区	IX	砂岩	8.85	11.85	8.9	940.0	接合資料⑤	380
133	剥片	C1区	IX	砂岩	(3.9)	(6.65)	3.0	(44.6)	接合資料⑤ 欠損あり	381
134	剥片	C1区	IX	砂岩	(5.9)	(5.65)	1.65	(37.4)	接合資料⑤ 欠損あり	382
135	剥片	C1区	IX	砂岩	8.6	8.45	4.0	250.0	接合資料⑤	401
136	石核	C1区	IX	砂岩	7.7	12.55	9.75	890.0	接合資料⑤	400
137	剥片	C1区	IX	砂岩	(7.15)	6.1	1.95	(66.6)	接合資料⑤ 欠損あり	221
138	剥片	C1区	IX	砂岩	7.0	6.2	2.0	(51.1)	接合資料⑤ 欠損あり	220
139	剥片	C1区	IX	砂岩	(7.1)	(3.45)	1.0	(23.9)	接合資料⑤ 欠損あり	297
140	剥片	C1区	IX	砂岩	8.05	5.9	1.75	(61.6)	接合資料⑤ 欠損あり	298
141	剥片	C1区	IX	砂岩	8.2	3.45	1.35	33.5	接合資料⑤	226
142	剥片	C2区	IX	砂岩	(9.9)	4.3	1.9	(52.6)	接合資料⑤ 欠損あり	227
143	石核	B2区	VII	ホルンフェルス	6.2	2.6	4.05	45.2	接合資料⑥	309
144	剥片	B2区	VI	ホルンフェルス	(3.65)	(2.1)	(1.3)	(5.4)	接合資料⑥ 欠損あり	310
145	石核	B2区	VII	ホルンフェルス	4.35	6.7	4.4	129.0	接合資料⑥	308
146	剥片	B2区	VII	ホルンフェルス	(2.2)	(3.15)	(0.6)	(4.1)	接合資料⑥ 欠損あり	311
147	石核	B2区	VII	ホルンフェルス	6.75	3.8	3.2	73.7	スクレイパーに転用	160
148	敲石	B2区	VII	砂岩	9.0	8.75	5.8	(490.0)	欠損あり	197
149	細石刃核	B1区	VI	黒曜石(桑ノ木津留)	1.6	1.2	0.65	0.8		190
150	細石刃核	B1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	2.2	1.25	1.0	2.0		186
151	細石刃核	B1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.45	1.8	1.3	2.7		185
152	細石刃核	B1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.3	1.4	1.6	2.6		184
153	細石刃核	B1区	V	黒曜石(桑ノ木津留)	1.2	1.5	1.75	3.7		181
154	細石刃核	B1区	VI	頁岩	2.0	1.8	0.85	3.1		192
155	打面作業再生剥片(細石刃)	B1区	VII	黒曜石(船引OX群)	1.5	1.4	0.6	1.1		165
156	作業面再生剥片(細石刃)	B1区	VII	頁岩	1.95	1.4	0.55	1.6		193
157	細石刃核	B1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.85	0.85	1.95	1.7		187
158	細石刃核	A1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.5	1.6	3.0	6.1		180
159	細石刃	B1区	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.2	0.6	0.15	<0.1		167
160	細石刃	B1区	VI	黒曜石(桑ノ木津留)	0.8	0.9	0.15	<0.1		166
161	細石刃核	C1区	V	黒曜石(桑ノ木津留)	1.45	1.4	1.1	2.0		191
162	石斧未製品	A2区	VII	頁岩	12.6	4.6	2.0	119.9		54
163	石斧未製品	B2区	VII	頁岩	13.4	4.1	1.5	71.1		55

第Ⅲ章　縄文時代の調査

第1節　遺構

アカホヤ火山灰層下位、霧島小林軽石層上位において、ほぼ調査区の全面より縄文時代に該当する遺構が検出された。検出された遺構は、集石遺構31基、土坑20基である。検出された遺構の位置関係は、第51図に示すとおりである。また、各遺構から出土した遺物については第5・6表及び第61図を参照して欲しい。以下、各遺構について詳述する。

1．集石遺構

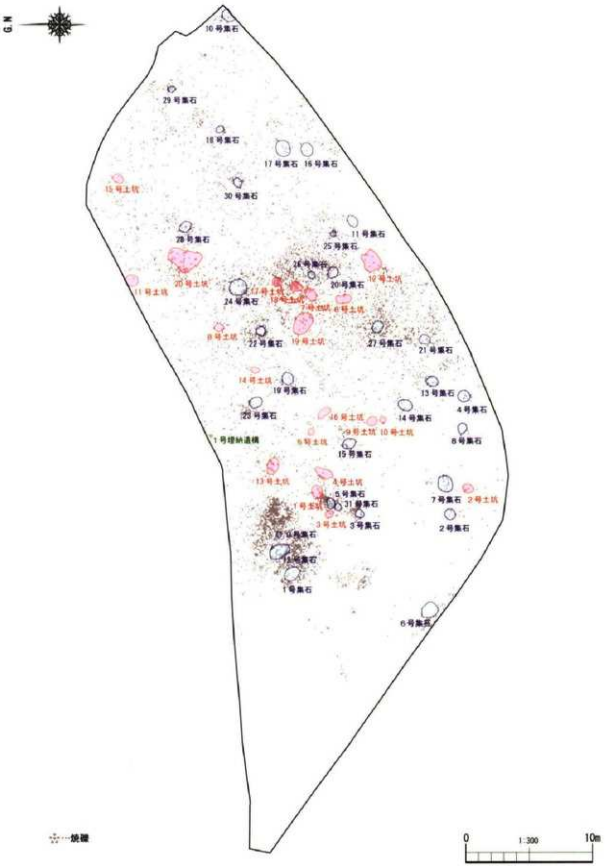
集石遺構はⅤ～Ⅶ層において検出されたが、調査区の約半分はアカホヤ火山灰層が既に削平された状況であり、今回の調査における検出面は本来の検出面と一致しない可能性が高い。また、調査区では焼礫が計7,803点出土している。その分布は集石遺構の分布と有機的な関係を示すため、今回出土した焼礫の多くが、本来集石遺構の構成礫であった可能性が高い。焼礫や集石遺構の構成礫の石材はほぼ砂岩であった。

第5表　縄文時代集石遺構観察表

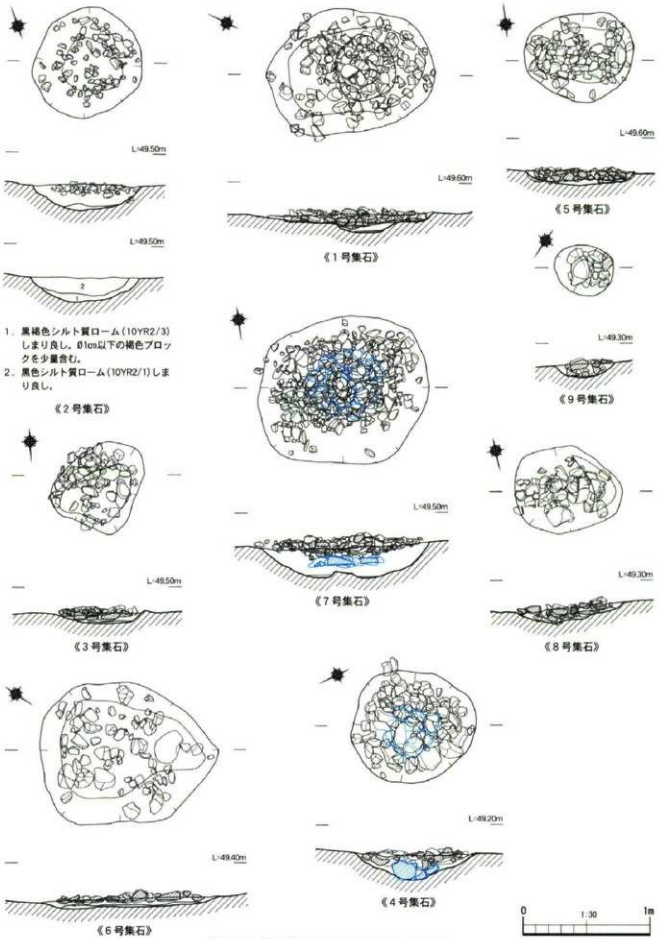
	上部礫				底石				掘込み					
遺構番号	礫分布範囲<長軸×短軸>(m)	総礫数(個)	総重量(kg)	礫1個あたりの重量(kg)	有無	総礫数(個)	総重量(kg)	礫1個あたりの重量(kg)	有無	断面形態	掘込み範囲<長軸×短軸>(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
1号集石	1.35×1.01	194	39.7	0.21	無	-	-	-	有	皿状	1.35×1.01	0.15		
2号集石	0.81×0.71	99	5.0	0.05	無	-	-	-	有	ボウル状	0.88×0.88	0.21		
3号集石	0.71×0.71	82	19.3	0.24	無	-	-	-	有	皿状	0.76×0.76	0.09		
4号集石	0.98×0.96	147	50.5	0.34	有	6	19.5	3.25	有	ボウル状	1.00×0.90	0.22		
5号集石	1.01×0.65	121	23.0	0.19	無	-	-	-	有	皿状	0.88×0.71	0.12	塞ノ神式？2点	
6号集石	1.26×1.06	75	27.4	0.37	無	-	-	-	有	皿状	1.45×1.13	0.09	剥片1点	
7号集石	1.35×1.09	483	50.5	0.10	有	17	21.8	1.28	有	ボウル状	1.37×1.17	0.28		
8号集石	0.78×0.57	64	21.7	0.34	無	-	-	-	有	皿状	0.85×0.71	0.14		
9号集石	0.38×0.31	14	10.0	0.71	無	-	-	-	有	ボウル状	0.47×0.40	0.11	下剥峯式1点	
10号集石	1.03×0.76	92	12.0	0.13	無	-	-	-	有	皿状	1.15×-	0.06		一部調査区外
11号集石	0.99×0.55	51	7.5	0.15	無	-	-	-	有	ボウル状	1.01×0.77	0.29	台石1点、敲石1点、剥片1点	
12号集石	1.57×1.09	320	85.3	0.27	無	-	-	-	有	ボウル状	1.72×1.08	0.23	敲石1点	2基の切り合い？
13号集石	0.90×0.73	33	13.5	0.41	無	-	-	-	有	皿状	1.01×0.81	0.11		
14号集石	1.03×0.79	132	12.8	0.10	無	-	-	-	有	ボウル状	1.20×0.87	0.16		
15号集石	0.95×0.86	257	43.5	0.17	無	-	-	-	有	皿状	1.15×0.89	0.13		
16号集石	0.82×0.79	85	5.5	0.06	無	-	-	-	有	ボウル状	1.03×0.99	0.21		
17号集石	1.24×0.98	254	51.9	0.20	有	13	38.5	2.96	有	ボウル状	1.31×1.17	0.27	石核1点	
18号集石	0.62×0.40	15	7.0	0.47	無	-	-	-	有	皿状	0.70×0.52	0.10	剥片1点	
19号集石	0.93×0.83	71	13.5	0.19	無	-	-	-	有	皿状	0.99×0.90	0.09	敲石3点	
20号集石	0.92×0.69	128	18.0	0.14	無	-	-	-	有	皿状	0.94×0.79	0.16	剥片2点	
21号集石	0.73×0.61	38	14.2	0.37	無	-	-	-	有	皿状	0.95×0.77	0.12		
22号集石	0.73×0.72	96	8.1	0.08	無	-	-	-	有	皿状	0.79×0.76	0.18	剥片1点	
23号集石	0.99×0.74	53	19.5	0.37	無	-	-	-	有	皿状	1.10×0.80	0.17	剥片1点	
24号集石	1.21×1.15	142	52.3	0.37	無	-	-	-	有	ボウル状	1.40×1.30	0.36	縄文施文土器1点	
25号集石	0.42×0.28	15	3.0	0.20	無	-	-	-	有	皿状	0.48×0.43	0.12		
26号集石	0.60×0.53	67	8.4	0.13	無	-	-	-	有	皿状	0.64×0.59	0.17	剥片2点	
27号集石	0.93×0.61	43	11.8	0.27	無	-	-	-	有	ボウル状	0.97×0.81	0.14	敲石1点、剥片2点	
28号集石	1.13×0.72	144	15.2	0.11	無	-	-	-	有	ボウル状	1.01×0.81	0.11	塞ノ神式？1点、台石1点、敲石2点	
29号集石	0.50×0.47	24	3.6	0.15	無	-	-	-	有	皿状	0.57×0.49	0.10		
30号集石	0.73×0.58	34	9.0	0.26	無	-	-	-	有	皿状	0.82×0.63	0.12		
31号集石	-	-	-	-	有	4	10.0	2.50	有	皿状	0.63×0.58	0.11		底石のみ検出か？

第6表　縄文時代土坑観察表

番号	遺構の形態		規模(m)			出土遺物	備考
	平面形態	床面形態	長軸	短軸	深さ		
1号土坑	不整楕円形	平坦	1.11	0.90	0.15		
2号土坑	不整楕円形	椀状	0.92	0.77	0.19		
3号土坑	不整円形	椀状	0.51	0.48	0.17		
4号土坑	不整楕円形	椀状	1.17	0.67	0.26		
5号土坑	不整円形	椀状	0.62	0.50	0.19		
6号土坑	不整楕円形	凹凸	1.27	0.80	0.24	剥片1点	
7号土坑	不整楕円形	椀状	1.11	0.88	0.26	剥片3点	
8号土坑	不整楕円形	椀状	0.85	0.69	0.17		上面より炭化物出土
9号土坑	不整円形	椀状	0.84	0.73	0.23		
10号土坑	不整円形	椀状	0.62	0.52	0.24		
11号土坑	不整楕円形	椀状	0.99	0.96	0.44		
12号土坑	不整形	凹凸	1.79	1.62	0.22		複数基の切り合い？
13号土坑	不整楕円形	平坦	1.40	0.95	0.08		
14号土坑	不整楕円形	椀状	0.74	0.49	0.23	無文土器2点、剥片2点	
15号土坑	不整楕円形	椀状	0.90	0.68	0.22	無文土器1点	
16号土坑	不整楕円形	一方向に向かい傾斜	1.20	0.60	0.19		
17号土坑	不整楕円形	椀状	0.79	0.67	0.21	無文土器9点	
18号土坑	不整楕円形	平坦	1.04	0.72	0.07		
19号土坑	不整楕円形	平坦	1.99	1.37	0.73		
20号土坑	不整形	凹凸	2.67	1.76	1.08	無文土器4点、剥片9点	複数基の切り合い？

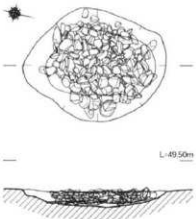


第51図　縄文時代遺構配置図及び礫分布図（S＝1/300）

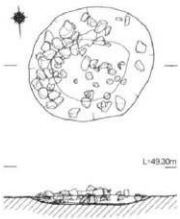


第52図　集石遺構実測図①（S＝1/30）

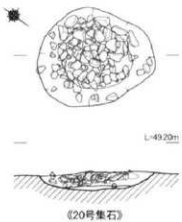
第53図　集石遺構実測図②（S＝1/30）



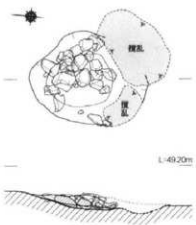
《15号集石》



《19号集石》

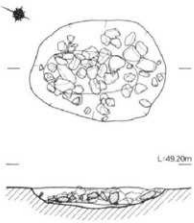


《20号集石》

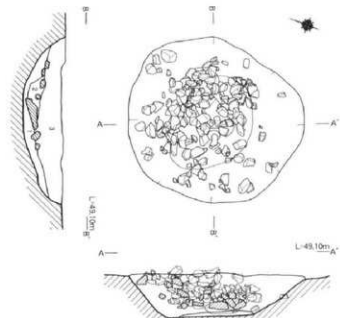


《21号集石》

《22号集石》

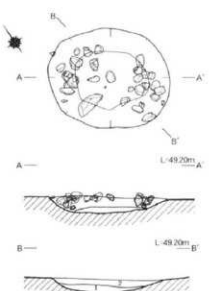


《23号集石》



1．暗褐色ローム(10YR3/3)しまり良し。白色粒を少量含む。黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR2/2)しまり悪し。Ø5cm以下の褐色ブロックを少量含む。
3．黒褐色ローム(10YR2/3)しまり良し。白色粒を含む。黄色粒を微量含む。

《24号集石》



1．暗褐色ローム(7.5YR3/3)しまり良し。白色粒、黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。白色粒を少量含む。黄色粒を微量含む。

《27号集石》

0　1:30　1m

第54図　集石遺構実測図③（S＝1/30）

なお、集石遺構の法量等は第５表に記した。本調査区で検出された集石遺構は全て掘り込みを有する。掘り込みの断面形態はいずれも皿状もしくはボウル状であり、Ｖ字状を呈するタイプのものは検出されていない。また、各集石遺構に充填された礫の総数は、削平の影響により本来存在したものより少なくなっている可能性が高い。

検出された集石遺構は、底石の有無により分類が可能である。各集石遺構の情報については第５表に譲り、ここでは底石を有する集石遺構及び、その他特徴的な集石遺構について詳述していく。

①底石を有する集石遺構

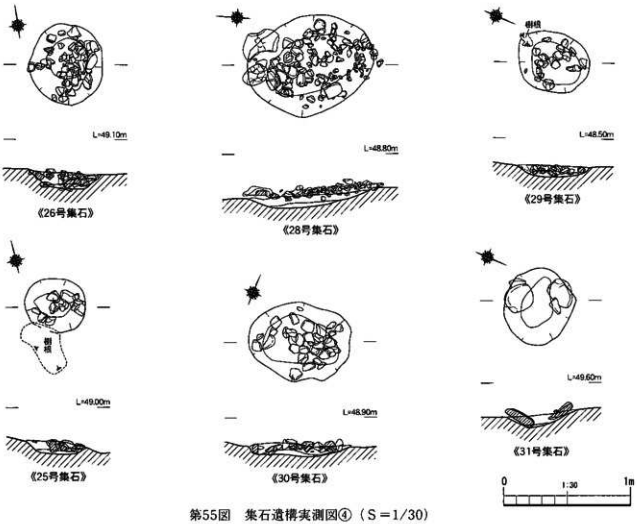
底石を有する集石遺構は、４・７・17・31号集石遺構の計４基が検出された。先述のとおり削平の影響もあるため単純には比較できないが、底石を有する集石遺構は底石をもたない集石遺構に比べ、上部礫の総数が比較的多い傾向にある。

【４号集石遺構】　グリッドＡ１区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態はボウル状を呈する。構成礫には比較的大ぶりな亜角礫や角礫が多く用いられている。掘り込みの床面には長さ約30cmの亜角礫が１個、その周囲に長さ10cm前後の亜角礫が５個配置されていた。

【７号集石遺構】　グリッドＡ１区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態はボウル状を呈する。掘り込み床面は平坦ではなく、中央部にやや盛り上がりがみられる。構成礫には亜円礫や亜角礫が多く用いられる。掘り込みの床面には長さ10～30cm程度の扁平な礫が、平坦面を揃えるようにして配置されていた。

【17号集石遺構】　グリッドＣ１区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態はボウル状を呈する。構成礫には亜円礫や亜角礫が多く用いられる。掘り込みの床面には長さ10～25cm程度の扁平な礫が、平坦面を揃えるようにして配置されていた。

【31号集石遺構】　グリッドＡ２区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態は皿状を呈する。掘り込み壁面の傾斜に沿うように、扁平な礫が４個配置されていた。削平により上部礫が消失し、底石のみ残存している状況ではないかと考えられる。



第55図　集石遺構実測図④（Ｓ＝1/30）

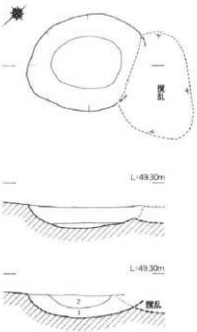
②底石をもたない集石遺構

底石をもたない集石遺構は、先述の4・7・17・31号集石遺構を除く計27基が検出された。ここでは、底石をもたない集石遺構のうち9・12・24号集石遺構について報告する。

【9号集石遺構】 グリッドA2区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態はボウル状を呈する。構成礫には亜円礫や亜角礫が多く用いられる。第51図をみると9号集石遺構の周囲では多くの焼礫が出土している。これは遺構の認定が遅くなったことが要因と考えられる。そのため、もっと上面で検出できた可能性が高い。なお、本遺構では下剥峯式土器の胴部片が1点出土している。

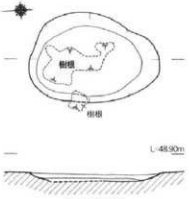
【12号集石遺構】 グリッドA2区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態はボウル状を呈する。構成礫には亜円礫や亜角礫が多く用いられる。検出時や土層断面観察時では判断できなかったが、礫の充填状況及びその傾きから本遺構は2基の集石遺構の切り合いである可能性が高い。おそらく、本遺構中央の深い掘り込みが北側の浅い掘り込みを切っているのであろう。

【24号集石遺構】 グリッドB2区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態はボウル状を呈する。本遺構は、礫の出土状況から土坑埋没途中で北側から礫を廃棄した状況が想定される。

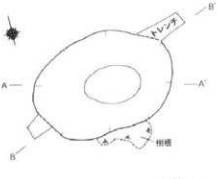


1．暗褐色シルト質ローム(7.5YR3/3)しまりやや良し。Ø2cm以下の褐色ブロック(Ⅶ層?)を含む。
2．黒色シルト質ローム(7.5YR2/1)しまり良し。Ø1cm以下の炭化物を少量含む。

《2号土坑》

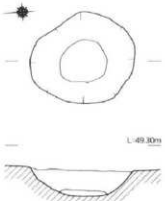


《18号土坑》



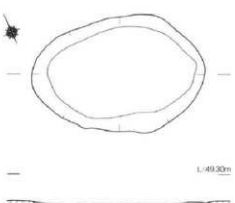
1．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。白色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR2/2)しまり良し。白色粒を含む。
3．黒褐色ローム(10YR2/2)しまり良し。白色粒を多量含む。

《7号土坑》



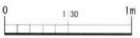
1．暗褐色ローム(10YR3/3)しまり良し。白色粒を少量含む。黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR3/1)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を微量含む。

《9号土坑》

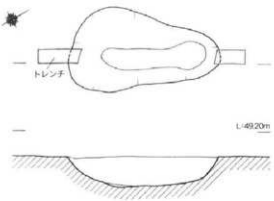


1．暗褐色ローム(7.5YR3/3)しまり良し。白色粒、炭化粒を少量含む。黄色パミスを微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。白色粒を多量含む。Ø3cm以下の炭化物を含む。黄色粒を微量含む。

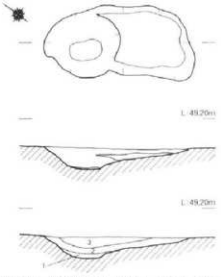
《13号土坑》



第56図　土坑実測図①（S＝1/30）

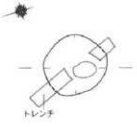


《4号土坑》

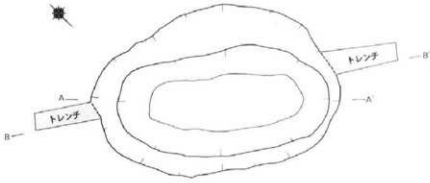


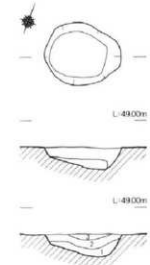
1．暗褐色ローム(10YR3/4)しまり良し。白色粒、黄色粒を微量含む。
2．暗褐色ローム(7.5YR3/3)しまり良し。白色粒を少量含む。
黄色粒を微量含む。
3．黒褐色ローム(7.5YR3/2)しまり良し。白色粒を多量含む。
黄色粒を微量含む。

《16号土坑》



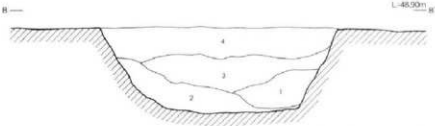
《3号土坑》





1．暗褐色ローム(7.5YR3/3)しまり良し。白色粒を少量含む。
2．黒褐色ローム(7.5YR3/2)しまり良し。白色粒を少量含む。黄色粒を微量含む。
3．黒褐色ローム(7.5YR3/1)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を微量含む。

《5号土坑》

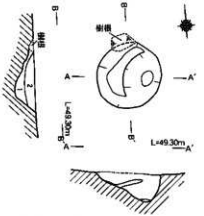


1．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。Ø2cm以下のにぶい黄褐色ブロックを多量含む。白色粒、黄色粒を少量含む。
2．暗褐色ローム(10YR3/3)しまり良し。Ø2cm以下のにぶい黄褐色ブロックを少量含む。白色粒、黄色粒を微量含む。
3．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を少量含む。
4．黒褐色ローム(7.5YR3/2)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を含む。

《19号土坑》

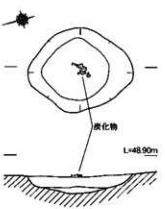
0　1:30　1m

第57図　土坑実測図②（S＝1/30）



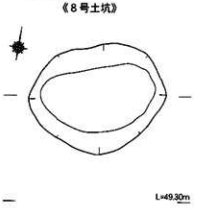
1．黒褐色ローム(7.5YR2/3)しまり良し。白色粒を少量、黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(7.5YR3/1)しまり良し。白色粒を多量、黄色粒を微量含む。

《10号土坑》

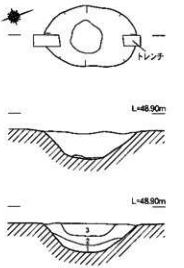


1．暗褐色ローム(10YR3/3)しまり良し。白色粒を微量含む。Φ1cm以下の炭化粒を少量含む。
2．黒褐色ローム(10YR3/1)しまり良し。白色粒を少量含む。Φ8cm以下の炭化物を多量含む。

《8号土坑》

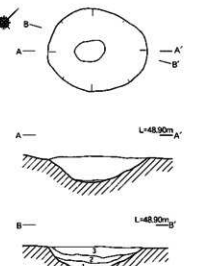


《1号土坑》



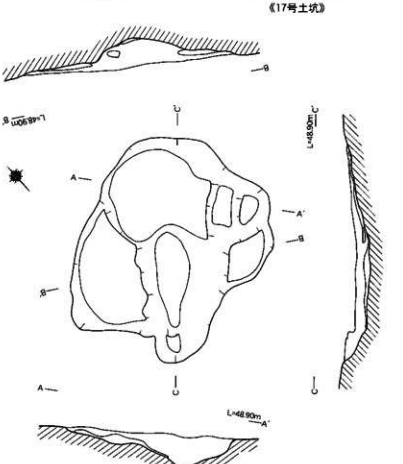
1．暗褐色ローム(10YR3/3)しまり良し。白色粒、黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。白色粒を少量、黄色粒を微量含む。
3．黒褐色ローム(10YR2/2)しまり良し。白色粒を多量、黄色粒を微量含む。

《14号土坑》



1．暗褐色シルト質ローム(10YR3/3)しまり良し。黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(7.5YR3/2)しまり良し。黄色粒を微量含む。
3．黒褐色ローム(10YR3/1)しまり良し。白色粒、炭化物を微量含む。

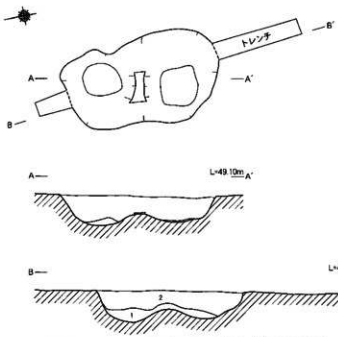
《17号土坑》



1．暗褐色ローム(10YR3/4)しまり良し。白色粒、黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を微量含む。

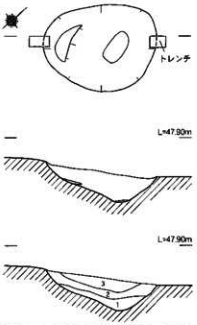
《12号土坑》

第58図　土坑実測図③（S＝1/30）



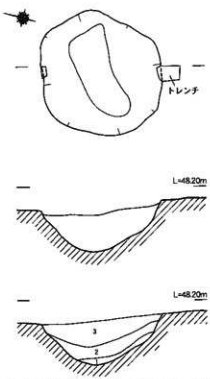
1．暗褐色ローム(7.5YR3/4)しまり良し。白色粒、黄色粒を少量含む。
2．黒褐色ローム(10YR2/2)しまり良し。白色粒、黄色粒を少量含む。

《6号土坑》



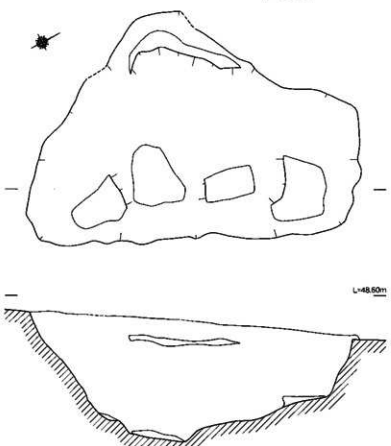
1．暗褐色ローム(10YR3/4)しまり良し。白色粒、小礫を少量含む。黄色粒を微量含む。
2．黒褐色ローム(10YR2/3)しまり良し。白色粒を含む。黄色粒を微量含む。
3．黒褐色ローム(7.5YR2/2)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を少量含む。

《15号土坑》

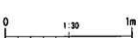


1．にぶい黄褐色シルト質ローム(10YR4/3)しまり良し。白色粒を微量含む。
2．暗褐色ローム(10YR3/3)しまり良し。白色粒を含む。
3．黒褐色ローム(10YR2/2)しまり良し。白色粒を多量含む。黄色粒を微量含む。

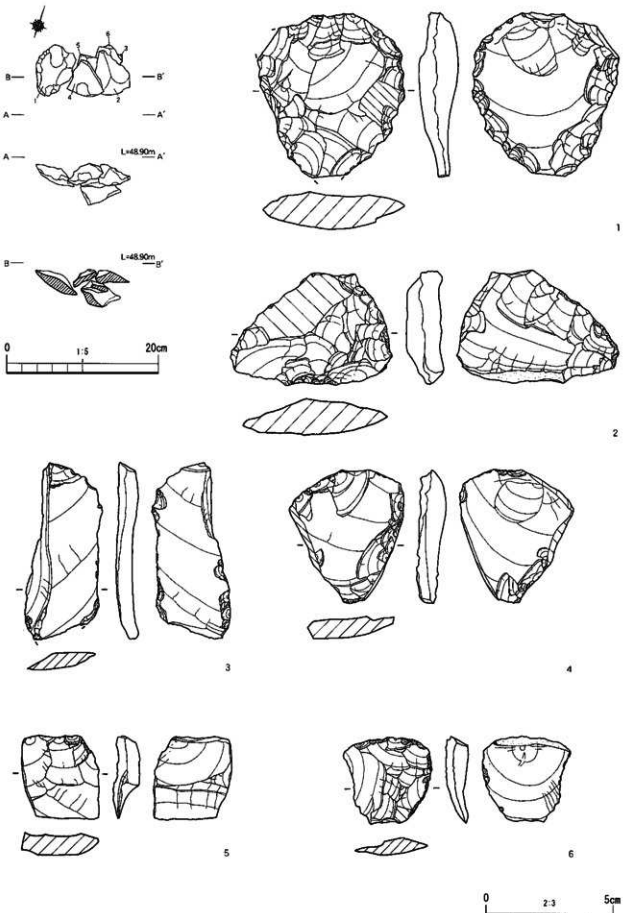
《11号土坑》



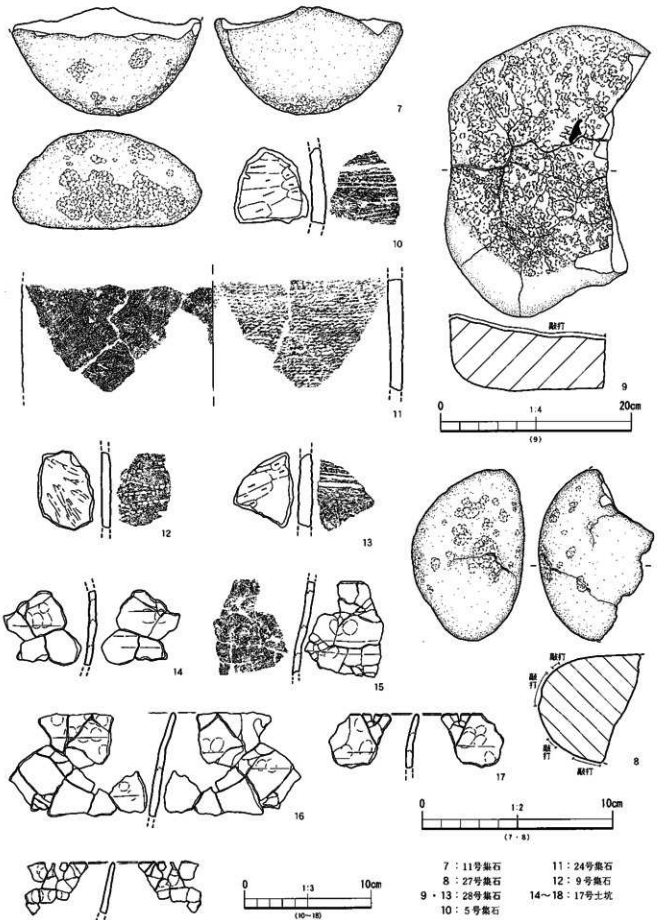
《20号土坑》



第59図　土坑実測図④（S＝1/30）



第60図　1号石器埋納遺構実測図及び出土遺物実測図（S＝1/5、2/3）



第61図　遺構内出土遺物実測図（S＝1/2、1/4、1/3）

2．土坑

土坑はⅥ～Ⅶ層において検出されたが、集石遺構同様、今回の調査における検出面は本来の検出面と一致しない可能性が高い。検出された土坑は平面形態や断面・床面形態により大きく５つに分類できる。以下、タイプ別に報告する。なお、遺構の規模については第６表を参照して欲しい。

①平面形態が不整楕円形で断面形態が皿状、床面形態が平坦であるタイプ

１・13・18号土坑が該当する。遺構の性格は不明である。

②平面形態が不整円形・不整楕円形で断面形態がボウル状、床面形態が椀状を呈するタイプ

２・３・５・７・８・９・10・11・14・15・17号土坑が該当する。８号土坑は埋土上位で10㎝前後の炭化物がまとまって出土している。炉状遺構の可能性も考えられたが、焼土が確認されなかったため断定するには至らなかった。17号土坑では埋土中から無文土器が９点出土している。８号土坑以外の土坑の性格は不明である。

③平面形態が不整楕円形で遺構の中央付近でくびれるタイプ

４・６・16号土坑が該当する。平面形態や床面形態の特徴は炉穴と類似する。しかし、焼土が確認されなかったため断定するには至らなかった。

④平面形態が不整楕円形で断面形態が箱状を呈するタイプ

19号土坑が該当する。平面形態や断面形態、検出面から床面までの深さが0.73mと深い点から陥し穴状遺構と考えられるが、逆茂木痕が確認されなかったため断定するには至らなかった。

⑤平面形態が不整形で床面に凹凸があるタイプ

12・20号土坑が該当する。土層断面等で確認することはできなかったが、平面形態や断面形態から複数基の切り合いである可能性が高いと思われる。12号土坑は切り合いのある炉穴に形態的特徴が類似するが、焼土が確認されなかったため断定するには至らなかった。

3．石器埋納遺構

【１号石器埋納遺構】　グリッドＢ２区に位置する。Ⅵ層下位において検出された。石器が折り重なるように計６点がまとまって出土した。出土した石器の石材はいずれも頁岩であり、全て同一母岩と思われる。石器出土範囲中央を立ち割り、土層断面を確認したが、掘り込みは確認されなった。しかし、石器がやや傾いた状況で出土した点から浅い掘り込みを伴う可能性があると判断し、石器埋納遺構として報告する。

１・２はスクレイパーである。１はやや幅広の縦長剥片素材とし、裏面に主要剥離面を大きく残す。両側縁に刃部が形成される。２は横長剥片を素材とし、裏面に主要剥離面を大きく残す。両側縁に刃部が形成される。３～６は剥片の一部に二次加工が施されているが、その意図が明瞭に読み取れないものである。いずれもやや幅広の縦長剥片を素材とする。３は両側縁、４は両側縁及び上縁、５は上縁、６は右側縁及び上縁に二次加工が施されている。

第２節　包含層出土遺物

アカホヤ火山灰層下位、霧島小林軽石層上位の包含層（Ⅴ～Ⅶ層）から縄文時代草創期～早期に該当する土器や石器が出土した。出土点数は土器が575点、石器が981点である。

1．土器

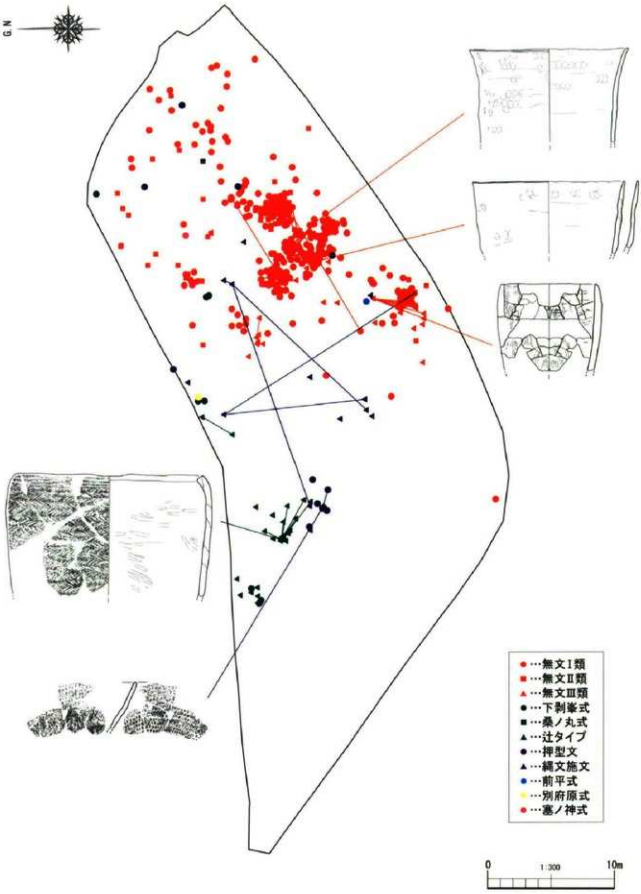
アカホヤ火山灰層下位、霧島小林軽石層上位の包含層（Ⅴ～Ⅶ層）から出土した土器は、無文土器508点、押型文土器12点、縄文施文土器14点、前平式土器？１点、別府原式土器？１点、下剥峯式土器11点、桑ノ丸式土器１点、辻タイプ26点、塞ノ神式土器１点である。なお、表土中から縄文時代後期に属する納屋向式土器が１点出土しており、ここでまとめて報告する。出土した土器の分布状況は第62図に示している。

無文土器（19～35）　本調査区で最も出土数の多い土器が無文土器である。出土した無文土器を器壁の厚さや調整技法の点から３タイプに分類した。

Ⅰ類…器壁が薄手（１㎝未満）である。器面の最終調整はナデであるが指頭圧痕による凹凸を残すものが多い。

Ⅱ類…器壁が厚手（１㎝以上）である。調整はナデである。

Ⅲ類…調整がミガキであるもの。内外面ともミガキのものと、内面のみミガキのものがある。器壁は比較的厚手のものが多い。



第62図　縄文土器出土状況分布図（S＝1/300）

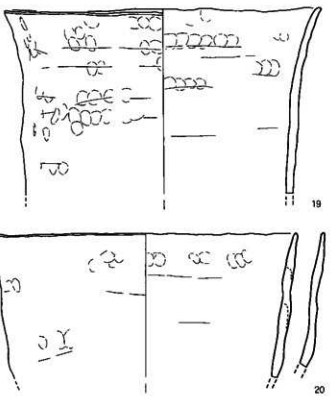
Ⅰ類は19～29が該当する。本調査区全体では総数375点出土している。19は口縁部から胴部まで残存する。ほぼ一箇所からまとまって出土した。口縁部は大きく外反する。口径は24.5cmである。20も口縁部から胴部まで残存する。ほぼ一箇所からまとまって出土した。口縁部が直口する。粘土紐接合に伴う段を明瞭に残す。口径は23.9cmである。21～27は口縁部片である。口縁部形態はやや外反するもの（21）と直口するもの（22～27）がある。28・29は胴部片である。いずれも粘土紐接合に伴う段および指頭圧痕を明瞭に残す。

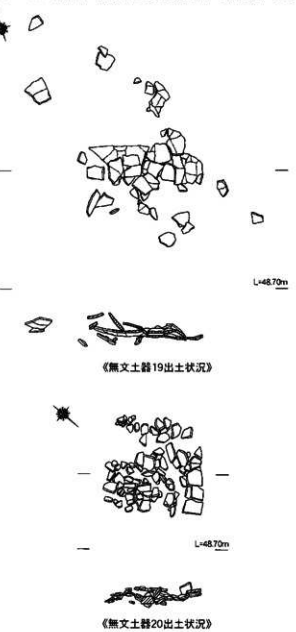
Ⅱ類は30～33が該当する。本調査区全体では総数99点出土している。30～33はいずれも口縁部片であり、口縁部形態は直口する。胎土に石英・長石、輝石・角閃石を一定量含む資料が多い。

Ⅲ類は34・35が該当する。本調査区全体では総数34点出土している。34は口縁部から胴部まで残存する。口縁部形態はやや内湾ぎみである。口縁端部が舌状に尖る。調整は内外面ともミガキである。口径は復元径で14.4cmである。35は口縁部片である。口縁部形態は直口で、口縁端部を丸くおさめる。調整は外面がナデ、内面がミガキと思われる。

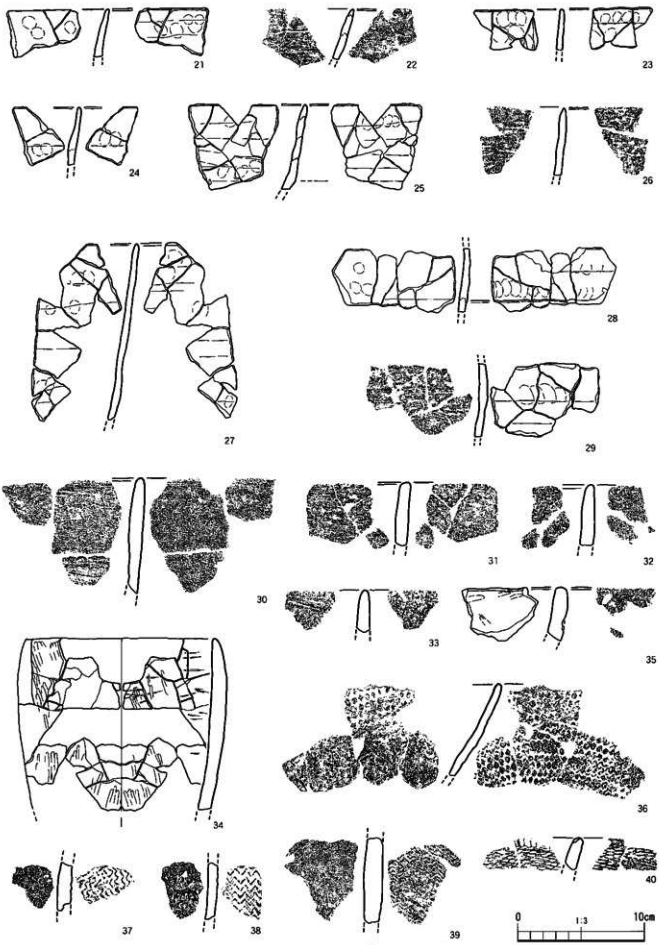
押型文土器（36～39）　36は口縁部片である。外面及び口縁部内面に横位の楕円押型文を施す。器形は外傾する。胎土に繊維痕を確認できる。稲荷山式土器に該当する。37～39は外面に山形押型文が施される胴部片である。37は器壁が1cm程度で、胎土に石英・長石、輝石・角閃石を一定量含む。38は器壁が0.6cm程度と薄く、胎土に繊維痕を確認できる。39は器壁が1.5cm程度と厚く、胎土に白色粒（軽石か？）を多く含む。

縄文施文土器（40～42）　40は口縁部片である。外面は縄文、内面は原体条痕の下に縄文が施される。41は口縁部～胴部片である。口縁部がやや外反する。外面及び口縁部内面には縄文が施される。42は胴部片である。本調査区で出土した縄文施文の土器は全て、胎土や色調・調整等が類似するため、ほぼ同時期のものではないかと思われる。また、口縁部内面に原体条痕をもつものや外反する口縁部があることから、早水台式土器～下





第63図　縄文土器実測図①及び無文土器出土状況実測図（S＝1/3、1/10）



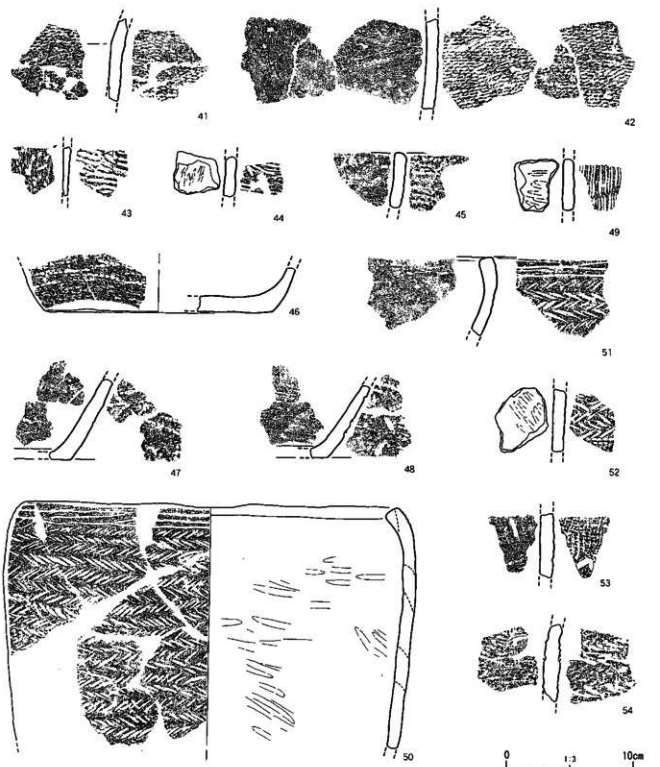
第64図　縄文土器実測図②（S＝1/3）

菅生B式土器と関連性の高い土器と考えられる。

前平式土器（43）　43は前平式土器と思われる胴部片である。外面に貝殻条痕文、内面にケズリのような痕跡を残す。

別府原式土器（44）　44は別府原式土器と思われる胴部片である。外面に横位の貝殻条痕文、内面にミガキが施される。中原式土器である可能性も否定できない。

下剥峯式土器（45～48）　45はやや内湾気味の口縁部片である。外面に貝殻腹縁刺突文が施される。内面は一部剥落しているため断定はできないが、おそらくミガキと思われる。46～48は底部片である。いずれも外面に貝殻腹縁刺突文・ミガキ、内面にナデが施される。46の底径は復元径で19.0cmである。



第65図　縄文土器実測図③（S＝1/3）

桑ノ丸式土器（49）　49は胴部片である。外面に縦位の短い貝殻条痕文が施される。内面はミガキである。

辻タイプ（50～52）　50は口縁部から胴部まで残存する。口縁部は内湾する。口縁部外面に棒状工具による沈線文、その下にハの字状の短沈線文が施される。内面はミガキである。口径は復元径で27.0cmである。51は口縁部片である。50同様、口縁部は内湾し、口縁部外面に棒状工具による沈線文、その下にハの字状の短沈線文が施される。内面はナデであろうか。磨耗が激しい。52は胴部片である。外面にハの字状の短沈線文と貝殻腹縁刺突文が施される。内面はミガキである。

塞ノ神式土器（53）　53は胴部片である。外面は沈線文で区画した中を縄文で充填している。内面はナデである。

納屋向式土器（54）　54は口縁部に近い胴部片であろう。やや外反する。外面は2列の貝殻腹縁刺突文が施される。内面は貝殻条痕文である。

2．石器

縄文時代草創期～早期に該当すると思われる石器は総数981点出土している。ただし、縄文時代草創期～早期の石器が出土したⅤ～Ⅶ層中では細石刃・細石刃核及び細石刃製作に関連する石器も出土しているため、ここで取り上げる石器の中に細石器文化期の遺物も混在している可能性が高い。しかし、分離することが困難であったため本項でまとめて報告する。なお、出土した石器の分布状況は第66・67図に示している。

石鏃（55～89）　剥片を素材とし、両面調整や半両面調整により鋭い先端部を作り出し、平面形がおおむね三角形を呈するものの。欠損品も含め総数36点出土している。そのうち35点を図化した。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石2点、姫島産黒曜石2点、チャート13点、安山岩1点、砂岩1点、頁岩13点、流紋岩4点である。出土した石鏃は平面形態や加工状況により以下のように分類できる。なお、この分類案は本遺跡における分類案である。

Ⅰ類（55～60）　…平基鏃または基部の抉りが浅い凹基鏃で、平面形は二等辺三角形状または正三角形状を呈する。規模は長さ・幅ともに2cm以下におさまる。また、厚みはやや厚く、分厚い印象をうけるもの。秋成雅博氏の研究（秋成2009）を参考にすると、Ⅰ類は縄文時代草創期に該当する可能性が高いと考えられる。総数6点出土している。

Ⅱ類（61・62）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、平面形は正三角形状を呈する。長さ・幅ともに1.5cm以下におさまるもの。総数2点出土している。

Ⅲ類（63・64）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、平面形は二等辺三角形状を呈する。長さが2.0cm未満のもの。総数2点出土している。

Ⅳ類（65～67）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、平面形は二等辺三角形状を呈する。長さが2.0cm以上のもの。総数3点出土している。

Ⅴ類（68～71）　…平基鏃または基部の抉りが浅い凹基鏃で、両面の加工が周縁部のみにとどまり、素材剥片の形状を大きく残すもの。総数4点出土している。68は槍先形尖頭器の先端部の可能性もある。

Ⅵ類（72）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、平面形は二等辺三角形状を呈する。Ⅲ類との違いは、Ⅲ類は長さが幅より長いのに対し、Ⅵ類は長さより幅が長い点である。総数1点出土している。

Ⅶ類（73・74）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、平面形は正三角形状を呈する。中央付近でくびれ、先端部に至るもの。総数2点出土している。

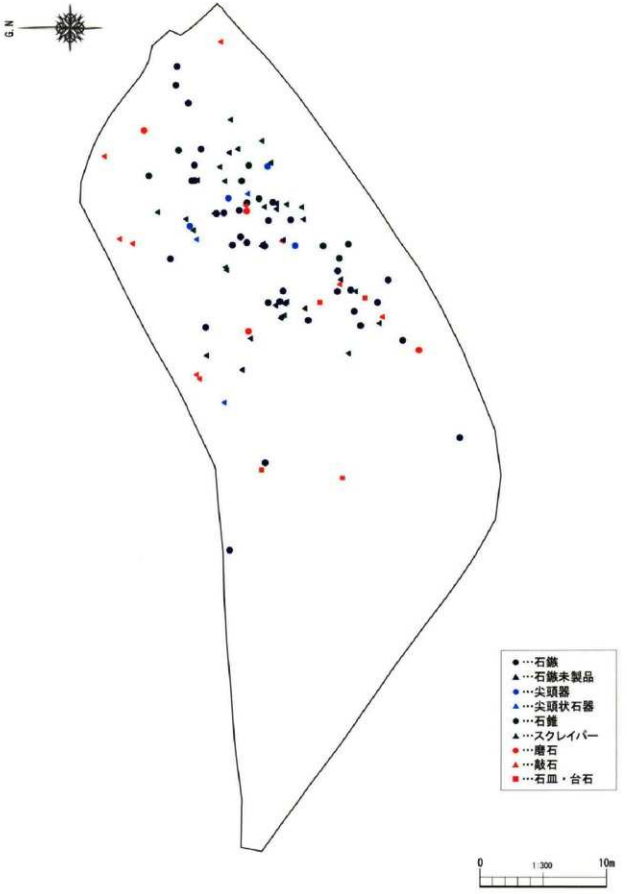
Ⅷ類（75～79）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、局部磨製を施すもの。また、鋸歯状の刃縁をもつことも特徴である。総数5点出土している。76は節理面で一部剥離しており、局部磨製の有無について確認ができない。しかし、平面形態及び石材が局部磨製を施す他の石器と類似することからⅧ類にまとめて報告する。

Ⅸ類（80）　…基部の抉りが浅い凹基鏃で、刃縁が鋸歯状を呈するもの。なお、局部磨製を施すものは除く。総数1点出土している。

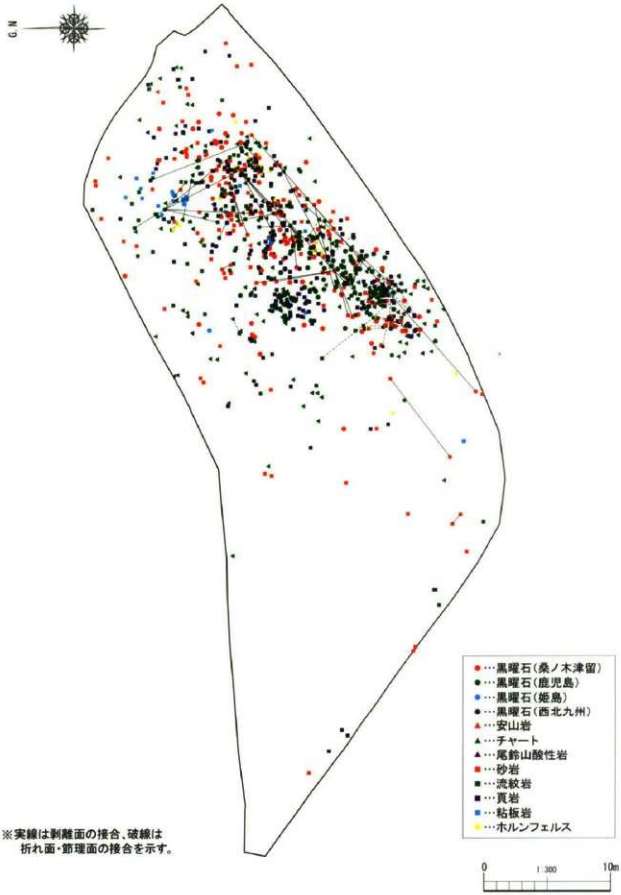
Ⅹ類（81・82）　…特徴的な抉り・脚部を呈するもの。いわゆる鍬形鏃に該当する。総数2点出土している。

欠損品（83～89）…欠損品のうち、上記の分類にあてはめることができないものが総数8点出土している。

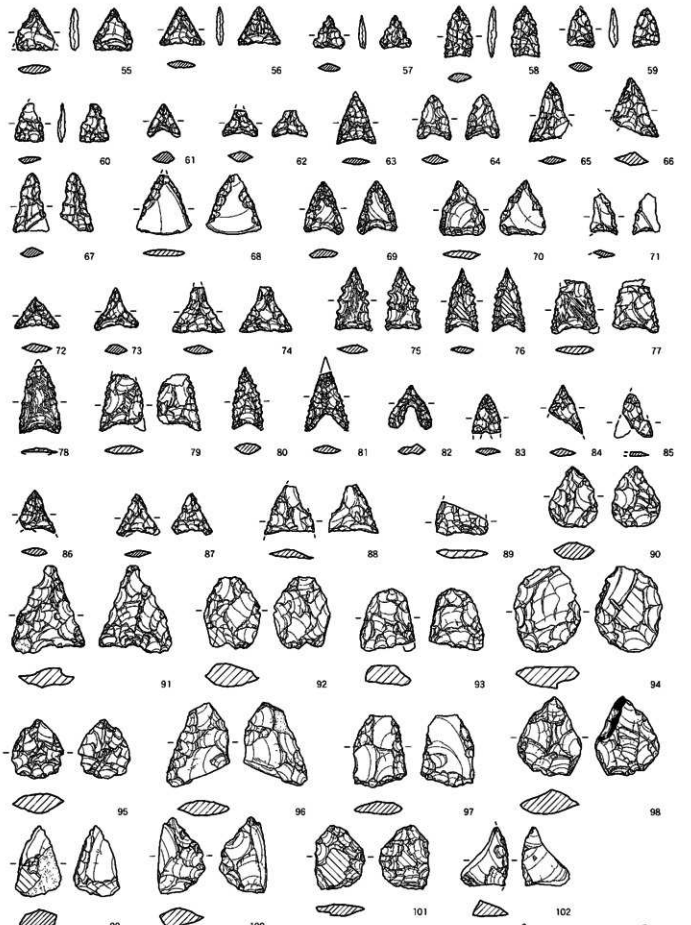
石鏃未製品（90～106）　剥片を素材とし、石鏃とほぼ同規模で両面調整や半両面調整により平面形が三角形状もしくは楕円形状を呈するもの。石鏃と比較し、先端部が鈍いものや全体が分厚いもの、加工が未熟なもの



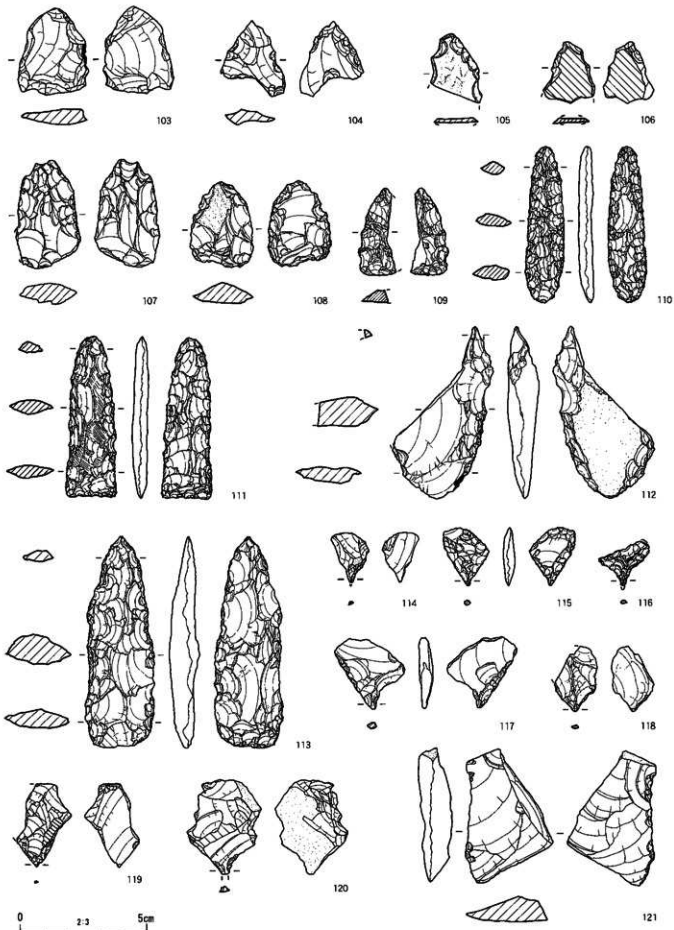
第66図　縄文時代草創期～早期遺物包含層出土主要石器分布図【器種別】（S＝1/300）



第67図　縄文時代早創期～早期遺物包含層出土石器分布図【石材別】（S＝1/300）



第68図　縄文時代石器実測図①（S＝2/3）

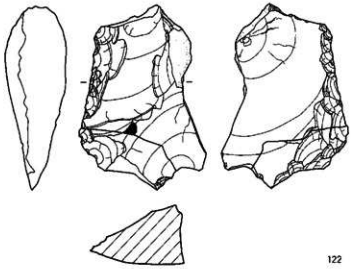


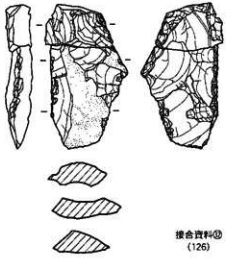
第69図　縄文時代石器実測図②（S＝2/3）

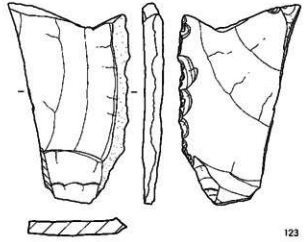
を分類した。総数18点（撹乱坑より出土した1点も含む）出土している。そのうち17点を図化した。使用石材はチャート6点、砂岩1点、頁岩7点、流紋岩4点である。105・106は石材や鋸歯状の刃縁をもつ点で石鏃Ⅷ類（局部磨製石鏃）に類似する。そのため、石鏃Ⅷ類の未製品の可能性がある。

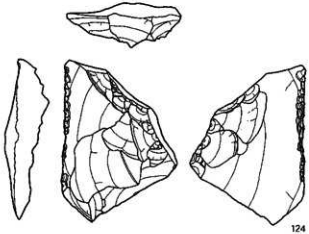
尖頭状石器（107～109）　剥片を素材とし、両面調整や半両面調整により鋭い先端部と抉りのない基部をもつもの。石鏃より規模が大きい。総数5点（うち2点は折れ面で接合する）出土している。そのうち3点を図化した。使用石材はチャート3点、頁岩1点、流紋岩1点である。107は研磨された可能性がある。

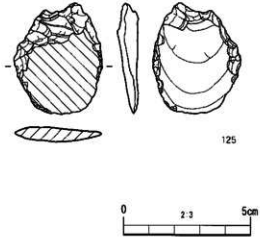
尖頭器（110～113）　剥片を素材とし、両面調整や半両面調整により先端部を作り出すもので、平面形が柳葉形を想定させるものを尖頭器として分類した。総数4点出土している。使用石材はチャート1点、頁岩1点、流紋岩2点である。111は局部磨製尖頭器である。



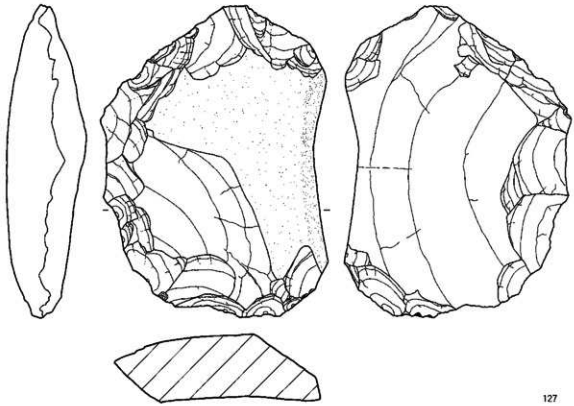


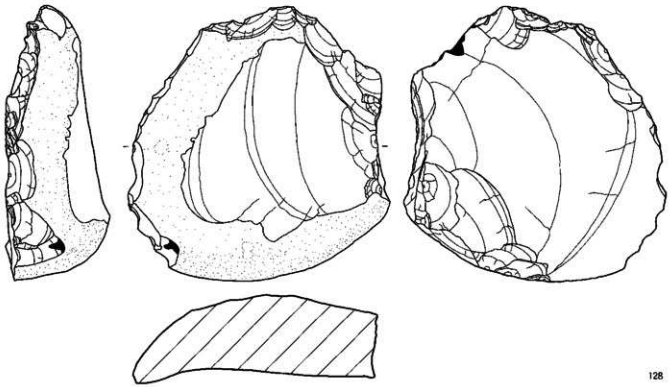


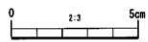




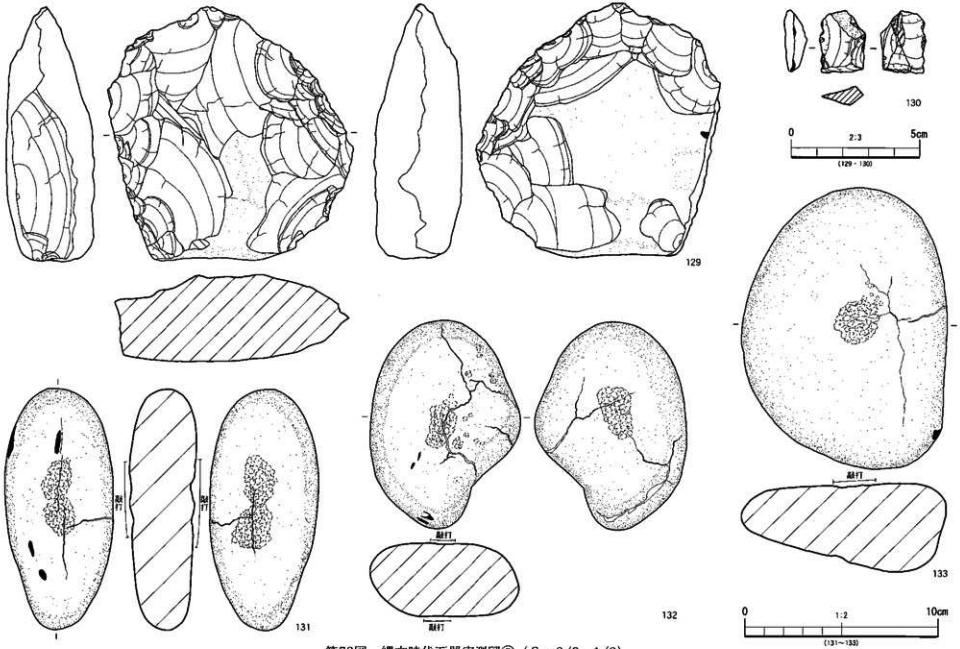
第70図　縄文時代石器実測図③（S＝2/3）







第71図　縄文時代石器実測図④（S＝2/3）

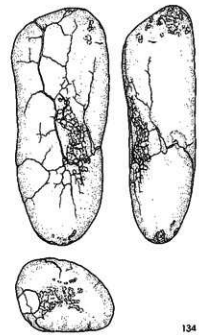


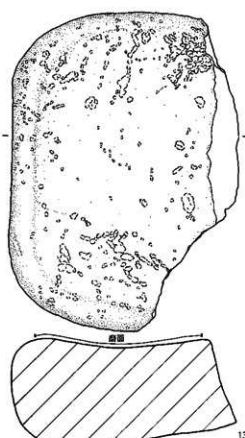
第72図　縄文時代石器実測図⑤（S＝2/3、1/2）

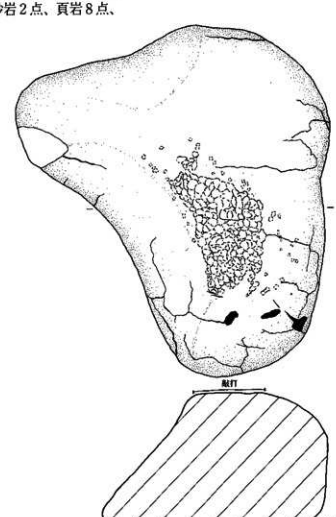
石錐（114～120）　剥片を素材とし、両面調整や半両面調整もしくは素材剥片の一部に調整を施すことにより、先端部（錐部）を作り出したもの。総数8点出土している。そのうち7点を図化した。使用石材はチャート4点、砂岩1点、流紋岩3点である。平面形態が三角形状のもの（114～117）と五角形状のもの（118～120）がある。

スクレイパー（121～129）　剥片を素材とし、縁辺に連続的な調整を施すことで刃部を作り出したもの。総数20点（うち2点は折れ面で接合する）出土している。そのうち折れ面で接合する2点を含む計10点を図化した。使用石材はチャート3点、砂岩3点、頁岩3点、粘板岩1点、流紋岩8点、ホルンフェルス2点である。126は折れ面で接合する資料である。図面中において下にある石器は折れた後も刃部調整を続けたことが窺える。127・128は背面に自然面をもつ大型の剥片を素材としたスクレイパーであるが、宮崎県内の旧石器時代石器群を10段階に区分した編年案（宮崎県旧石器文化談話会2005）の第5・6期に特徴的なスクレイパーに類似する。Ⅶ層が薄い地点からの出土であり、旧石器時代の混入品である可能性も否定できないだろう。

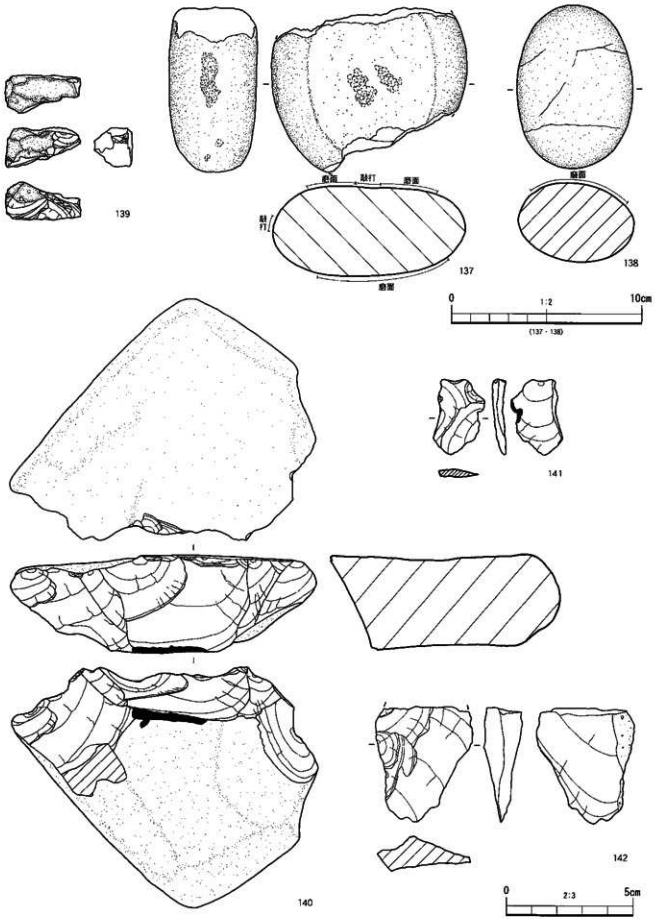
二次加工ある剥片（130）　剥片を素材とし、その一部に二次加工が施されるが加工の意図が明瞭に読み取れないものを分類した。総数28点出土している。そのうち1点を図化した。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石1点、鹿児島県産黒曜石3点、チャート11点、砂岩2点、頁岩8点、流紋岩3点である。







第73図　縄文時代石器実測図⑥（S＝1/4）



第74図　縄文時代石器実測図⑦（S＝1/2、2/3）

敲石（131～133）　礫を素材とし、その一端・両端および平坦面に敲打の結果と考えられる割れや敲打痕、くぼみをもつものを分類した。総数10点出土している。そのうち3点を図化した。使用石材は全て砂岩である。

台石（134・135）　大型の礫を素材とし、その平坦面に敲打の結果と考えられる割れや敲打痕が認められるものを分類した。総数5点出土している。そのうち2点を図化した。使用石材は全て砂岩である。134は両端に敲打痕があることから敲石としても使用されたものと考えられる。

石皿（136）　大型の礫を素材とし、その平坦面に平滑な面やくぼんだ滑らかな面をもつものを分類した。総数2点出土している。そのうち1点を図化した。使用石材は全て砂岩である。

磨石（137・138）　円礫の平らな面の片面もしくは両面に平滑な面をもつものを分類した。総数4点出土している。そのうち2点を図化した。使用石材は砂岩2点、尾鈴山酸性岩2点である。137は磨石として使用した後、敲石に転用している。

石核（139・140）　礫または剥片を素材とするが形態を整えるためとは見なし難いネガティブな剥離面をもつもの。総数55点（うち23点は折れ面や節理面で接合する）出土している。そのうち2点を図化した。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石4点、チャート7点、砂岩11点、頁岩21点、流紋岩10点、ホルンフェルス3点である。140は礫器の可能性もある。

砕片・剥片（141・142）　二次加工が施されない砕片・剥片をまとめた。総数786点（うち31点は折れ面や節理面で接合する）出土している。そのうち2点を図化した。使用石材は桑ノ木津留産黒曜石63点、鹿児島県産黒曜石56点、西北九州産黒曜石2点、チャート170点、安山岩4点、砂岩126点、頁岩191点、粘板岩30点、流紋岩118点、ホルンフェルス24点、尾鈴山酸性岩2点である。141・142は尾鈴山酸性岩製の剥片である。

接合資料㉝（143・144）　砂岩製で剥片1点・石核1点が接合する。143→数枚の剥片剥離→144（残核）という作業工程が復元される。

接合資料㉞（145・146）　砂岩製で剥片2点が接合する。145→打面を90°回転→数枚の剥片剥離→146という作業工程が復元される。

接合資料㉟（147～151）　砂岩製で剥片4点・石核1点が接合する。147（節理面で剥離）→149→打角を90°傾ける→数枚の剥片剥離→150→数枚の剥片剥離→151→148（残核）という作業工程が復元される。149は打面調整剥片であろう。

接合資料㊱（152～158）　砂岩製で剥片6点・石核1点が接合する。156・153→1枚の剥片剥離→158・157・154→打面を変え、155を剥離→数枚の剥片剥離→152（残核）という作業工程が復元される。154・157は1枚の剥片として剥離された後、さらに加撃され分割される。

接合資料㊲（159・160）　砂岩製で剥片1点・石核1点が接合する。160→数枚の剥離→159（残核）という作業工程が復元される。159の縁辺の一部に連続的な調整を行っているが、加工の意図を明瞭に読み取れなかった。

接合資料㊳（161～164）　頁岩製で剥片4点が接合する。164→163・162→161という作業工程が復元される。

接合資料㊴（165・166）　砂岩製で剥片2点が接合する。165→166という作業工程が復元される。

接合資料㊵（167・168）　砂岩製で剥片1点・石核1点が接合する。168→167という作業工程が復元される。167は剥片として剥離された後、石核に転用される。

接合資料㊶（169・170）　チャート製で剥片1点・石核1点が接合する。170→169（残核）という作業工程が復元される。

接合資料㊷（171～173）　チャート製で剥片3点が接合する。173→数枚の剥片剥離→171→172という作業工程が復元される。

接合資料㊸（174・175）　チャート製で剥片1点・石核1点が接合する。174→数枚の剥片剥離→175（残核）という作業工程が復元される。

接合資料㊹（176～180）　流紋岩製で剥片4点・石核1点が接合する。176→数枚の剥片剥離後、打面を頻繁に変えながら178→180→177と剥離する。残った石核が179である。

接合資料㊺（181・182）　砂岩製で剥片1点・石核1点が接合する。181→数枚の剥片剥離→182（残核）という作業工程が復元される。

接合資料㊻（183～187）　頁岩製で剥片4点・石核1点が接合する。打面を頻繁に変えながら183～186の4枚の剥片が剥離される。残った石核が187である。

接合資料㊼（188～190）　砂岩製で剥片1点・石核2点が接合する。剥離した剥片をさらに加撃し、剥片剥離を行った資料である。礫面を打面とし、189・190→188（残核）という作業工程が復元される。その後、189→190（残核）という作業工程が行われる。190の一側縁には連続的な調整を行っている。

接合資料㊽（191～193）　砂岩製で剥片2点・石核1点が接合する。192・193→数枚の剥片剥離→191（残核）

という作業工程が復元される。191は剥離面に敲打痕があることから、敲石に転用されたことが窺える。なお、敲打痕は正面・裏面・右側面の自然面でも確認できる。

接合資料㊽（194・195） ホルンフェルス製で剥片１点・石核１点が接合する。194→195という作業工程が復元される。２点とも自然面を大きく残す資料であることから、礫面を除去するための初期段階の剥片剥離工程を示す資料と考えられる。195は剥片として剥離された後、石核に転用される。

接合資料㊾（196～200） 流紋岩製で剥片５点が接合する。199→打面を90°回転→196→打角を90°傾ける→200→197という作業工程が復元される。198は196剥離後、作出された剥片である。５点すべて自然面を大きく残す資料であることから、礫面を除去するための初期段階の剥片剥離工程を示す資料と考えられる。

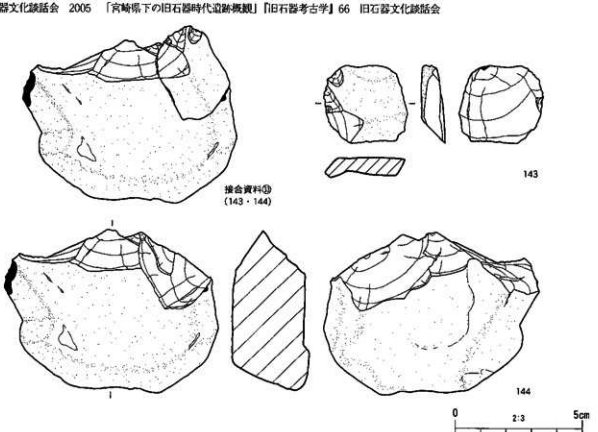
接合資料㊿（201・202） 砂岩製で剥片２点が接合する。201→数枚の剥片剥離→202という作業工程が復元される。202は縁辺の一部に連続的な調整を行っているが、加工の意図を明瞭に読み取れなかった。

３．縄文時代草創期～早期遺物包含層における分布状況

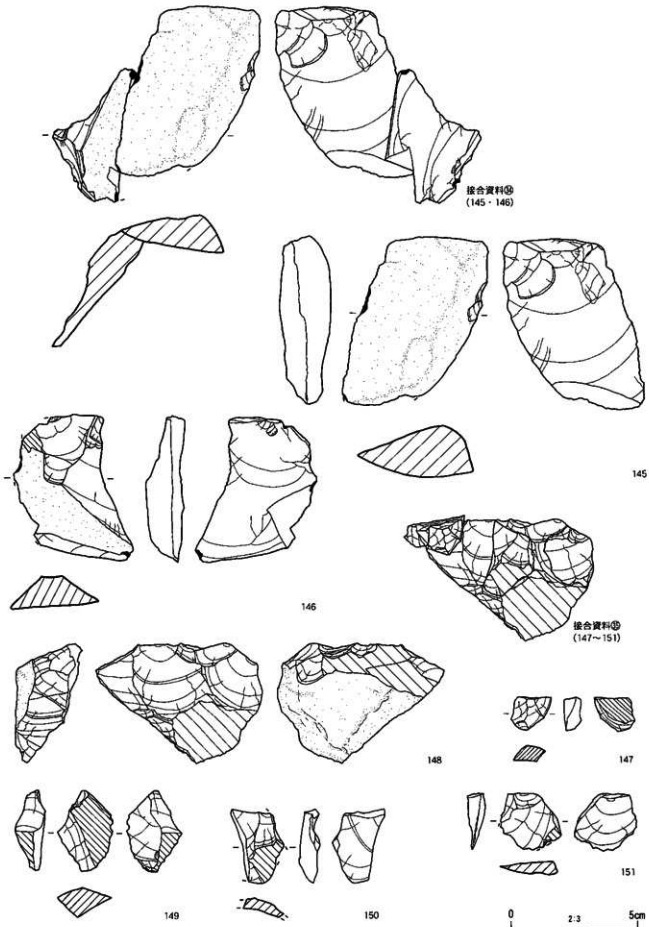
本調査区において縄文時代草創期～早期の遺物包含層から出土した土器は無文土器が中心となっている。また、無文土器に加え早期中葉の土器（下剥峯式土器・辻タイプ・押型文土器・縄文施文の土器）も一定量みられた。これら一定量以上みられた土器の分布（第62図）をみてみると、無文土器が調査区東側（Ｂ１・Ｃ１・Ｃ２区）、早期中葉の土器が調査区の北西側（Ａ２・Ａ３・Ｂ２区）を中心に分布していることが分かる。さらに、無文土器の分布を本報告書の分類に沿ってみてみると、無文土器Ⅰ類は調査区東側（Ｂ１・Ｃ１・Ｃ２区）全域で出土しているが、無文土器Ⅱ類はＣ２区、無文土器Ⅲ類はＢ１区を中心に出土しており、分布に偏りがあることがわかる。

次に石器の分布についてみていきたい。縄文時代草創期～早期の遺物包含層中からは、石鏃が一定量出土したが、他の器種は分布の傾向が読み取れるほど出土していない。また、一定量出土している石鏃もバリエーションがあり、石鏃をひとまとめにして分布をみていくことは有意義ではないと考えられる。なお、石材の分布状況（第67図）から、鹿児島県産黒曜石の分布が無文土器Ⅲ類の分布と重なる傾向が窺えた。

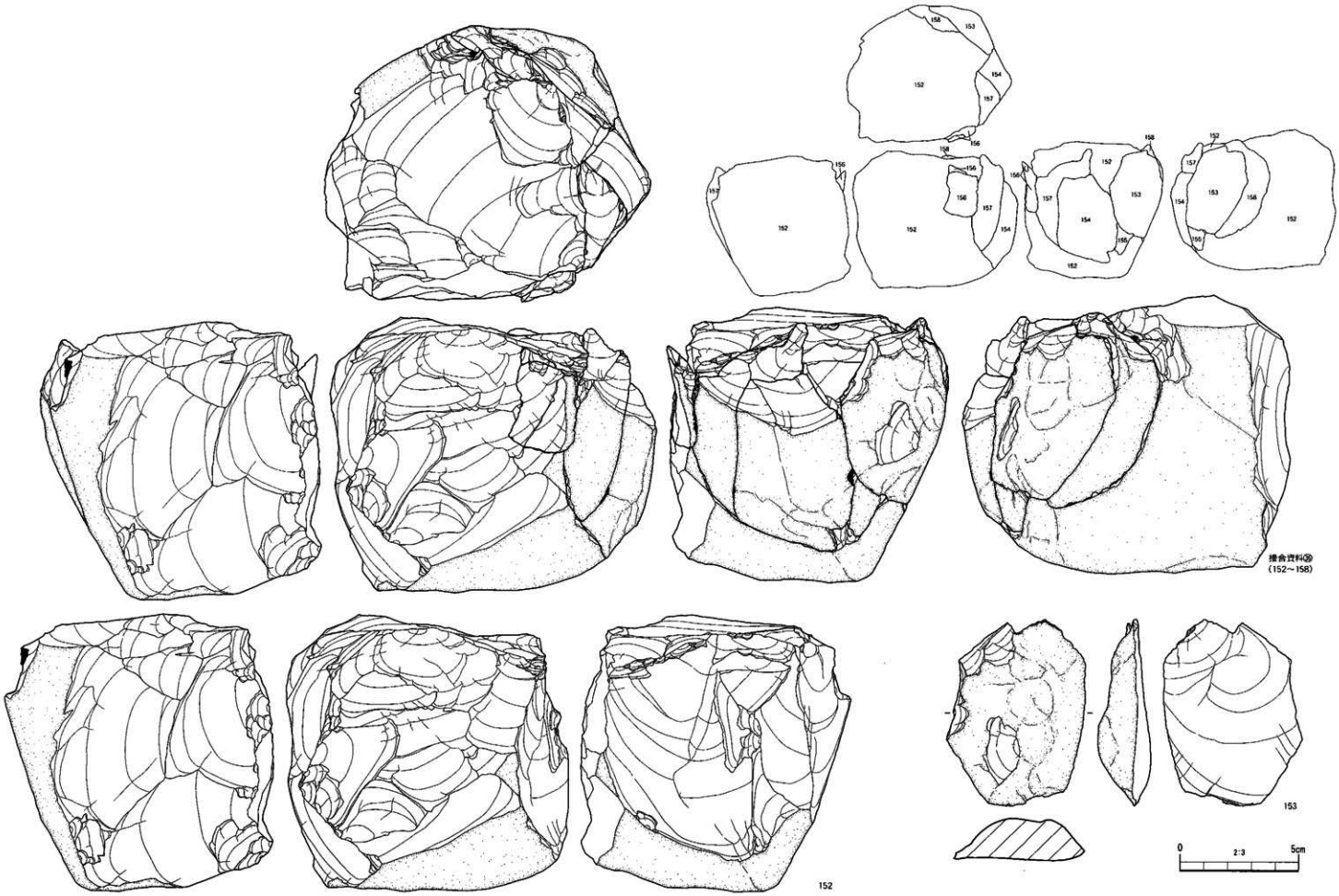
【第Ⅲ章　引用・参考文献】
秋成雅博　2009　「第Ⅵ章　まとめ」『清武上猪ノ原遺跡－２－』清武町埋蔵文化財調査報告書第26集　清武町教育委員会
宮崎県旧石器文化談話会　2005　「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66　旧石器文化談話会



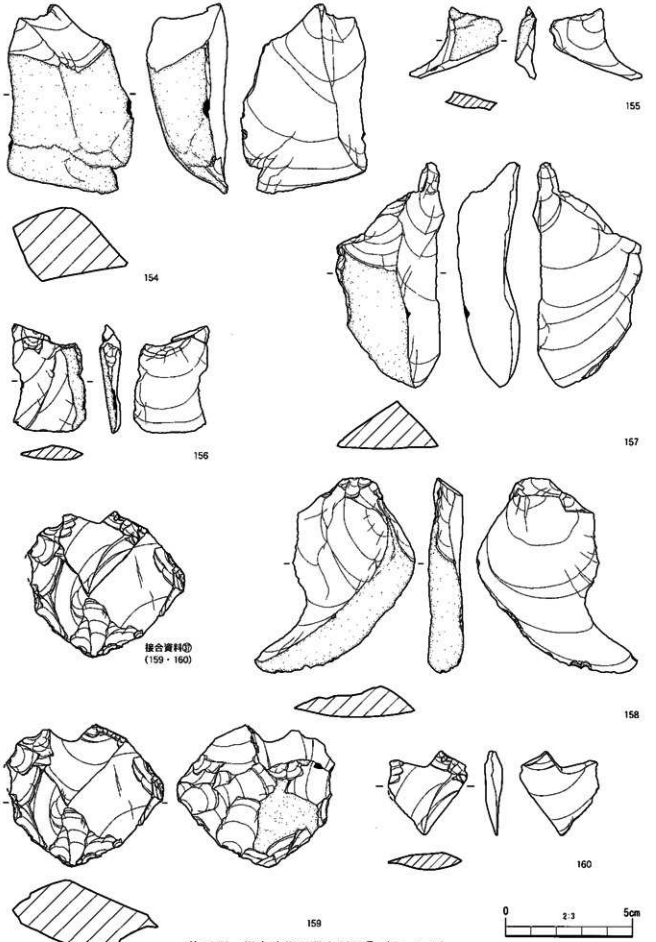
第75図　縄文時代石器実測図⑧（Ｓ＝2/3）



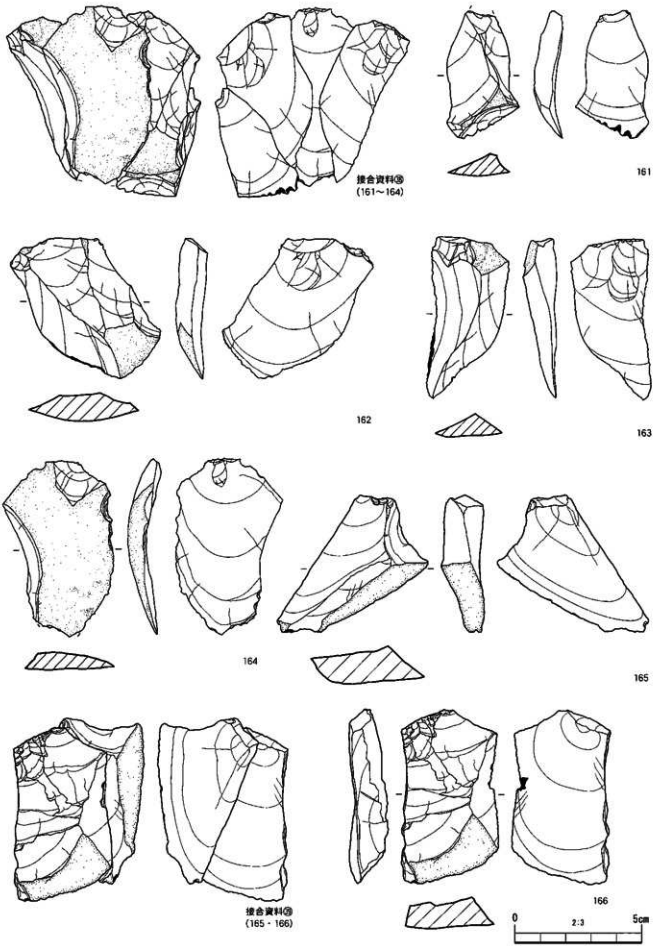
第76図　縄文時代石器実測図⑨（S＝2/3）



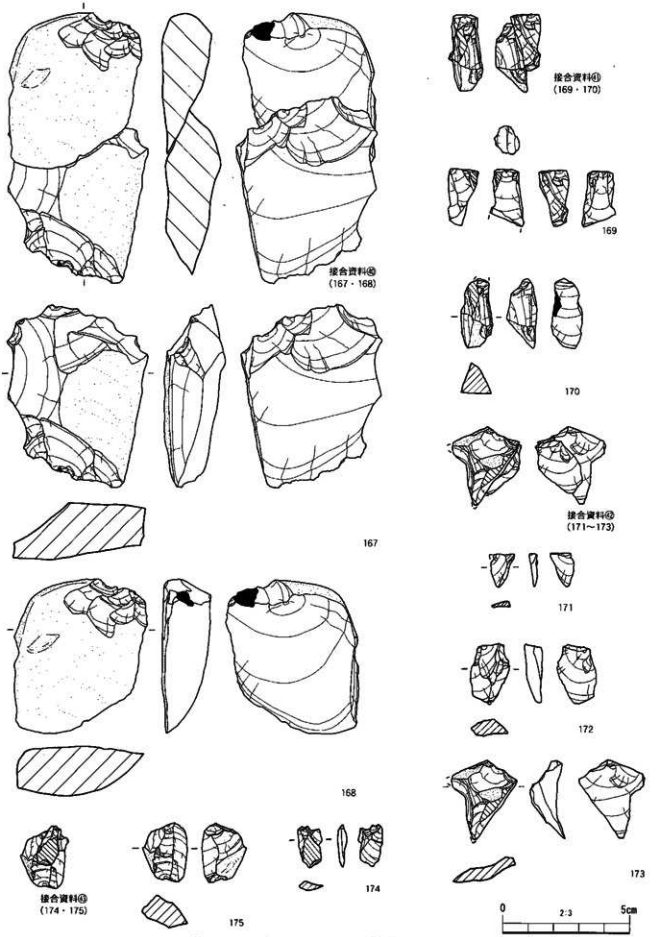
第77図　縄文時代石器実測図⑩（S＝2/3）



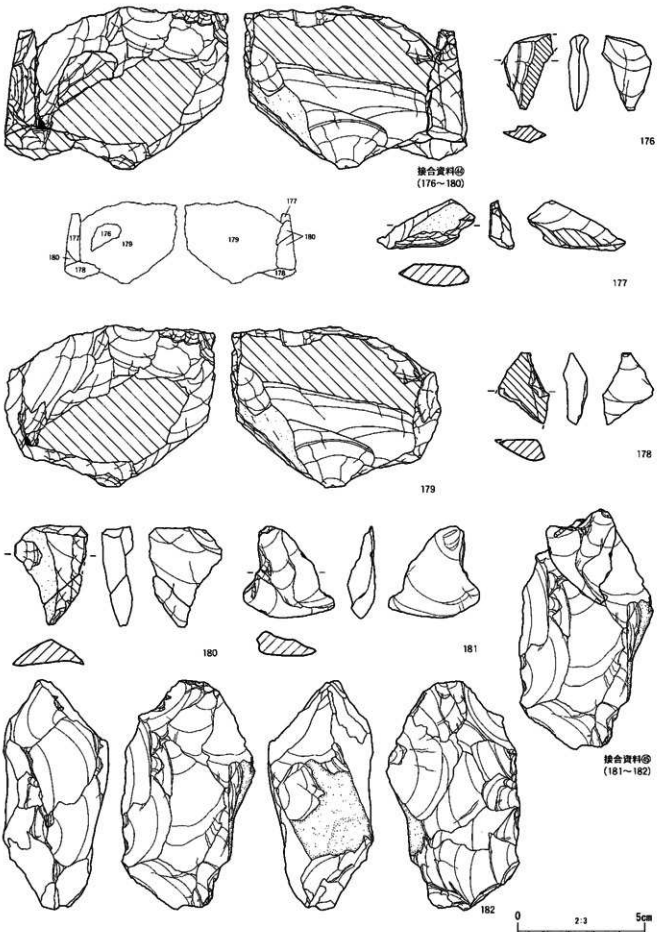
第78図　縄文時代石器実測図⑪（S＝2/3）



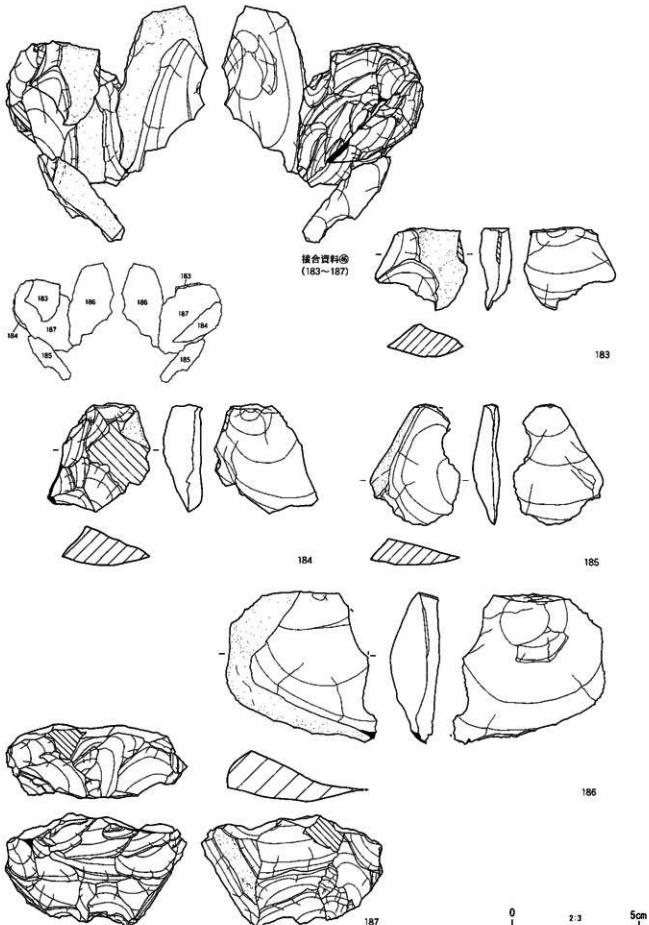
第79図　縄文時代石器実測図⑫（S＝2/3）



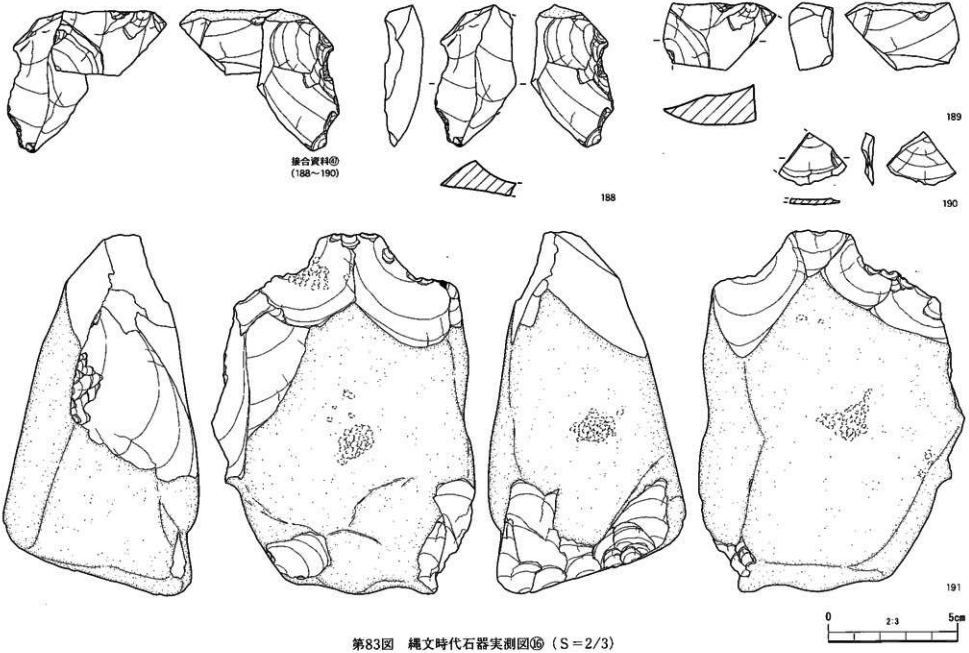
第80図　縄文時代石器実測図⑮（S＝2/3）



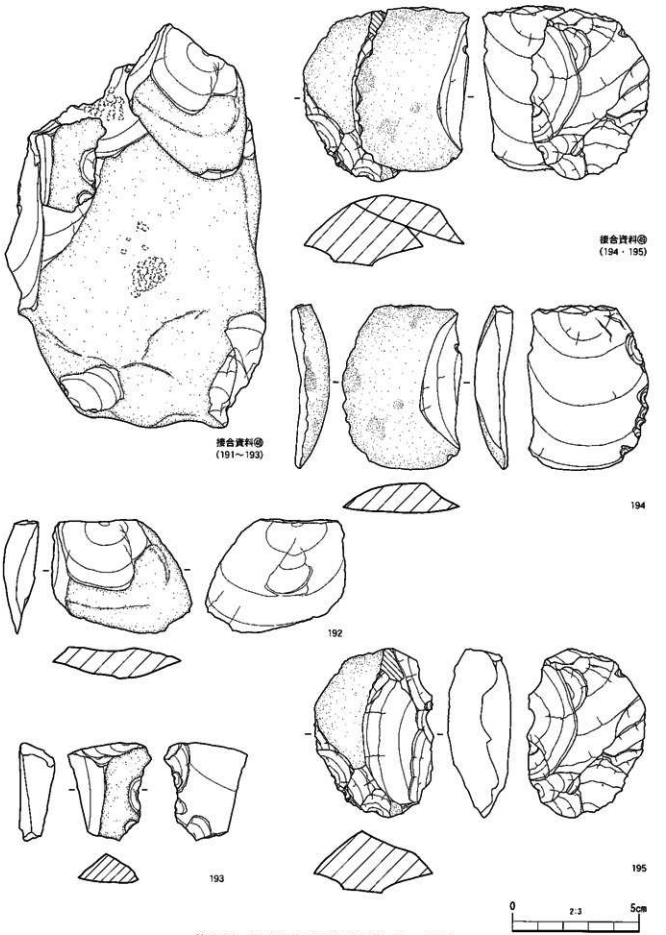
第81図　縄文時代石器実測図⑭（S＝2/3）



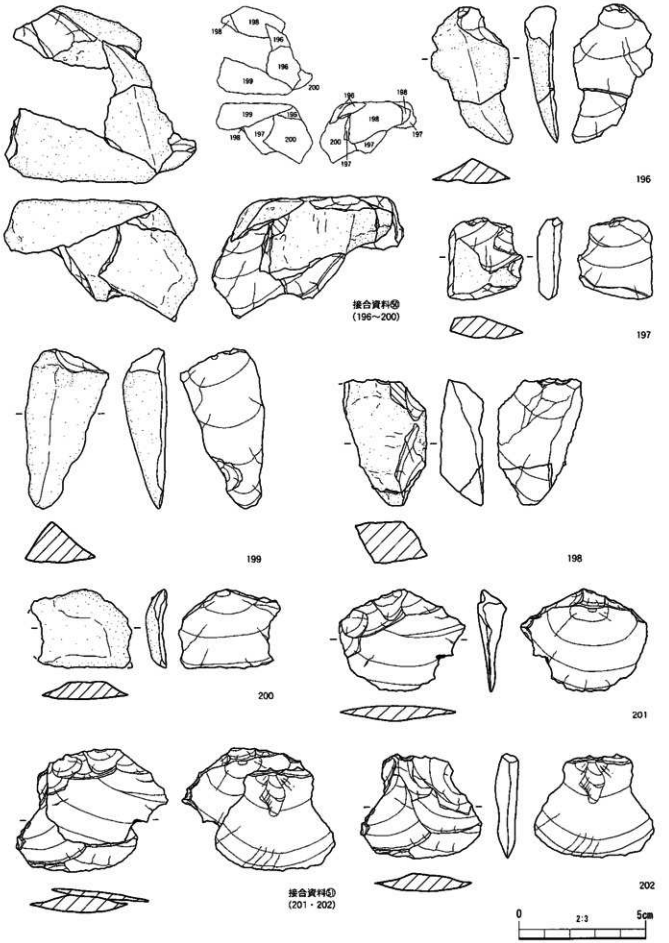
第82図　縄文時代石器実測図⑮（S＝2/3）



第83図　縄文時代石器実測図⑮（S＝2/3）



第84図　縄文時代石器実測図⑰（S＝2/3）



第85図　縄文時代石器実測図⑱（S＝2/3）

第7表　縄文土器観察表

報告書No.	器種	残存部位	出土地点	層位	色調 外面	色調 内面	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	胎土 石英・長石	胎土 輝石・角閃石	胎土 金色の雲母	胎土 白色の砂粒	胎土 砂粒・小礫	備考	実測No.
10	深鉢	胴部	5号集石		にぶい黄褐(10YR5/3)	灰白(10YR7/1)	ナデ・沈線文・貝殻条痕文	ケズリ	△	△			□4mm以下		103
11	深鉢	胴部	24号集石・A2・B1・C2区	Ⅴ～Ⅶ	にぶい褐(7.5YR5/3)	明褐灰(5YR7/1)	縄文	ケズリ?	○	○		△	△3mm以下		70
12	深鉢	胴部	9号集石		にぶい褐(7.5YR5/3)	褐灰(5YR6/1)	貝殻刺突文	ミガキ	△	△	△	○	△1.5mm以下		101
13	深鉢	胴部	28号集石		灰黄褐(10YR5/2)	明褐灰(5YR7/1)	沈線文・ナデ	ケズリ・ナデ	□	△		△	△7.5mm以下		102
14	深鉢	胴部	17号土坑・B1区	Ⅵ	褐灰(10YR6/1)	灰褐(7.5YR4/2)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下	外面スス付着	132
15	深鉢	胴部	17号土坑		灰褐(7.5YR4/2)	褐灰(5YR6/1)	指オサエ後ナデ	ナデ?(摩滅)	□				□1mm以下	外面スス付着	130
16	深鉢	口縁部～胴部	17号土坑・B1区	Ⅶ	灰褐(7.5YR4/2)	褐灰(10YR6/1)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下	外面スス付着	123
17	深鉢	口縁部～胴部	17号土坑		灰黄褐(10YR5/2)	褐灰(10YR6/1)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下		127
18	深鉢	口縁部～胴部	17号土坑		褐灰(7.5YR4/1)	褐灰(7.5YR4/1)	指オサエ	指オサエ	□				□1mm以下		129
19	深鉢	口縁部～胴部	B1・C1区	Ⅴ・Ⅶ	灰褐(7.5YR5/2)	灰褐(7.5YR5/2)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下		201
20	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	明褐灰(5YR7/2)	明褐灰(7.5YR7/1)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ・ナデ	□				□1mm以下		200
21	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	灰黄褐(10YR5/2)	褐灰(10YR6/1)	指オサエ後ナデ	指オサエ	□				□1mm以下		125
22	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR5/3)	ナデ	ナデ	□				□1mm以下		121
23	深鉢	口縁部	B1区	Ⅶ	灰褐(7.5R5/2)	灰黄褐(10R5/2)	指オサエ後ナデ	指オサエ	□				□1mm以下		128
24	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	明赤灰(5R7/1)	明赤灰(5R7/1)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下	外面スス付着	126
25	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	にぶい褐(7.5YR5/3)	灰褐(7.5YR4/2)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下	外面スス付着	120
26	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	灰褐(7.5YR4/2)	褐灰(7.5YR6/1)	ナデ	ナデ	□				□1mm以下		124
27	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅶ	褐灰(10YR6/1)	灰黄褐(10YR5/2)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				△2mm以下		122
28	深鉢	胴部	C1区	Ⅶ	暗灰黄(2.5Y4/2)	灰黄褐(10YR5/2)	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	□				□1mm以下	内面スス付着	131
29	深鉢	胴部	B1区	Ⅶ	灰黄褐(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/2)	指オサエ後ナデ	ナデ?(摩滅)	□				□1mm以下	外面スス付着	133
30	深鉢	口縁部～胴部	C1区	Ⅵ	灰黄褐(10YR5/2)	灰白(10YR7/1)	ナデ	ナデ	○	○		△	△1mm以下		114
31	深鉢	口縁部～胴部	C1区	Ⅵ・Ⅶ	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰白(10YR7/1)	ナデ	ナデ	□	○		△			115
32	深鉢	口縁部～胴部	C1区	Ⅵ・Ⅶ	黄灰(2.5Y5/1)	灰白(10YR7/1)	ナデ	ナデ	□	□		□			116
33	深鉢	口縁部～胴部	C1区	Ⅶ	灰黄褐(10YR5/2)	灰白(10YR7/1)	ナデ	ナデ	○	○		□			118
34	深鉢	口縁部～胴部	B1区	Ⅵ・Ⅶ	灰褐(5YR6/2)	灰褐(7.5YR6/2)	ミガキ	ケズリ後ミガキ	□				□1mm以下		117
35	深鉢	口縁部～胴部	B2区	Ⅵ	灰褐(7.5YR6/2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	ナデ?	ミガキ	□				□1mm以下		119
36	深鉢	口縁部～胴部	A2区	Ⅵ	灰赤(2.5YR6/2)	灰褐(5YR6/2)	楕円押型文	楕円押型文・ナデ	△	□		△	□2.5mm以下	胎土に繊維痕	72
37	深鉢	胴部	C1区	Ⅵ	にぶい褐(7.5YR6/4)	明褐灰(7.5YR7/2)	山形押型文	ナデ	○	○			△3mm以下		76
38	深鉢	胴部	B2区	Ⅵ	にぶい赤褐(5YR4/3)	明褐灰(7.5YR7/1)	山形押型文	ナデ	△	△			△4mm以下	胎土に繊維痕	77
39	深鉢	胴部	C2区	Ⅶ	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰白(10YR7/1)	山形押型文	ナデ	△	△		○	△5mm以下		74
40	深鉢	口縁部	B1区	Ⅶ	灰褐(7.5YR4/2)	灰白(N7/0)	縄文	原体条痕、縄文	△	△			△1.5mm以下		75
41	深鉢	胴部	B2区	Ⅵ	褐灰(7.5YR4/1)	明褐灰(7.5YR7/1)	縄文	縄文・ケズリ?	△	△			□1.5mm以下		73
42	深鉢	胴部	B1・B2区	Ⅴ・Ⅵ	にぶい赤褐(5YR5/4)	褐灰(10YR6/1)	縄文	ケズリ?	○	□			□5.5mm以下	外面スス付着	71
43	深鉢	胴部	B1区	Ⅵ	にぶい黄褐(10YR5/3)	褐灰(7.5YR6/1)	貝殻条痕文	ケズリ?	□	□			△1mm以下		79
44	深鉢	胴部	B2区	Ⅴ	灰黄褐(10YR5/2)	明褐灰(5YR7/1)	貝殻条痕文	ミガキ	△	△			△1.5mm以下		81
45	深鉢	口縁部	B2区	Ⅵ	灰黄褐(10YR5/2)	灰(N6/0)	ナデ・貝殻刺突文	ミガキ?(剥落)	◎		△	◎			83
46	深鉢	胴部～底部	A2区	Ⅶ	にぶい赤褐(5YR5/3)	褐灰(7.5YR6/1)	胴:貝殻刺突文、底:ミガキ?	ナデ	△	△	□	○			85
47	深鉢	胴部～底部	A3区	Ⅵ	灰褐(7.5YR5/2)	褐灰(7.5YR6/1)	胴:貝殻刺突文・ミガキ?、底:ミガキ?	ナデ	△		□	○	△1.5mm以下		86
48	深鉢	胴部～底部	B2区	Ⅴ・Ⅵ	にぶい褐(7.5YR5/3)	明褐灰(7.5YR7/1)	胴:貝殻刺突文・ミガキ?、底:ミガキ?	ケズリ?・ナデ	△	△	△	○			87
49	深鉢	胴部	C1区	Ⅵ	灰褐(7.5YR5/2)	明褐灰(7.5YR7/1)	貝殻条痕文	ミガキ	△		△	□	△2mm以下		80
50	深鉢	口縁部～胴部	A2区	Ⅵ・Ⅶ	にぶい褐(7.5YR5/3)	灰褐(7.5YR6/2)	沈線文・短沈線文	ミガキ	□		□	◎	□2mm以下		198
51	深鉢	口縁部～胴部	A2区	Ⅴ	にぶい褐(7.5YR5/3)	明褐灰(7.5YR7/1)	口:ナデ、胴:沈線文・短沈線文	ナデ?(摩滅)	□	△	△	◎	□1.5mm以下		82
52	深鉢	胴部	A3区	Ⅵ	にぶい褐(7.5YR5/3)	明褐灰(7.5YR7/1)	短沈線文・貝殻刺突文	ミガキ	△	△	△	○	△1.5mm以下		84
53	深鉢	胴部	C2区	Ⅵ	にぶい褐(7.5YR5/3)	明褐灰(5YR7/2)	ナデ・沈線文・縄文	ナデ	△	○			△1.5mm以下		78
54	深鉢	胴部	A3区		明赤灰(2.5YR7/2)	にぶい赤褐(5YR5/3)	貝殻刺突文・ナデ	貝殻条痕文	△	△			□4.5mm以下		88

※胎土に含まれる鉱物の量を次の記号で示す。 △:微量 □:若干 ○:普通 ◎:多量

第8表　縄文時代の石器計測表①

報告書No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	実測No.
1	スクレイパー	1号石器埋納遺構		頁岩	(6.4)	(5.8)	1.55	(52.2)	欠損あり	209
2	スクレイパー	1号石器埋納遺構		頁岩	5.4	6.4	1.45	36.2		211
3	二次加工ある剥片	1号石器埋納遺構		頁岩	(6.95)	3.1	0.7	(14.6)	欠損あり	206
4	二次加工ある剥片	1号石器埋納遺構		頁岩	5.25	4.5	1.15	23.4		210
5	二次加工ある剥片	1号石器埋納遺構		頁岩	3.25	3.05	0.9	9.7		205
6	二次加工ある剥片	1号石器埋納遺構		頁岩	3.4	3.5	0.9	8.5		212
7	敲石	11号集石		砂岩	(5.6)	(9.9)	(5.1)	(284.0)	欠損あり	66
8	敲石	27号集石		砂岩	(6.0)	(8.9)	(6.0)	(260.0)	欠損あり	62
9	台石	28号集石		砂岩	30.2	(21.25)	8.2	(5100.0)	欠損あり	207
55	打製石鏃	B1区	VI	チャート	(1.6)	(1.6)	0.4	(0.7)	欠損あり	32
56	打製石鏃	C2区	VI	頁岩	1.5	(1.6)	0.3	(0.5)	欠損あり	33
57	打製石鏃	B1区	VI	黒曜石(桑ノ木津留)	1.3	1.2	0.3	0.3		31
58	打製石鏃	C1区	VI	チャート	2.0	1.1	0.4	0.6		35
59	打製石鏃	B1区	VI	チャート	(1.5)	1.1	0.3	(0.4)	欠損あり	30
60	打製石鏃	C1区	VI	安山岩	(1.5)	1.1	0.3	(0.3)	欠損あり	34
61	打製石鏃	B1区	VI	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.3)	(1.3)	0.4	(0.4)	欠損あり	3
62	打製石鏃	A1区	VI	黒曜石(姫島)	(1.0)	1.4	0.4	(0.2)	欠損あり	12
63	打製石鏃	A3区	VII	チャート	(1.8)	1.5	0.2	(0.5)	欠損あり	1
64	打製石鏃	C1区	VI	頁岩	1.7	1.3	0.3	0.8		10
65	打製石鏃	C1区	VI	砂岩	2.3	(1.5)	0.3	(0.7)	欠損あり	18
66	打製石鏃	C1区	VI	チャート	(2.3)	(1.7)	0.5	(1.3)	欠損あり	19
67	打製石鏃	C1区	VII	流紋岩	2.3	(1.3)	0.4	(0.8)	欠損あり	27
68	打製石鏃	C1区	VII	頁岩	(2.3)	2.1	0.3	(1.5)	欠損あり	29
69	打製石鏃	C1区	VI	チャート	2.0	1.5	0.3	1.0		7
70	打製石鏃	C1区	VII	流紋岩	2.1	1.8	0.3	1.2		11
71	打製石鏃	B1区	VII	頁岩	(1.6)	(1.1)	(0.3)	(0.3)	欠損あり	23
72	打製石鏃	C1区	VI	流紋岩	1.2	1.7	0.3	0.3		6
73	打製石鏃	C1区	VI	頁岩	1.6	1.7	0.4	0.7		5
74	打製石鏃	C1区	VI	流紋岩	(1.7)	2.0	0.3	(0.7)	欠損あり	22
75	局部磨製石鏃	B1区	VII	頁岩	(2.4)	(1.4)	0.3	(1.0)	欠損あり	8
76	局部磨製石鏃？	C1区	VI	頁岩	2.4	1.3	0.2	0.7		9
77	局部磨製石鏃	C2区	VI	頁岩	(2.0)	(1.8)	0.3	(1.2)	欠損あり	21
78	局部磨製石鏃	B1区	VII	頁岩	(2.6)	1.6	(0.2)	(1.0)	欠損あり	17
79	局部磨製石鏃	C1区	V	頁岩	(2.2)	(1.7)	0.3	(1.3)	欠損あり	25
80	石鏃	B1区	VI	チャート	(2.4)	1.2	0.4	(1.0)	欠損あり	2
81	石鏃	B2区	V	黒曜石(姫島)	(2.2)	1.7	0.3	(0.8)	欠損あり	13
82	石鏃	B2区	VII	チャート	1.7	1.7	0.4	0.6		4
83	石鏃	B1区	VI	チャート	(1.5)	(1.1)	0.2	(0.4)	欠損あり	14
84	石鏃	B1区	VI	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.3)	欠損あり	15
85	石鏃	B1区	VII	チャート	(1.7)	(1.15)	(0.2)	(0.2)	欠損あり	137
86	石鏃	C1区	VII	チャート	(1.6)	(1.4)	0.3	(0.5)	欠損あり	20
87	石鏃	C1区	VII	頁岩	1.6	(1.6)	0.3	(0.5)	欠損あり	26
88	石鏃	C1区	V	頁岩	(1.9)	(1.9)	0.4	(0.8)	欠損あり 研磨の可能性あり	28
89	石鏃	B1区	VII	チャート	(1.3)	2.0	(0.35)	(0.7)	欠損あり	135
90	石鏃未製品	B1区	VI	流紋岩	2.4	1.9	0.7	3.1		40
91	石鏃未製品	B2区	VI	チャート	3.4	2.8	0.8	4.5		37
92	石鏃未製品	B2区	V	チャート	2.8	2.2	0.9	6.0		38
93	石鏃未製品	B2区	VI	チャート	2.4	(2.1)	0.8	(4.1)	欠損あり	39
94	石鏃未製品	B1区	VI	頁岩	3.4	2.6	0.8	5.6		42
95	石鏃未製品	B1区	VI	チャート	2.3	2.0	0.7	2.9		41
96	石鏃未製品	C1区	VII	砂岩	3.2	2.5	0.6	4.8		48
97	石鏃未製品	C1区	VII	頁岩	2.8	2.1	0.5	3.0		44

第９表　縄文時代の石器計測表②

報告書No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	実測No.
98	石鏃未製品	C1区	Ⅶ	流紋岩	3.1	2.5	1.0	7.0		47
99	石鏃未製品	C1区	Ⅵ	流紋岩	2.8	1.8	0.7	3.2		43
100	石鏃未製品	C1区	Ⅵ	チャート	3.0	1.9	0.8	4.6		46
101	石鏃未製品	C1区	Ⅵ	頁岩	2.5	2.0	0.5	2.6		45
102	石鏃未製品	B1区	Ⅵ	チャート	(2.3)	(1.9)	(0.6)	(2.5)	欠損あり	24
103	石鏃未製品	C1区	Ⅵ	流紋岩	3.35	2.8	0.6	7.3		140
104	石鏃未製品	B1区	Ⅵ	頁岩	2.9	2.55	0.6	2.2		139
105	石鏃未製品	C1区	Ⅶ	頁岩	(2.7)	(2.05)	(0.2)	(1.3)	欠損あり	136
106	石鏃未製品	B2区		頁岩	(2.35)	(2.0)	(0.2)	(1.2)	欠損あり	138
107	尖頭状石器	B2区	Ⅵ	頁岩	4.2	(2.6)	0.8	(8.2)	欠損あり 研磨の可能性あり	51
108	尖頭状石器	C1区	Ⅶ	ホルンフェルス	3.3	2.5	0.8	7.1		53
109	尖頭状石器	C2区	Ⅶ	チャート	3.4	(1.5)	0.5	(2.4)	欠損あり	52
110	槍先形尖頭器	C2区	Ⅵ	砂岩	6.1	1.6	0.6	5.6		57
111	周部磨製尖頭器	C1区	Ⅵ	頁岩	6.3	2.0	0.6	8.5		58
112	槍先形尖頭器	B1区	Ⅵ	流紋岩	(6.7)	(4.0)	(1.3)	(20.2)	欠損あり	59
113	槍先形尖頭器	C1区	Ⅶ	頁岩	8.4	2.8	1.3	24.5		56
114	石錐	C1区	Ⅶ	流紋岩	(1.95)	1.5	0.45	(0.6)	欠損あり	143
115	石錐	B1区	Ⅵ	チャート	2.3	1.8	0.5	1.5		50
116	石錐	C2区	Ⅶ	流紋岩	(1.9)	(1.4)	0.3	(0.6)	欠損あり	16
117	石錐	C1区	Ⅵ	砂岩	2.8	2.8	1.6	3.2		36
118	石錐	C1区	Ⅶ	チャート	(2.6)	(1.7)	0.4	(1.4)	欠損あり	49
119	石錐	B1区	Ⅴ	チャート	(3.3)	(2.15)	0.4	(2.2)	欠損あり	142
120	石錐	B1区	Ⅶ	流紋岩	(3.75)	2.95	1.6	(12.1)	欠損あり	141
121	スクレイパー	B1区	Ⅶ	チャート	5.3	3.45	1.35	16.5		162
122	スクレイパー	B1区	Ⅶ	頁岩	7.2	5.0	2.35	65.1		164
123	スクレイパー	C2区	Ⅵ	粘板岩	(7.9)	(4.85)	(0.7)	(30.5)	欠損あり	194
124	スクレイパー	C2区	Ⅵ	流紋岩	6.35	4.55	1.7	26.2		163
125	スクレイパー	C1区	Ⅵ	流紋岩	4.35	3.5	0.8	9.9		208
126	スクレイパー	C1区	Ⅶ	流紋岩	5.7	3.05	1.1	15.0	接合資料㉜ 折れ面接合 折れた後再加工	289
127	スクレイパー	C2区	Ⅶ	砂岩	12.15	9.0	3.15	356.5		156
128	スクレイパー	C1区	Ⅶ	ホルンフェルス	10.8	10.4	4.15	586.9		157
129	スクレイパー	C2区	Ⅵ	流紋岩	10.05	9.6	3.45	384.7		158
130	二次加工ある剥片	C2区	Ⅴ	チャート	2.45	1.8	0.9	3.0		161
131	敲石	C1区	Ⅵ	砂岩	12.7	5.9	3.6	342.0		64
132	敲石	C1区	Ⅶ	砂岩	11.0	7.9	3.9	445.0		61
133	敲石	B1区	Ⅶ	砂岩	14.9	10.6	4.7	1180.0		63
134	台石	B1区	Ⅶ	砂岩	24.5	10.2	7.7	2455.0	敲石としても使用	196
135	台石	B1区	Ⅵ	砂岩	36.78	32.6	13.85	16500.0		199
136	石皿	A2区	Ⅴ	砂岩	(33.3)	(24.1)	(11.6)	(13700.0)	欠損あり	203
137	磨石	C2区	Ⅶ	尾鈴酸性岩	10.4	(8.6)	4.7	(620.0)	欠損あり 敲石に転用	69
138	磨石	C1区	Ⅵ	砂岩	8.4	6.1	4.1	310.0		68
139	石核	C1区	Ⅵ	黒曜石(桑ノ木津留)	2.95	1.55	1.5	6.0		148
140	石核	C1区	Ⅶ	砂岩	12.2	9.45	3.8	488.4	礫器の可能性もあり	150
141	剥片	B2区	Ⅵ	尾鈴酸性岩	2.95	2.0	0.35	2.4		146
142	剥片	B2区	Ⅵ	尾鈴酸性岩	(4.55)	3.85	1.35	(19.9)	欠損あり	147
143	剥片	A1区	Ⅶ	砂岩	3.05	3.3	0.95	(9.2)	接合資料㉝ 欠損あり	273
144	石核	A1区	Ⅶ	砂岩	6.4	8.5	3.05	231.0	接合資料㉝	274
145	剥片	A1区	Ⅶ	砂岩	(6.55)	(5.65)	2.0	(70.6)	接合資料㉞ 欠損あり	241
146	剥片	C1区	Ⅵ	砂岩	5.65	(4.75)	1.55	(30.6)	接合資料㉞ 欠損あり	242
147	剥片	C1区	Ⅵ	砂岩	1.35	1.6	0.7	1.5	接合資料㉟	453
148	石核	C1区	Ⅵ	砂岩	4.75	6.65	2.6	74.4	接合資料㉟	449
149	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	3.2	2.2	1.2	4.8	接合資料㉟	452
150	剥片	C1区	Ⅵ	砂岩	(2.9)	(2.1)	0.8	(3.0)	接合資料㉟ 欠損あり	450
151	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	(2.25)	(2.4)	0.7	(2.8)	接合資料㉟ 欠損あり	451

第10表　縄文時代の石器計測表③

報告書No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	実測No.
152	石核	B1区	Ⅶ	砂岩	11.9	12.1	11.5	2290.0	接合資料㊽	319
153	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	8.0	5.9	2.3	93.1	接合資料㊽	317
154	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	7.4	5.0	3.2	1080.0	接合資料㊽	316
155	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	2.8	3.7	0.8	3.4	接合資料㊽	314
156	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	4.15	2.95	0.85	8.4	接合資料㊽	313
157	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	8.75	4.3	2.45	65.1	接合資料㊽	315
158	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	7.7	6.35	1.4	44.3	接合資料㊽	318
159	石核	C2区	Ⅵ	砂岩	5.55	6.3	2.7	77.6	接合資料㊼	384
160	剥片	C2区	Ⅶ	砂岩	3.3	3.1	0.7	5.3	接合資料㊼	385
161	剥片	C1区	Ⅶ	頁岩	(5.0)	2.9	1.1	(10.1)	接合資料㊽ 欠損あり	285
162	剥片	C1区	Ⅶ	頁岩	5.5	6.0	1.25	28.8	接合資料㊽	282
163	剥片	C1区	Ⅵ	頁岩	6.3	3.25	1.3	16.0	接合資料㊽	283
164	剥片	C2区	Ⅴ	頁岩	(6.9)	4.3	1.3	(24.7)	接合資料㊽ 欠損あり	284
165	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	5.35	5.95	1.7	31.3	接合資料㊾	387
166	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	6.85	3.85	1.65	42.0	接合資料㊾	388
167	石核	B1区	Ⅶ	砂岩	7.2	5.5	2.2	92.2	接合資料㊾	305
168	剥片	A1区	Ⅶ	砂岩	5.05	5.3	1.9	69.0	接合資料㊾	306
169	石核	C2区	Ⅵ	チャート	(2.2)	(1.35)	1.2	(3.2)	接合資料㊶ 欠損あり	255
170	剥片	C1区	Ⅶ	チャート	(2.7)	1.2	1.2	(3.2)	接合資料㊶ 欠損あり	254
171	剥片	B1区	Ⅵ	チャート	1.3	(0.95)	0.3	(0.1)	接合資料㊷ 欠損あり	268
172	剥片	B1区	Ⅶ	チャート	(2.3)	1.55	0.7	(2.2)	接合資料㊷ 欠損あり	270
173	剥片	B1区	Ⅶ	チャート	(3.05)	(2.6)	1.35	(4.2)	接合資料㊷ 欠損あり	269
174	剥片	C1区	Ⅵ	チャート	1.6	0.95	0.35	0.4	接合資料㊸	257
175	石核	C1区	Ⅵ	チャート	2.3	1.8	1.3	4.1	接合資料㊸	258
176	剥片	B1区	Ⅵ	流紋岩	(2.9)	(1.95)	0.75	(2.9)	接合資料㊹ 欠損あり	431
177	剥片	C1区	Ⅴ	流紋岩	1.9	3.85	0.9	5.1	接合資料㊹	430
178	剥片	C1区	Ⅵ	流紋岩	(2.8)	(2.0)	0.95	(3.4)	接合資料㊹ 欠損あり	429
179	石核	C1区	Ⅶ	流紋岩	6.3	8.35	4.6	216.2	接合資料㊹	433
180	剥片	B1区	Ⅴ	流紋岩	3.9	2.9	1.25	(7.7)	接合資料㊹ 欠損あり 折れ面接合	432
181	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	3.55	3.6	1.1	8.6	接合資料㊺	398
182	石核	C1区	Ⅶ	砂岩	9.05	5.3	4.15	189.2	接合資料㊺	397
183	剥片	C1区	Ⅵ	頁岩	3.2	3.65	1.25	10.9	接合資料㊻	406
184	剥片	C1区	Ⅵ	頁岩	4.3	4.1	1.55	20.0	接合資料㊻	404
185	剥片	C1区	Ⅵ	頁岩	4.8	3.55	1.05	(11.3)	接合資料㊻ 欠損あり	407
186	剥片	C1区	Ⅵ	頁岩	(5.9)	(6.0)	1.95	(50.9)	接合資料㊻ 欠損あり	405
187	石核	B1区	Ⅵ	頁岩	4.4	7.2	2.9	97.6	接合資料㊻	403
188	石核	C1区	Ⅵ	砂岩	5.59	3.2	1.3	(20.0)	接合資料㊼ 欠損あり	300
189	石核	C1区	Ⅵ	砂岩	(2.65)	(4.4)	1.4	(19.7)	接合資料㊼ 欠損あり	301
190	剥片	C2区	Ⅶ	砂岩	(2.1)	(2.65)	0.3	(1.4)	接合資料㊼ 欠損あり	302
191	石核	B1区	Ⅵ	砂岩	14.25	10.3	7.7	1190.0	接合資料㊽ 礫石に転用	390
192	剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	4.45	5.6	1.4	28.7	接合資料㊽	391
193	剥片	C1区	Ⅵ	砂岩	3.85	3.3	1.4	13.1	接合資料㊽	392
194	石核	C1区	Ⅶ	ホルンフェルス	6.4	4.8	1.5	45.0	接合資料㊾	249
195	石核	C1区	Ⅶ	ホルンフェルス	6.65	4.7	2.6	84.7	接合資料㊾	248
196	剥片	C2区	Ⅵ	流紋岩	5.35	3.1	1.25	12.2	接合資料㊿ 折れ面接合	435
197	剥片	C1区	Ⅵ	流紋岩	3.2	2.9	0.9	10.1	接合資料㊿	436
198	剥片	C1区	Ⅵ	流紋岩	4.9	(3.4)	1.7	(28.0)	接合資料㊿ 欠損あり	439
199	剥片	C2区	Ⅶ	流紋岩	6.21	3.33	1.7	23.3	接合資料㊿	438
200	剥片	C1区	Ⅵ	流紋岩	3.9	4.0	6.68	(9.9)	接合資料㊿ 欠損あり	437
201	剥片	C1区	Ⅶ	砂岩	4.0	5.0	0.6	11.9	接合資料(51)	236
202	二次加工ある剥片	B1区	Ⅶ	砂岩	4.1	4.8	0.75	14.4	接合資料(51)	235

第Ⅳ章　弥生時代の調査

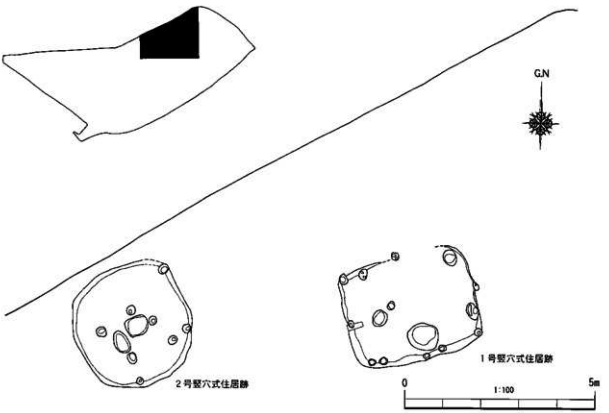
第１節　遺構

アカホヤ火山灰層上面において、Ｂ２・Ｃ２区より弥生時代に該当する遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴式住居跡が２軒である。検出された遺構の位置関係は第86図に示すとおりである。以下、各遺構について詳述する。

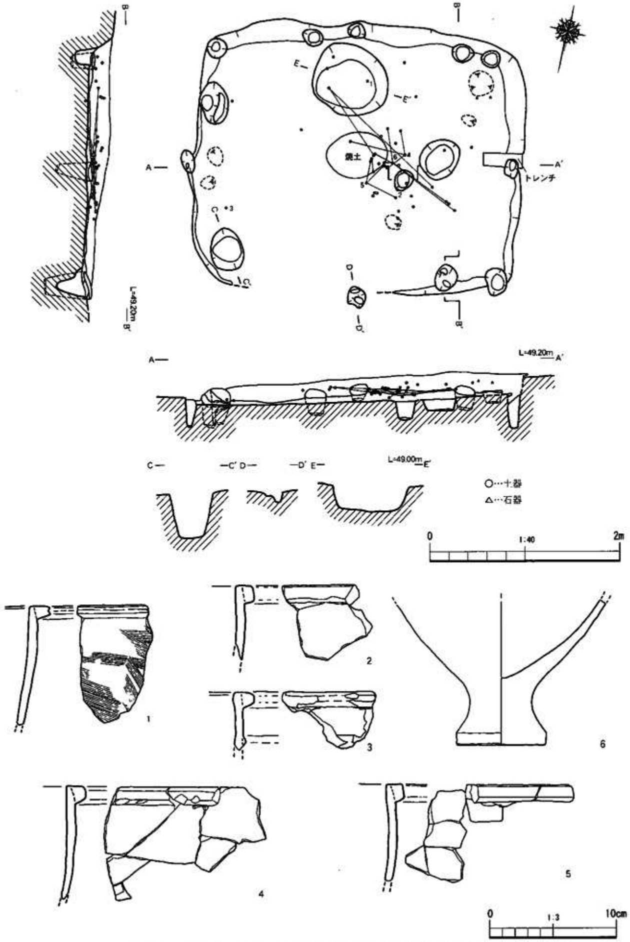
【１号竪穴式住居跡】　グリッドＣ２区に位置する。住居が所在する地点の地形は概ね平坦面である。住居の平面形態は隅丸長方形を呈する。住居内中央からは炉の痕跡と考えられる焼土を検出した。焼土直下からは砂岩の扁平な礫が出土しており（図版８－２）、炉に伴う礫の可能性がある。なお、貼床の痕跡は確認できなかった。住居の規模は長軸1.79m、短軸1.44m、検出面から掘り込み面までの深さは0.19mである。住居の残存状況はあまり良くなく、検出時に住居の北側部分がすでに消失している状況であった。柱穴は住居内床面から１基、壁際から12基検出された。柱穴の規模は直径0.06～0.23m、深さ0.06～0.24mである。床面からは土坑が検出されているが、この土坑の埋土は住居内のものと大きく異なるため、住居に伴う土坑とするには疑問が残る。

住居内から弥生土器・石器が出土したが、いずれも埋土中からの出土である。このうち、土器６点を図化した。１～５は甕の口縁部片である。１は口縁端部に断面長方形の突帯をほぼ水平に貼り付けている。口唇部中央にくぼみをもつ。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がハケメである。内面調整はナデである。２は口縁端部に断面略正方形の突帯をほぼ水平に貼り付けている。調整は内外面ともナデである。３は口縁端部に断面台形の突帯をほぼ水平に貼り付けている。また、胴部には断面三角形の突帯の一部が確認できる。調整は内外面ともナデである。４は口縁端部に断面台形の突帯をほぼ水平に貼り付けている。調整は内外面ともナデである。５は口縁端部に断面略正方形の突帯をほぼ水平に貼り付けている。口唇部中央がややくぼむ。調整は内外面ともナデである。６は甕の底部片である。脚台状を呈し、中実である。

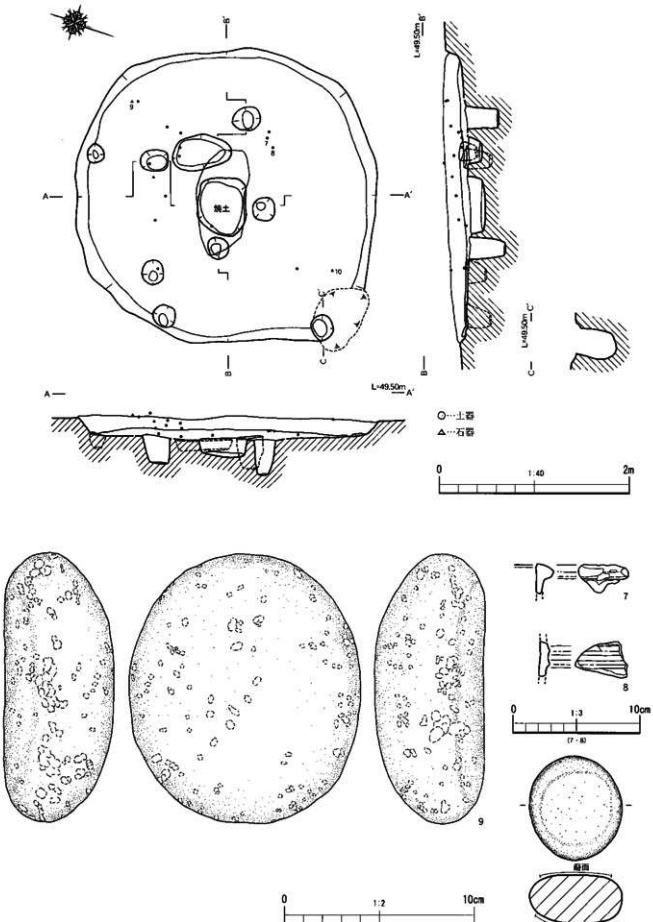
本住居内から出土した土器の時期については、甕の口縁部突帯の断面形態が台形状を呈していること、口唇部にくぼみをもつものや脚台状を呈する底部片が存在することなどから石川稔年（石川1984）のⅡｂ期、中期前葉に該当すると考えられる。



第86図　弥生時代遺構配置図（Ｓ＝1/100）



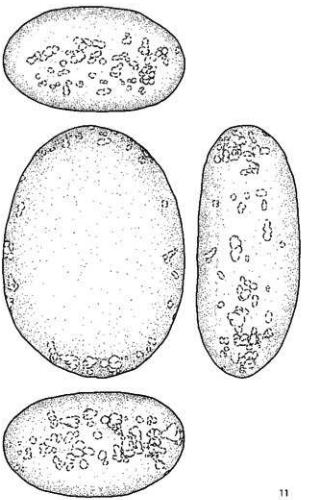
第87図　１号竪穴式住居跡実測図及び１号竪穴式住居跡出土遺物実測図（S＝1/40、1/3）



第88図　2号竪穴式住居跡実測図及び2号竪穴式住居跡出土遺物実測図（S＝1/40、1/3、1/2）

【2号竪穴式住居跡】 グリッドB2区に位置する。住居が所在する地点の地形は概ね平坦面である。住居の平面形態は不整円形を呈する。住居内中央からは炉の痕跡と考えられる焼土を検出した。なお、貼床の痕跡は確認できなかった。住居の規模は長軸1.60m、短軸1.54m、検出面から掘り込み面までの深さは0.22mである。柱穴は住居内床面から5基、壁際から3基検出された。うち住居内床面から検出された1基は、焼土下より検出されていることから住居に伴う柱穴とは考えにくい。柱穴の規模は直径0.10～0.15m、深さ0.08～0.20mである。住居内中央床面から土坑が2基検出された。しかし先述の柱穴同様、焼土下より検出されていることから住居に伴う土坑とは考えにくい。

住居内から弥生土器・石器が出土したが、いずれも埋土中からの出土である。このうち、土器2点、石器2点を図化した。7は甕の口縁部片である。口縁端部に断面台形の突帯をやや下方に貼り付けている。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。内面調整はナデである。外面にススが付着している。8は甕もしくは壺の胴部片である。二条の突帯を貼り付けている。突帯の断面形態は三角形である。調整は内外面ともナデである。外面にススが付着している。9は敲石である。砂岩製の円礫を素材とする。周縁部の敲打痕が顕著である。10は磨石である。砂岩製の円礫を素材とする。両面に平滑な面をもつ。出土した遺物の時期は1号竪穴式住居跡とほぼ同時期頃と思われる。



第89図　包含層出土弥生時代遺物実測図①（S＝1/2）

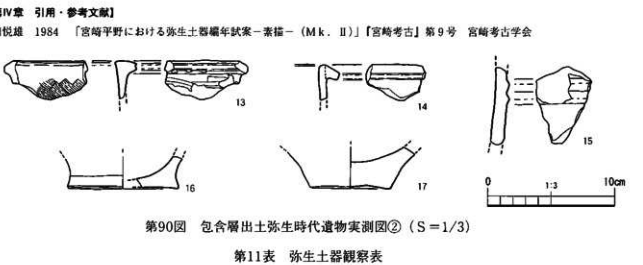
第２節　包含層出土遺物

グリッドＢ２・Ｃ２区のⅡ層を中心に弥生土器片が出土した。また、Ⅱ層からは他の時期と判断できる遺物の出土がなかったため、この層から出土した石器も弥生時代に該当する遺物と判断し報告することとする。

11・12はいずれも砂岩製の円礫を素材とする敲石である。11は周縁部に敲打痕を確認できる。12は石器の中央部分両面に敲打痕を確認できる。13・14は甕の口縁部片である。13は口縁端部に断面台形の突帯をほぼ水平に貼り付けている。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が板状工具によるナデである。内面調整はナデ・ハケメである。14は口縁端部に断面台形の突帯をやや下方に貼り付けている。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。内面調整はナデである。15は甕もしくは壺の胴部片である。二条の突帯を貼り付けている。突帯の断面形態は三角形である。調整は内外面ともナデである。16は甕の底部片と思われる。平底で端部がわずかに張り出す。調整は内外面ともナデである。17は壺の底部片である。平底である。調整は内外面ともナデである。

【第Ⅳ章　引用・参考文献】

石川悦雄　1984　「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－（Ｍｋ．Ⅱ）」『宮崎考古』第９号　宮崎考古学会



第90図　包含層出土弥生時代遺物実測図②（Ｓ＝1/3）

第11表　弥生土器観察表

報告日No.	器種	残存部位	出土地点	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	調整 外面	内面	備考	実測No.
1	甕	口縁部～胴部	1号住居					にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	口:ヨコナデ、胴:ハケ目	ナデ	外面にスス付着	110
2	甕	口縁部～胴部	1号住居					にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	ナデ	ナデ		111
3	甕	口縁部～胴部	1号住居					にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR5/3)	口:ヨコナデ、胴:ナデ・突帯	ナデ	外面にスス付着	109
4	甕	口縁部～胴部	1号住居					にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	ナデ	ナデ	外面にスス付着	107
5	甕	胴部	1号住居					灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	ナデ	ナデ		108
6	甕	胴部～脚台部	1号住居				7.9	灰褐(7.5YR6/2)	灰褐(7.5YR5/2)	ナデ	ナデ	内面にスス付着　反転復元	106
7	甕	口縁部～胴部	2号住居					灰褐(7.5YR5/2)	灰褐(7.5YR5/2)	口:ヨコナデ、胴:ナデ	ナデ	外面にスス付着	112
8	甕?	胴部	2号住居					にぶい褐(7.5YR5/3)	灰褐(7.5YR4/2)	ナデ、突帯	ナデ	外面にスス付着	113
13	甕	口縁部～胴部	C2区	Ⅱ				褐灰(10YR6/1)	灰白(10YR7/1)	口:ヨコナデ、胴:板状工具によるナデ	ナデ・ハケメ		91
14	甕	口縁部～胴部	B2区					暗灰黄(2.5Y5/2)	にぶい黄褐(10YR6/3)	口:ヨコナデ、胴:ナデ	ナデ		92
15	甕?	胴部	C2区	Ⅱ				にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	ナデ、突帯	ナデ		93
16	甕?	底部	C2区	Ⅱ			(8.8)	にぶい褐(7.5YR5/3)	褐灰(10YR4/1)	ナデ	ナデ	反転復元	90
17	壺	底部					(6.4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4) オサエ	胴:ナデ、底:ナデ・指	ナデ	反転復元	94

第12表　弥生時代の石器計測表

報告日No.	器種	出土地点	層位	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	実測No.
9	敲石	2号住居		砂岩	14.1	12.2	5.8	1410.0		202
10	磨石	2号住居		砂岩	5.5	4.9	2.5	95.0		67
11	敲石	C2区	Ⅱ	砂岩	13.1	9.5	5.4	931.7		204
12	敲石	C2区	Ⅱ	砂岩	12.2	12.6	4.0	937.0		60

第Ⅴ章　古墳時代の調査

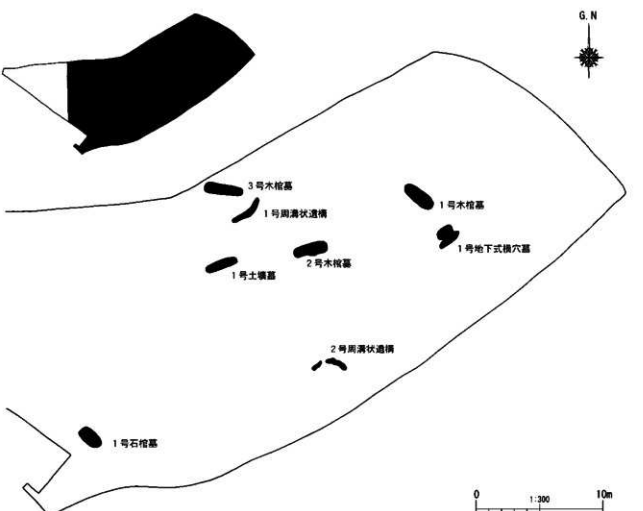
第１節　遺構

アカホヤ火山灰層上面において、調査区中央部から東側で古墳時代に該当する遺構が検出された。検出された遺構は、石棺墓１基、木棺墓３基、土壙墓１基、地下式横穴墓１基、周溝状遺構２条である。検出された遺構の位置関係は、第91図に示すとおりである。以下、各遺構について詳述する。

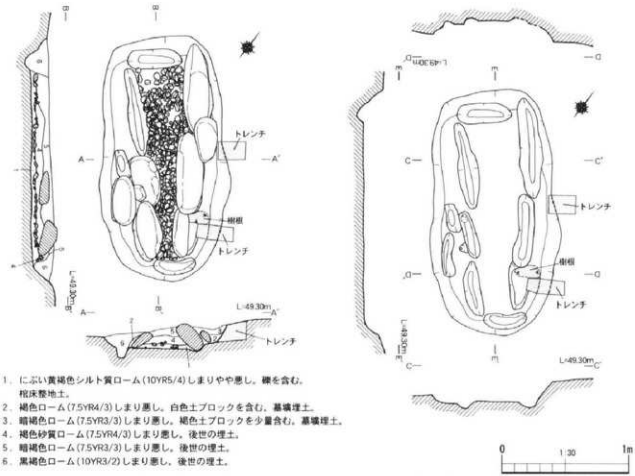
１．石棺墓

【１号石棺墓】　グリッドＡ１区に位置する。主軸方位はＮ－38°－Ｗである。墓壙の平面形態は隅丸長方形である。墓壙の規模は長軸1.94m、短軸1.04m、検出面から掘り込み面までの深さ0.18mである。床面はほぼ平坦で、壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。石棺外に白色土ブロックを含む褐色土（第94図、２層）と暗褐色土（３層）が確認できる。２層は棺おさえに用いた粘土と考えられる。石棺内部には整地土と考えられる黄褐色土（１層）と後世の埋土と考えられる褐色土、暗褐色土（４、５層）が確認できる。

石棺はほぼ中央に構築される。内法は長さ1.51m、北小口幅0.43m、南小口幅0.15mである。石材には長さ約15～70cmの砂岩の扁平な自然礫が用いられる。石材は土圧によるものか内側に傾いているが、本来は直立していたものと考えられる。石材の数は現状で東長側石が３枚、西長側石が２枚、長側石の外側に３枚の計８枚と、原位置を保っていない石３枚である。しかし、石材を配置するためと思われる掘り込みの痕跡から、本来は少なくても各小口石に１枚、各長側石に３枚、長側石の外側に４枚の計11枚以上は存在していたと考えられる。蓋石は確認されていない。長側石の継ぎ方は、東長側石では北側の石材が南側の石材の外側に重ね継ぎ

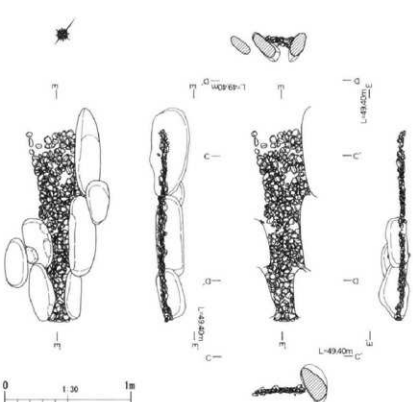


第91図　古墳時代遺構配置図（Ｓ＝1/300）

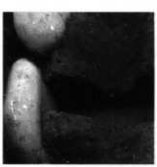


1．にぶい黄褐色シルト質ローム(10YR5/4)しまりやや悪し。礫を含む。
　棺床整地土。
2．褐色ローム(7.5YR4/3)しまり悪し。白色土ブロックを含む。墓壙埋土。
3．暗褐色ローム(7.5YR3/3)しまり悪し。褐色土ブロックを少量含む。墓壙埋土。
4．褐色砂質ローム(7.5YR4/3)しまり悪し。後世の埋土。
5．暗褐色ローム(7.5YR3/3)しまり悪し。後世の埋土。
6．黒褐色ローム(10YR3/2)しまり悪し。後世の埋土。

第92図　1号石棺墓平面図・土層断面図【左図】及び掘方平面図・断面図【右図】（S＝1/30）



第93図　1号石棺墓石棺実測図（S＝1/30）



第94図　1号石棺墓棺外立ち割り区土層断面

第95図　1号石棺墓内敷石

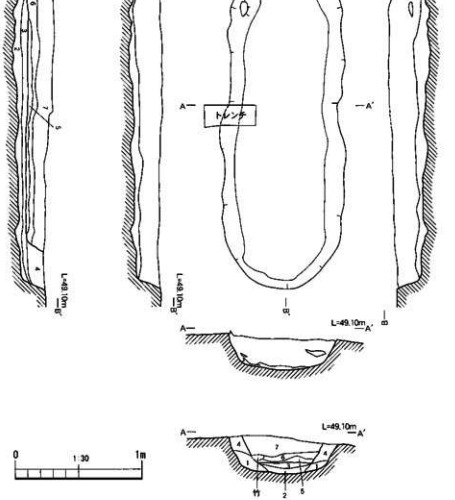
されているが、西長側石では北側の石材が南側の石材の内側に重ね継ぎされている。小口石と長側石の組み合わせ方は北側が井桁状、南側がコ字状である。棺床には5cm前後の川原石が敷き詰められている（第95図）。頭位方向は北小口幅が南小口幅より大きいことから北西と考えられる。

なお、周溝の有無を確認するために調査区の一部を拡張し、周囲の精査を行ったが、周溝は確認されなかった。また、埋土のふるい作業を行ったが、遺物・骨片等の出土はなかった。

2．木棺墓

【1号木棺墓】 グリッドC2区に位置する。主軸方位はN－45°－Wである。墓壙の平面形態は隅丸楕円形である。墓壙の規模は長軸2.70m、短軸1.01m、検出面から掘り込み面までの深さ0.34mである。掘方床面には凹凸がみられ、壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。

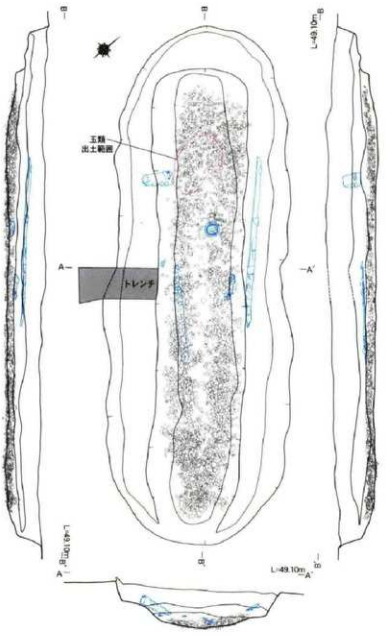
木棺の痕跡は確認できなかったが、土層の観察により棺台と思われる埋土を確認したことから木棺墓であると考えられる。棺台の構築方法は、まず地山ブロックを含む土（1層）で、南東側を残し馬蹄形に埋める。次に1層の内側に黒褐色土（2層）を充填し、床面の凹凸を無くす。最後に2層上に1cm前後の砂利（第98図、3層）を敷き詰めたと考えられる。木棺設置後は、アカホヤ火山灰層ブロックを含む黒色土（4層）で充填したと考えられる。木棺の種類は鉄釘が出土していないこと、棺台の一部として敷かれた砂利が緩やかなU字状のカーブを描くことから舟形木棺と考えられる。小口の形態は、棺外に充填された4層が木棺設置時の状況を保っているとはいい難く、木棺腐食に伴い棺内に流れ込んだ可能性が高いため不明である。木棺下端の規模を棺外に充填された土の位置を参考にもとめると、長軸2.06m、短軸0.44m程度と想定される。ただし、実際はこれより少し規模が大きいものと考えられる。

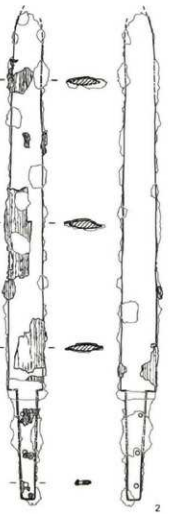


1．黒褐色ローム（10YR2/2）しまり良し。地山ブロック（Ⅳ～Ⅵ層）を含む。棺台。
2．黒褐色シルト質ローム（10YR2/3）しまりやや悪し。小礫を少量含む。棺台。
3．黒褐色シルト質ローム（10YR2/3）しまりやや悪し。小礫を多量含む。棺台。
4．黒色ローム（10YR2/1）しまり良し。Ahブロックを含む。墓壙埋土。
5．黒褐色ローム（7.5YR2/2）しまり良し。黄色粒、小礫を微量含む。後世の埋土。
6．黒色ローム（10YR2/1）しまり良し。黄色粒を少量含む。小礫を微量含む。後世の埋土。
7．黒色ローム（10YR2/1）しまり良し。黄色粒を含む。Ahブロックを微量含む。後世の埋土。

第96図　1号木棺墓掘方及び土層断面実測図（S＝1/30）

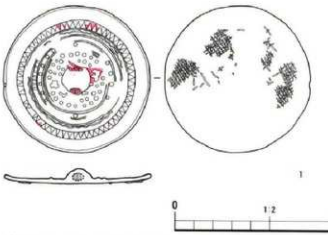
副葬品は棺内から珠文鏡1・鉄剣1・刀子2・ガラス製小玉625点≪内訳：完形品（略完形品も含む）511点、破片114点≫・滑石製臼玉668点≪内訳：完形品（略完形品も含む）464点、破片204点≫、棺外から鉄刀1、鉄斧1が出土した。鉄



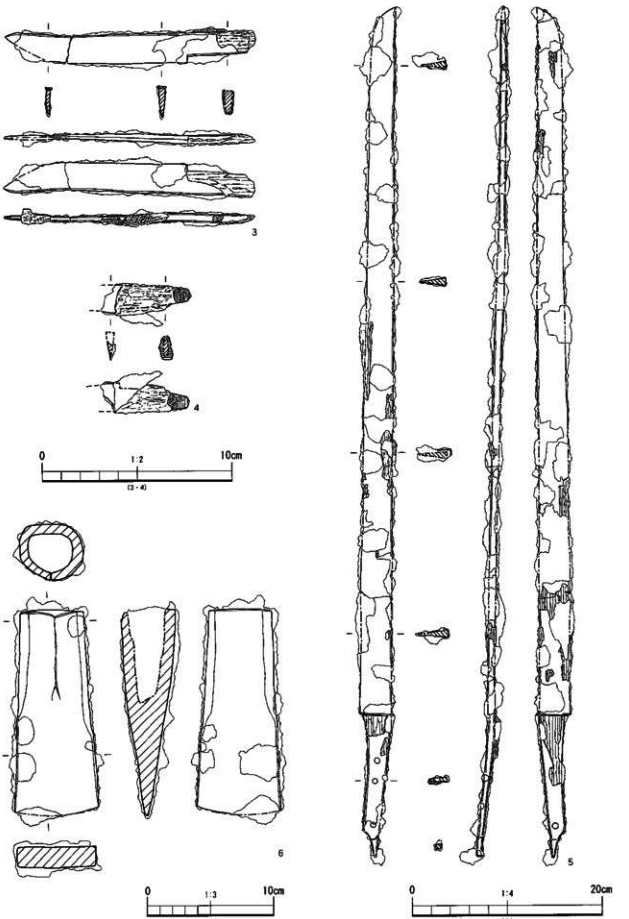


第97図　1号木棺墓棺台及び遺物出土状況実測図（S＝1/20）

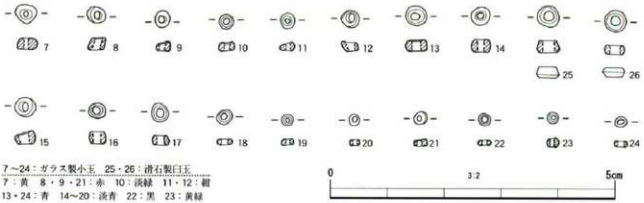
第98図　1号木棺墓内敷石（S＝1/3）



第99図　1号木棺墓出土遺物実測図①（S＝1/2、1/4）



第100図　1号木棺墓出土遺物実測図②（S＝1/2、1/3、1/4）

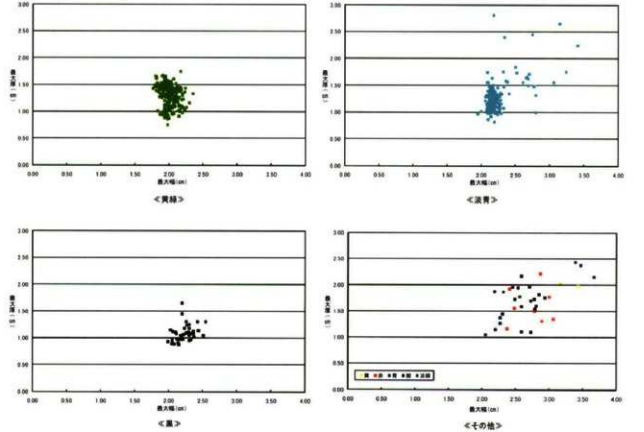


7～24：ガラス製小玉　25・26：滑石製臼玉
7：黄　8・9・21：赤　10：淡緑　11・12：紺
13・24：青　14～20：淡青　22：黒　23：黄緑

第101図　1号木棺墓出土遺物実測図③（S＝3/2）

第13表　1号木棺墓出土玉類の出土点数及び法量

	ガラス製小玉								滑石製臼玉
	黄	赤	黒	黄緑	淡緑	紺	青	淡青	
完形品	2点	7点	41点	229点	1点	20点	3点	189点	464点
略完形品	0点	1点	1点	7点	0点	0点	1点	9点	
計	2点	8点	42点	236点	1点	20点	4点	198点	
破片点数	0点	0点	0点	29点	81点	4点	0点	0点	204点
幅（最大値）	3.43cm	3.06cm	2.54cm	2.35cm	2.56cm	2.94cm	3.67cm	3.41cm	4.20cm
幅（最小値）	3.17cm	2.05cm	1.65cm	1.77cm	2.56cm	2.19cm	2.05cm	1.95cm	2.87cm
厚（最大値）	2.04cm	2.48cm	1.99cm	1.75cm	1.78cm	2.17cm	2.38cm	2.82cm	2.98cm
厚（最小値）	1.98cm	1.05cm	0.87cm	0.75cm	1.78cm	1.10cm	1.05cm	0.82cm	1.12cm



第102図　1号木棺墓出土ガラス製小玉法量分布図

斧の出土位置は棺内部であったが、出土状況から木棺腐食に伴い棺内に流れ込んだ可能性が高く、本来は棺外に置かれたものであったと判断した。また、玉類の多くがふるい作業により発見されたものである。玉類の出土位置から頭位方向は北西と考えられる。よって、棺内の副葬品は頸部付近に玉類、腹部付近に珠文鏡、右脚横に鉄剣・刀子、左脚横に刀子が配置されていたものと想定される。

1～4、7～24が棺内副葬品である。1は珠文鏡である。わずかに欠損があるもののほぼ完形である。直径は7.7cm、厚さは内区が0.3cm、外区が0.25cm、重量は現状で52.9gである。鈕は直径1.5cm、鏡面からの高さ0.8cmである。鈕孔は最大幅0.8cm、最大高0.4cmで半球状を呈する。内区主文部に2～3列の珠文を施し、その周囲に内側から1列の珠文・櫛歯文・複線波文・鋸歯文を配する。鈕内部には紐が残る。鏡面には布片が付着する。鏡面から剥落した布片の中には織耳部分を確認できるものもある。実体顕微鏡で観察すると鏡背においてもわずかながら繊維を確認することができる。また、鏡背では赤色顔料も確認できる。鏡面に付着した布は平織りで糸の太さ1mm程度である。織り密度は、経糸10本／cm、緯糸7本／cmである。

2は鉄剣である。切先部分は欠損している。錆化や剥離が進んでいる。現存長51.5cm、茎部長11.5cm、刃部最大幅3.6cm、茎部最大幅2.0cm、最大厚0.7cmである。重量は現状で490.0gである。刃部に鎬はみられず、両丸造りである。関の形状は直角関と思われる。茎部は茎尻に向かって徐々に幅を狭める。茎尻は一文字尻である。茎部には目釘孔が3つ穿たれているが、片側に偏っている。刃部に木質が付着していることから、木製の鞘に収められていたものと思われる。関付近には把縁装具の可能性がある物質が付着しているが、錆に覆われており形状・材質を判断することができなかった。把装具は茎部に木質が付着していることから、木製であったことが分かる。

3は刀子である。残存状況は比較的良好である。全長12.9cm、刃部長9.7cm、刃部最大幅1.5cm、茎部最大幅1.2cm、最大厚0.4cmである。重量は現状で18.3gである。刃側の外形線は切先部で緩やかに幅を広げ、その後は直線的に関に至る。関は直角関である。茎部には把の木質が残存しているため、茎尻の形態は不明である。また、背側には布が付着しているが、糸の太さ、織り密度などは不明である。

4は刀子である。刃部の大半を欠く。現存長4.7cmである。重量は現状で5.9gである。茎部には把の木質が残存しているため、関の形態は不明である。茎尻付近では下地巻きの痕跡が確認できる。茎尻の形態は一文字尻である。また、関付近には鉄製鎺の可能性がある鉄片が付着している。

7～24はガラス製小玉である。前述のとおり、1号木棺墓からは完形品（略完形品も含む）511点、細片化した破片114点が出土している。そのうち18点を図化した。色調は淡青色や黄緑色のものが主体で、その他黄色・赤色・黒色・淡緑色・紺色・青色のものがある。ここで淡青色としたものは明らかにバリエーションが存在するが、明確に区分できないため一括して報告することとした。色調別の出土点数は第13表に示している。大きさは大小2つのグループに分けることができそうである。また、大きさは色調と対応している可能性があり、黄緑色・黒色は小型の一群のみ、淡青色は大型と小型の一群両方で構成されている（第102図）。他の色調のものは個数が少ないため、大きさと対応するのか不明である。

25・26は滑石製臼玉である。前述のとおり、1号木棺墓からは完形品（略完形品も含む）464点、破片204点が出土している。そのうち2点を図化した。側面観は算盤球状を呈するものが多い。しかし、最大幅を形成する稜線の位置にバリエーションがあり、細分化できる可能性がある。

5・6が棺外副葬品である。5は鉄刀である。残存状況は比較的良好である。全長88.4cm、刃部長73.3cm、茎部長15.1cm、刃部最大幅3.3cm、茎部最大幅2.6cm、最大厚0.9cmである。重量は現状で776.8gである。刃部は平造りである。関の形状は直角関である。茎部は茎尻に向かって徐々に幅を狭める。茎尻は隅抉尻である。茎部には目釘孔が3つ穿たれている。刃部に木質が付着していることから、木製の鞘に収められていたと思われる。茎部には把の木質が残存している。

6は無房袋状鉄斧である。残存状況は比較的良好である。全長16.1cm、刃部長7.2cm、袋部長8.9cm、刃部最大幅6.6cm、袋部最大幅5.7cmである。厚みは肩部付近のもっとも厚いところで3.2cm、袋部合わせ目側が0.6cm、袋部背側が0.7cmである。重量は現状で944.0gである。刃部は方形を呈する。袋部の合わせ目は密着しており、わずかに隙間が確認できる程度である。袋部断面は不整楕円形を呈する。

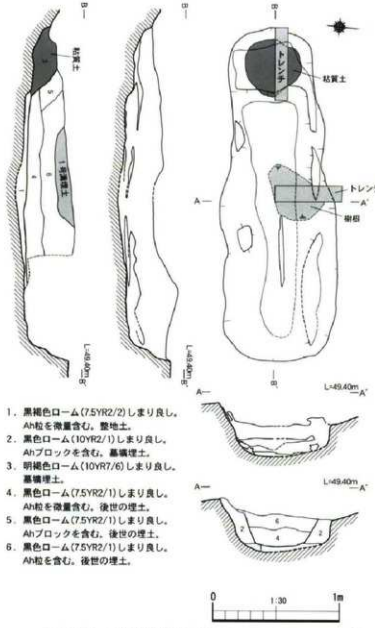
【2号木棺墓】　グリッドB2区に位置する。主軸方位はS－88°－Wである。墓壙の平面形態は隅丸長方形である。墓壙の規模は長軸2.65m、短軸0.94m、検出面から掘り込み面までの深さ0.44mである。掘方床面には凹凸がみられ、壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。

木棺の痕跡は確認できなかったが、長軸西側で棺おさえに用いた粘土を確認したことから木棺墓であると考えられる。長軸東側は調査時の不備により土層の観察が行えなかった。構築方法は、まず黒褐色土（1層）で整地し、床面の凹凸を無くしたのち木棺を設置、長軸側を棺おさえの粘土（3層）、短軸側を明褐色土（2層）

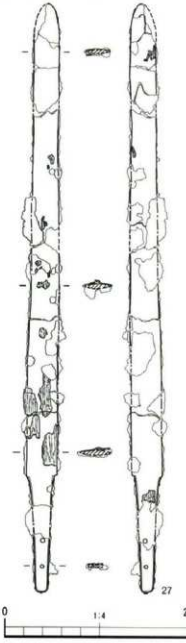
で充填したことが考えられる。木棺の種類は鉄釘が出土していないこと、1層上面が緩やかなU字状のカーブを描くことから舟形木棺と考えられる。棺おさえに用いた粘土はさほど粘質が高くないため、木棺設置時の状況を保っているとはいい難く、木棺腐食に伴い棺内に流れ込んだ可能性が高い。そのため、小口の形態は不明である。木棺の規模は長軸東側の土層観察が行えなかったため不明である。頭位方向は西側が東側より下端幅が大きいことから西と考えられる。

副葬品は棺内から鉄剣1が出土した。被葬者の左脚横に配置されたものと想定される。なお、埋土のふるい作業を行ったが、鉄剣以外の遺物・骨片等の出土はなかった。**27**は鉄剣である。切先の一部を欠損している。全長61.6cm、刃部長44.4cm、茎部長17.2cm、刃部最大幅3.2cm、茎部最大幅2.7cm、最大厚0.6cmである。重量は現状で310.4gである。刃部に鎬はみられず、両丸造りである。関の形状は直角関である。茎部は茎尻に向かってやや内湾しながら徐々に幅を狭める。茎尻は栗尻である。茎部には目釘孔が2つ穿たれている。刃部に木質が付着していることから、木製の鞘に収められていたと思われる。把装具は茎部に木質が付着していることから、木製であったことが分かる。

【3号木棺墓】 グリッドB2区に位置する。主軸方位はN－40°－Wである。墓壙の平面形態は隅丸楕円形である。墓壙の規模は長軸3.09m、短軸0.95m、検出面から掘り込み面までの深さ0.40mである。掘方床面には凹凸がみられ、壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。木棺の痕跡は確認できなかった。



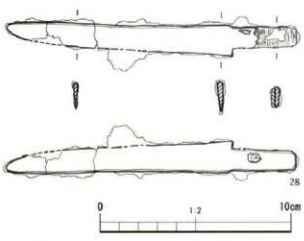
第103図　2号木棺墓実測図（S＝1/30）



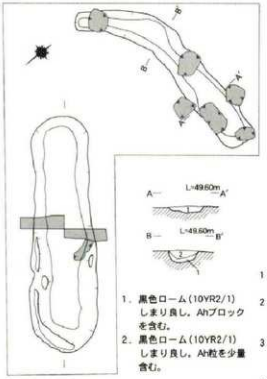
第104図　2号木棺墓出土遺物実測図（S＝1/4）

また、棺台や棺おさえに用いた粘土も確認できなかった。しかし、1号木棺墓の棺外を充填したと考えられるアカホヤ火山灰層ブロックを含む土と同様の埋土（3層）を確認したため、木棺墓であった可能性が高いと判断した。構築方法は、まず暗褐色土（1層）で整地し、床面の凹凸を無くしたのち木棺を設置、その後棺外に・層ブロックを含む黒褐色土（2層）やアカホヤ火山灰層ブロックを含む黒褐色土（3層）で充填したことが考えられる。木棺の種類は鉄釘が出土していないこと、1層上面が緩やかなU字状のカーブを描くことから舟形木棺と考えられる。小口の形態は、棺外に充填された2・3層が木棺設置時の状況を保っているとはいい難く、木棺腐食に伴い棺内に流れ込んだ可能性が高いため不明である。木棺下端の規模を棺外に充填された土の位置を参考にもとめると、長軸2.30m、短軸0.35m程度と想定される。ただし、実際はこれより少し規模が大きいものと考えられる。頭位方向は北西側が南東側より想定される木棺下端幅が大きいことから北西と考えられる。

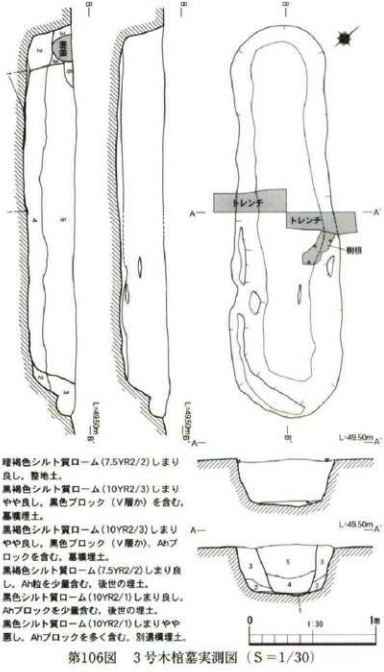
副葬品は棺内から刀子1が出土した。被葬者の右肩付近に配置されたものと想定される。なお、埋土のふるい作業を行っ



第105図　3号木棺墓出土遺物実測図（S＝1/2）



第107図　3号木棺墓と1号周溝状遺構の位置図（S＝1/50）



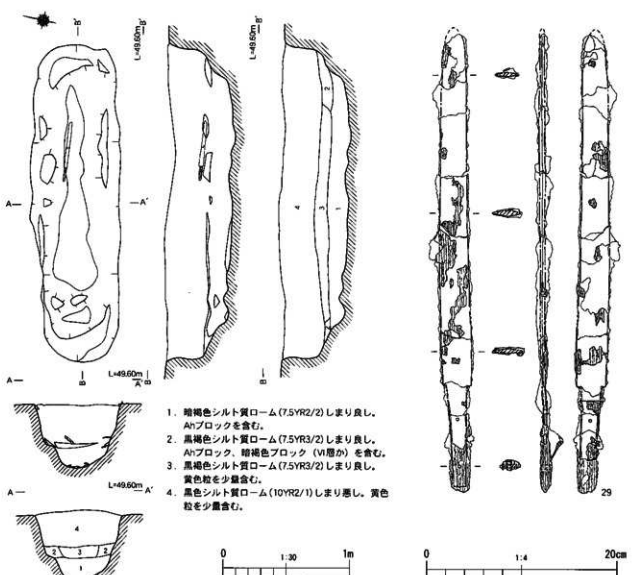
第106図　3号木棺墓実測図（S＝1/30）

たが、刀子以外の遺物・骨片等の出土はなかった。28は刀子である。刃部の一部を欠損している。全長15.2cm、刃部長11.9cm、刃部最大幅1.6cm、茎部最大幅1.1cm、最大厚0.3cmである。重量は現状で21.7ｇである。刃側の外形線は切先から緩やかに幅を広げながら関に至る。関は両関で、刃側が直角関、背側がナデ関である。茎尻は一文字尻である。茎部に木質が付着している。また、茎部では下地巻きの痕跡も確認できる。

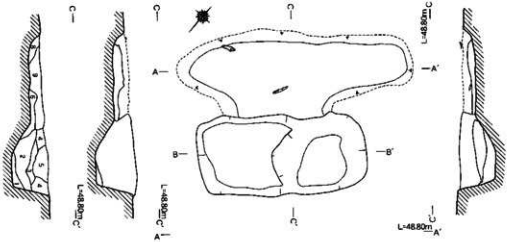
3．土壙墓

【1号土壙墓】　グリッドＢ２区に位置する。主軸方位はＳ－80°－Ｗである。墓壙の平面形態は隅丸楕円形である。墓壙の規模は長軸2.53m、短軸0.74m、検出面から掘り込み面までの深さ0.55mである。掘方は２段掘り状を呈する。掘方床面には凹凸がみられ、壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。木棺の痕跡及び棺台や棺おさえに用いた粘土は確認できなかった。また、３号木棺墓のように棺外を充填したと考えられる土も確認できず、木棺墓と認定するには根拠に乏しいと判断した。頭位方向は西側が東側より下端幅が大きいことから西と考えられる。

副葬品は掘方床面より約20cm上で鉄剣１が出土した。被葬者の左脚付近に配置されたものと想定される。なお、埋土のふるい作業を行ったが、鉄剣以外の遺物・骨片等の出土はなかった。29は鉄剣である。切先部分は欠損している。現存長48.2cm、茎部長10.6cm、刃部最大幅3.2cm、茎部最大幅2.2cm、最大厚0.6cmである。重量は現状で252.8ｇである。刃部に鎬はみられず、両丸造りである。関は直角関である。茎部は茎尻に向かって徐々に幅を狭める。茎尻は一文字尻である。茎部には目釘孔が２つ穿たれている。



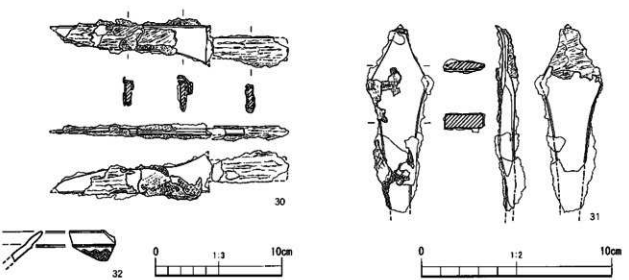
第108図　１号土壙墓実測図（Ｓ＝1/30）　　第109図　１号土壙墓出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



1. 褐色シルト質ローム(7.5YR4/4)しまりやや良し。にぶい黄橙色ブロック(IX層か)を少量含む。竪坑埋土。
2. 暗褐色シルト質ローム(10YR3/4)しまり良し。にぶい黄橙色ブロック(IX層か)、暗褐色ブロック(VI層)を少量含む。竪坑埋土。
3. 暗褐色ローム(10YR3/4)しまりやや良し。にぶい黄橙色ブロック(IX層か)、暗褐色ブロック(VI層)を少量含む。竪坑埋土。
4. 黒色ローム(10YR2/1)しまりやや良し。褐色ブロック(VIII層か)を含む。竪坑埋土。
5. 黒色ローム(10YR7/1)しまりやや良し。褐色ブロック(VIII層か)を少量含む。竪坑埋土。
6. 褐色シルト質ローム(7.5YR4/3)しまりやや良し。褐色ブロック(VIII層か)を少量含む。羨道埋土。
7. にぶい黄褐色シルト質ローム(10YR4/3)しまりやや良し。暗褐色ブロック(VI層か)を少量含む。玄室埋土。
8. 黒褐色シルト質ローム(10YR3/2)しまりやや悪し。褐色ブロック(VIII層か)を含む。玄室埋土。
9. 黒褐色シルト質ローム(7.5YR3/2)しまりやや悪し。褐色ブロック(VIII層か)、Ah粒を微量含む。玄室埋土。

0 1:30 1m

第110図　1号地下式横穴墓実測図（S＝1/30）



第111図　1号地下式横穴墓出土遺物実測図（S＝1/2、1/3）

刃部に木質が付着していることから、木製の鞘に収められていたものと思われる。茎部には把の木質が残存している。

4．地下式横穴墓

【1号地下式横穴墓】 グリッドC1区に位置する。本遺構は表土除去後約20cm程度下げた面で検出したため、遺構の性格を認定する材料にやや欠ける部分があった。しかし、遺構の平面形態、埋土堆積状況、副葬品と思われる鉄器の出土から地下式横穴墓と判断した。検出時、玄室と羨道はすでに崩落した状態であったと考えられる。

竪坑の平面形態は隅丸長方形である。竪坑西側床面が東側床面に比べ、約15cm程度下がる。竪坑の規模は長軸1.35m、短軸0.65m、検出面から掘り込み面までの深さは東側で0.17m、西側で0.32mである。埋土の観察から、褐色系の土（1～3層）を充填したのち、黒色系の土（4・5層）で埋め戻したと考えられる。羨門は竪坑北西壁のほぼ中央、竪坑床面よりも8cm程度高い位置に構築される。閉塞方法は遺構の残存状況が悪いため不明である。羨道は羨門付近で最小幅（0.63cm）を測り、その幅を広げつつ玄室に至る。玄室の平面形態は平入り両袖隅丸長方形である。玄室の規模は長軸1.74m、短軸0.35m、検出面から掘り込み面の深さ0.11cmである。床面はほぼ平坦である。

副葬品は玄室東側に鉄鏃1、北西側に刀子1が出土した。なお、埋土のふるい作業を行ったが、これら以外の遺物・骨片等の出土はなかった。30は刀子である。切先と関付近、茎尻の一部を欠損する。現存長12.3cm、茎部長4.1cm、刃部最大幅2.0cm、最大厚0.3cmである。重量は現状で11.1gである。刃側の外形線は内湾して幅を広げながら関に至る。関は両関で、両傭とも直角関と考えられる。茎尻の形態は欠損のため不明である。刃部に木質が付着していることから、木製の鞘に収められていたものと思われる。この木質の上には布が付着している。布は平織りで糸の太さ0.5mm程度である。茎部には把の木質が残存している。31は圭頭鏃である。切先の一部と茎を欠損している。また、銹化や剥離が進んでおり、厚みや形態が変化しているものと考えられる。現存長は9.7cm、鏃身部最大幅3.1cmである。重量は現状で27.6gである。鏃身部には布と木質が確認できる。布は平織りで糸の太さ0.5mm程度である。なお、竪坑埋土中から須恵器が1点出土している。32は甕であろうか。口縁部外面に櫛描波状文を施している。

5．周溝状遺構

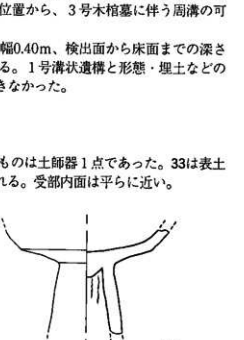
【1号周溝状遺構】 グリッドB2区に位置する。長さ約2m、最大幅0.46m、検出面から床面までの深さ0.17cmである。平面形態は弧状をなす。床面は凹凸がある。検出された位置から、3号木棺墓に伴う周溝の可能性がある。

【2号周溝状遺構】 グリッドB1区に位置する。長さ約3mで、最大幅0.40m、検出面から床面までの深さ0.13mである。平面形態は途切れながらも弧状をなす。床面は凹凸がある。1号溝状遺構と形態・埋土などの点で類似する。なお、周囲を丁寧に精査したが埋葬施設の痕跡は確認できなかった。

第2節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物のうち古墳時代に該当する遺物と判断できたものは土師器1点であった。33は表土中から出土した高杯である。口縁部は直線的に外傾しているものと思われる。受部内面は平らに近い。

第112図　2号周溝状遺構実測図（S＝1/50）



第113図　包含層出土遺物実測図（S＝1/3）

第14表　珠文鏡計測表

報告書No.	出土地点	面径(cm)	重量(g)	最大厚(cm)		鈕(cm)		鈕孔(cm)		文様構成	備考	実測No.
				内区	外区	直径	鈕座からの高さ	最大幅	最大高			
1	1号木棺	7.7	52.9	0.3	0.25	1.5	0.8	0.8	0.4	内側から2～3列の珠文帯、1列の珠文帯、櫛歯文帯、複線波文帯、鋸歯文帯	鏡面に布付着、鈕背に赤色顔料	458

第15表　鉄剣・鉄刀計測表

報告書No.	器種	出土地点	残存長(cm)	全長(cm)	重量(g)	刃部(cm)				鞘	関	茎部(cm)						備考	実測No.
						刃部長	最大幅	最大厚	造り			茎部長	茎元幅	茎尻幅	断面	茎尻	目釘孔		
2	鉄剣	1号木棺	61.5	-	490.0	-	3.6	0.7	両丸	○	直	11.5	2.0	1.4	長方形	隅丸・一文字	3		465
5	鉄刀	1号木棺	89.3	88.4	776.8	73.3	3.3	0.9	平	○	片・直	15.1	2.6	0.3	長方形	隅抉	3		466
27	鉄剣	2号木棺	61.8	61.6	310.4	44.4	3.2	0.6	両丸	○	両直	17.2	2.7	1.4	長方形	栗	2		467
29	鉄剣	1号土壙	48.2	-	252.8	-	3.2	0.6	両丸	○	両直	10.6	2.2	1.3	長方形	一文字	2		468

第16表　鉄斧計測表

報告書No.	出土地点	残存長(cm)	全長(cm)	重量(g)	刃部(cm)				袋部(cm)					備考	実測No.
					刃部長	最大幅	最大厚	断面	袋部長	最大厚(合わせ目側)	最大厚(背側)	断面			
6	1号木棺	18.0	16.1	944.0	7.2	6.6	3.2	方形	8.9	0.6	0.7	不整楕円形			459

第17表　刀子計測表

報告書No.	出土地点	残存長(cm)	全長(cm)	重量(g)	刃部(cm)				関	鞘	茎部(cm)				柄	備考	実測No.
					刃部長	最大幅	最大厚	有機質			茎部長	茎元幅	茎尻幅	茎尻			
3	1号木棺	13.3	12.9	18.3	9.7	1.5	0.4	布	片・直	×	3.2	1.2	1.1	隅丸・一文字？	木		461
4	1号木棺	4.7	-	5.9	-	-	-	-	片・直？	○	3.6	1.2	0.7	隅丸・一文字	木	下地巻きが確認できる	462
28	3号木棺	15.5	15.2	21.7	11.9	1.6	0.3	-	両・ナデ・直	×	3.3	1.1	0.9	隅丸・一文字	木	下地巻きが確認できる	463
30	1号地下式	12.3	-	11.1	-	2.0	0.3	木・布	両・不明	×	4.1	-	-	-	木		464

第18表　鉄鏃計測表

報告書No.	出土地点	残存長(cm)	全長(cm)	重量(g)	刃部(cm)				頸部(cm)			茎部(cm)			備考	実測No.
					刃部長	最大幅	最大厚	断面	最大長	最大厚	断面	最大長	最大厚	断面		
31	1号地下式	9.7	-	27.6	-	3.1	0.4	両丸	-	0.7	長方形	-	-	-		460

第19表　玉類計測表

報告書No.	出土地点	残存状況	器種	材質	色調	透明度	径(mm)	孔径(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	実測No.
7	1号木棺	完形	小玉	ガラス	黄	不透明	3.38	0.99	2.02	<0.1		413
8	1号木棺	完形	小玉	ガラス	赤	不透明	2.83	1.21	2.24	<0.1		408
9	1号木棺	完形	小玉	ガラス	赤	不透明	2.81	1.11	1.45	<0.1		409
10	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡緑	半透明	2.43	0.98	1.74	<0.1		417
11	1号木棺	完形	小玉	ガラス	紺	透明	2.76	0.90	1.69	<0.1		423
12	1号木棺	完形	小玉	ガラス	紺	透明	2.69	1.31	1.72	<0.1		422
13	1号木棺	完形	小玉	ガラス	青	透明	3.67	1.46	2.17	<0.1		412
14	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	半透明	3.35	1.43	2.65	<0.1		421
15	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	半透明	3.41	1.61	1.94	<0.1		414
16	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	不透明	2.82	1.49	2.43	<0.1		419
17	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	透明	3.16	1.56	1.58	<0.1		420
18	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	透明	2.89	1.08	1.30	<0.1		424
19	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	半透明	2.10	0.72	1.09	<0.1		427
20	1号木棺	完形	小玉	ガラス	淡青	半透明	2.17	0.80	1.21	<0.1		425
21	1号木棺	完形	小玉	ガラス	赤	不透明	2.38	0.75	1.39	<0.1		410
22	1号木棺	完形	小玉	ガラス	緑	透明	2.10	0.92	0.96	<0.1		411
23	1号木棺	完形	小玉	ガラス	黄緑	半透明	2.07	0.92	1.37	<0.1		426
24	1号木棺	完形	小玉	ガラス	青	透明	2.21	0.98	1.11	<0.1		418
25	1号木棺	完形	臼玉	滑石	-	-	3.73	1.93	1.94	<0.1		416
26	1号木棺	完形	臼玉	滑石	-	-	3.62	1.72	1.45	<0.1		415

第20表　古墳時代の土器観察表

報告書No.	種類	器種	残存部位	出土地点	層位	法量(cm)			色調		調整		備考	実測No.
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
32	須恵器	甕	口縁部	1号地下式					黄灰 (2.5Y5/1)	灰黄褐 (10YR5/2)	回転ナデ、櫛描波状文	回転ナデ		104
33	土師器	高杯	杯部～脚柱部	A1区					にぶい褐 (7.5YR5/4)	赤黒 (2.5YR2/1)	ナデ	杯:ナデ、脚:シボリ	円盤充填	97

第Ⅵ章　古代以降の調査

第１節　遺構

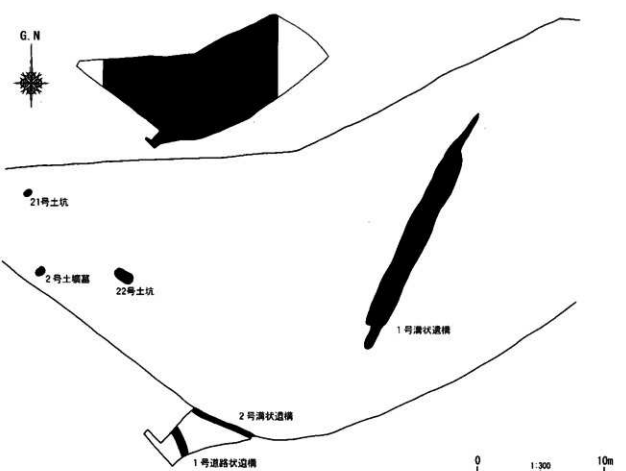
１．土壙墓

【２号土壙墓】　グリッドＡ３区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸0.74m、短軸0.55m、検出面から床面の深さ0.07mである。床面から洪武通寶（１～７）が出土した。７は「洪」の字の一部と考えられる銭貨片である。唯一、接合する可能性のある６と接合しないことから別個体と判断した。よって、２号土壙墓の副葬品は洪武通寶７枚と考えられる。時期は安藤正純氏の研究（安藤2008）を参考にすると、洪武通寶のみの組み合わせであり、枚数が一桁枚数であることから16世紀後半～近世初頭と思われる。

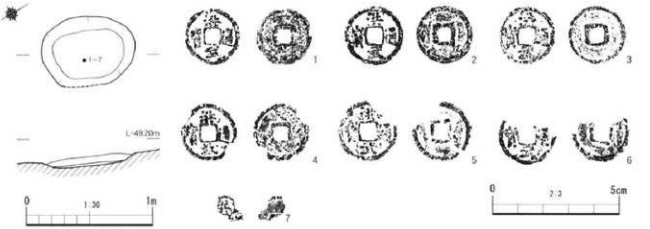
２．土坑

【21号土坑】　グリッドＡ３区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸0.62m、短軸0.50m、検出面から床面の深さ0.10mである。時期は、形態・規模・埋土の状況が２号土壙墓と類似することから２号土壙墓と近い時期に位置付けられると思われる。また、用途についても２号土壙墓と同じ墓である可能性があるが、銭貨等の出土がなかったため根拠に乏しく土坑として報告することとした。

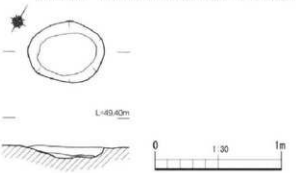
【22号土坑】　グリッドＡ２区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は箱状を呈する。規模は長軸1.60m、短軸0.90m、検出面から床面の深さ0.58mである。土坑内部には約20～50㎝の扁平な礫が充填されていた。礫の充填方法に規則性がない点、床面が不整形である点、埋土の状況などから22号土坑は礫を用いた構築物ではなく、礫を一括廃棄した土坑ではないかと考えた。時期については不明である。



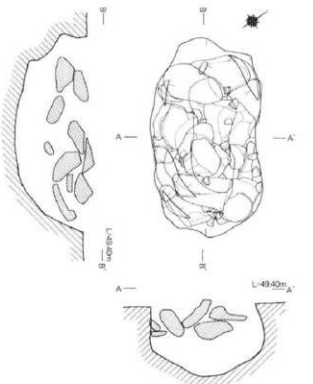
第114図　古代以降の遺構配置図（S＝1/300）



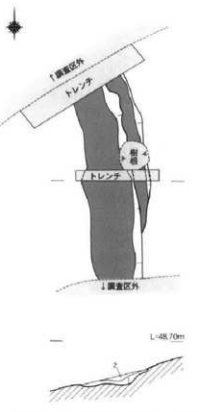
第115図　2号土壙墓実測図及び2号土壙墓出土遺物実測図（S＝1/30、2/3）



第116図　21号土坑実測図（S＝1/30）



第117図　22号土坑実測図（S＝1/30）



1．明褐色ローム(7.5YR5/6)しまり良し。IX層の硬化面。
2．黒褐色ローム(7.5YR3/2)しまり良し。Ø1cm以下のIX層ブロックを少量含む。

▦…硬化面

第118図　1号道路状遺構実測図（S＝1/40）

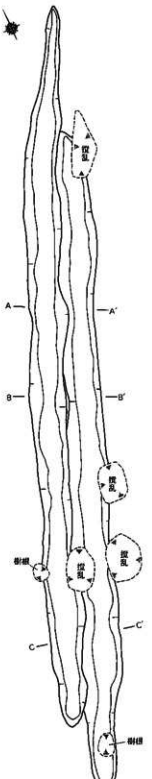
3．道路状遺構

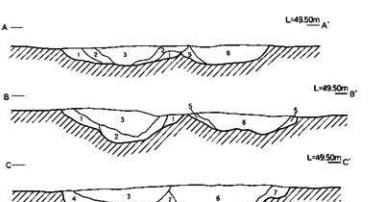
【1号道路状遺構】　1号石棺墓周溝確認のための拡張区より検出された。北ー南方向を走行する。断面形態は皿状を呈する。規模は最大幅0.67m、検出面から床面の最大の深さ0.11mである。硬化面が確認されたことから道路状遺構と判断した。時期については遺物が出土していないため不明である。

4．溝状遺構

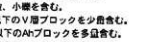
【1号溝状遺構】　グリッドA1・2区、B2、C2区に位置する。北ー南方向を走行する。埋土の状況から2条の溝が切り合った状態であり、西側溝より東側溝の構築時期が古いと考えられる。断面形態は皿状もしくは逆台形状を呈する。西側溝の規模は最大幅1.00m、検出面から床面の最大の深さ0.26mである。東側溝の規模は残存最大幅0.98m、検出面から床面の最大の深さ0.21mである。埋土中から陶磁器片（8）が出土している。

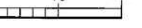
【2号溝状遺構】　グリッドA1区に位置する。北西ー南東方向を走行する。断面形態は逆台形状を呈する。規模は最大幅0.45m、検出面から床面の深さ0.06mである。近接する調査区外の地点で、走行方向が一致する埋没途中の溝（図版11－2）を確認したことから、2号溝状遺構は埋没してあまり時期が経っていないものと考えられる。





1．褐色砂質ローム（10YR4/4）しまりやや良し。Ø3cm以下のAhブロックを多量含む。
2．黒褐色ローム（10YR2/3）しまりやや良し。Ø1cm以下のAhブロックを含む。
3．黒色シルト質ローム（10YR2/1）しまり良し。Ah粒、小礫を含む。
4．黒褐色ローム（10YR3/1）しまりやや良し。Ø2cm以下のV層ブロックを少量含む。
5．黒褐色ローム（7.5YR2/2）しまりやや良し。Ø1cm以下のAhブロックを多量含む。
6．黒褐色ローム（7.5YR2/2）しまり良し。小礫を多量含む。Ah粒を微量含む。
7．黒褐色ローム（10YR3/2）しまり良し。Ø2cm以下のV・VI層ブロックを含む。
1～4：西側溝埋土　5～7：東側溝埋土





第119図　1号溝状遺構実測図及び1号溝状遺構出土遺物実測図（S＝1/100、1/30、1/3）

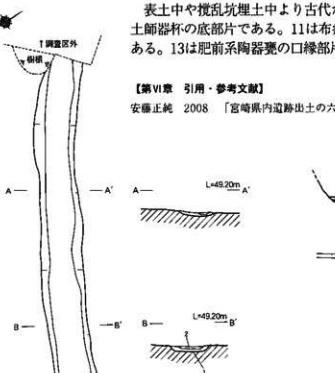
5．柱穴群

アカホヤ火山灰層が残存している地点で多数の柱穴を検出した。しかし、建物跡等と抽出できる規則的な配置は確認できなかった。時期については遺物が出土していないため不明である。

第２節　遺構外出土遺物

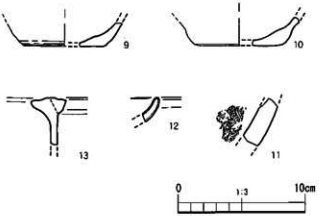
表土中や撹乱坑埋土中より古代から近世の遺物が数点出土した。９・10は古代の土師器杯の底部片である。11は布痕土器の胴部片である。12は青磁碗の口縁部片である。13は肥前系陶器甕の口縁部片と考えられる。

【第Ⅵ章　引用・参考文献】
安藤正純　2008　「宮崎県内辺跡出土の六道銭」『宮崎考古』第21号　宮崎考古学会



1．暗褐色シルト質ローム（10YR3/3）しまり良し。Ø1cm以下のIX層ブロックを少量含む。
2．暗褐色シルト質ローム（10YR3/3）しまり良し。Ø3cm以下のIX層ブロックを多量含む。

第120図　２号溝状遺構実測図（S＝1/40）



第121図　古代以降の遺物実測図（S＝1/3）

第21表　銭貨計測表

報告書No.	銭名	出土地点	残存状況	材質	法量(cm) 銭径	孔径	厚さ	重量(g)	図版No.
1	承武通宝	2号土壙墓	完形	銅	2.2	0.6	0.17	2.6	290
2	承武通宝	2号土壙墓	完形	銅	2.3	0.6	0.18	2.9	291
3	承武通宝	2号土壙墓	完形	銅	2.2	0.6	0.17	2.2	292
4	承武通宝	2号土壙墓	ほぼ完形	銅	2.3	0.6	0.15	1.8	295
5	承武通宝	2号土壙墓	一部欠損	銅	(2.4)	0.7	0.19	2.0	297
6	承武通宝	2号土壙墓	一部欠損	銅	(2.3)	0.6	0.17	1.7	429
7	承武通宝？	2号土壙墓	破片	銅	2.3	0.6	0.1	2.6	430

第22表　古代以降の土器観察表

報告書No.	種類	器種	残存部位	出土地点	層位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	調整 外面	内面	備考	図版No.
8	磁器	碗	口縁部～胴小部	I号壙		(7.8)	(3.2)	1.9	青灰 (5PB5/1)	青灰 (5PB5/1)	施釉	施釉	底部に配入である数釘は焼成後に穿孔である 反転復元	105
9	土師器	杯	体部～底部	表試掘		(6.5)			にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	回転ナデ	回転ナデ	反転復元	99
10	土師器	杯	体部～底部	A3区		(7.0)			にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (5YR5/4)	回転ナデ	回転ナデ	反転復元	98
11	土師器	布痕土器	胴部	A区					にぶい橙 (5YR6/3)	にぶい橙 (5YR6/4)	ナデ	ナデ	布目痕痕	96
12	青磁	碗	口縁部						オリーブ灰 (5GY5/1)	オリーブ灰 (5GY5/1)	施釉	施釉		100
13	陶器	壺	口縁部	B2区					褐灰 (2.5YR4/1)	褐灰 (5YR4/1)	回転ナデ	ナデ		95

第Ⅶ章　まとめ

五反畑遺跡Ｂ地区では、旧石器時代から近代に至る幅広い時期の遺構・遺物が確認された。特に旧石器時代・縄文時代・古墳時代の遺構・遺物は注目される資料であると考えている。そこで旧石器時代・縄文時代・古墳時代の遺構・遺物の分析をとおして本調査区における各時代の位置付けについて考察していきたい。

第１節　旧石器時代における五反畑遺跡Ｂ地区の位置付け

本調査区における旧石器時代の調査では、ナイフ形石器文化期と細石器文化期の遺構・遺物が検出された。特に多数確認された接合資料は、当時の人々の行動を復元するうえで有効な一指標となりうるものである。そこで本節では、接合資料をはじめ出土した旧石器時代の遺物の分析をとおして、本調査区が当概期にどのように利用されていたのか考察していきたい。

１．出土した石器の検討

本調査区ではナイフ形石器文化期に該当する接合資料が13点、細石器文化期に該当する接合資料が18点出土している。出土した接合資料の中には背面に自然面を残す資料を多数確認できることから、石器製作工程の中でも礫面を除去するための初期段階の剥片工程が多く行われたという仮説を提示することができる。また初期段階の剥片工程に適した比較的大きめの敲石のみ出土していることは、この仮説を補強する材料となりうるだろう。さらに剥片剥離作業の最終的な廃棄物である残核を含む接合資料が14点も出土した点から、本調査区に残されなかった製品の素材となりうる良好な剥片は本調査区外へ搬出された可能性が高いことが予想される。接合資料⑫（第23図）の出土は、良好な剥片が本調査区外へ搬出された可能性を示す好例といえよう。

一方で、旧石器時代の石器310点中１cm以下の砕片が１点のみである点、製品・未製品が少ない点から石器を整形する最終調整はほとんど行われなかったことが考えられる。ただし、全く行われなかったということではない。ナイフ形石器が接合した接合資料①の出土、細石刃製作に関わる遺物（打面再生剥片・作業面再生剥片）の出土から小規模ではあるものの石器を整形する最終調整も行われたことが窺える。

２．本調査区の立地と環境

次に石材採取に関わる本調査区の立地と環境について考えていきたい。本調査区で使用された石材は、ナイフ形石器文化期が砂岩・流紋岩・頁岩・ホルンフェルス、細石器文化期になるとこれに桑ノ木津留産及び船引ＯＸ群黒曜石が加わる。

旧石器時代に使用された石材のうち砂岩は、本調査区に近い清武川でその存在を確認できるため本調査区を利用した旧石器時代の人々が容易に採取できた石材であったと考えられる。また、本調査区周辺の路頭において砂岩で構成される礫層の存在を確認したことから、わざわざ清武川まで行かなくてもさらに近辺で砂岩を採取できた可能性が高いと思われる。

３．結論

以上から本調査区は砂岩の採取地に近く、初期段階の剥片工程が主に行われた原産地遺跡に近い様相を示していることが窺える。ただし、小規模ながら石器を整形する最終調整も行われていたようである。なお今回は検討が行えなかったが、これまで実施されてきた船引台地の調査成果と比較することで、旧石器時代における船引台地を利用した人々の行動をより理解できるようになるのではないかと考えている。

第２節　縄文時代における五反畑遺跡Ｂ地区の位置付け

本調査区ではアカホヤ火山灰層下位小林軽石層上位の包含層中から縄文時代草創期～早期に該当すると考えられる遺構・遺物が多数検出された。そこで、まず年代的指標になる土器の検討を行った後、その時間軸を指標とし縄文時代における本調査区の様相を明らかにしていきたい。

１．縄文時代における本調査区が利用された時期について

本調査区において最も出土量の多い土器は無文土器であった。しかし、宮崎県における無文土器の研究はあまり活発ではない。そこで本項では、まず東九州の無文土器について検討した綿貫俊一氏の研究（綿貫1999・

2008）及び船引台地で出土した無文土器との比較から本調査区で出土した無文土器の時間的位置付けについて検討したい。

【無文土器における先行研究との比較】　第Ⅲ章中において、本調査区から出土した土器を3タイプに分類した。まず、この分類を軸に綿貫編年との比較を行いたい。Ⅰ類は器壁が薄く、器面の最終調整がナデであることを特徴とする。口縁部形態は大きく外反するものと直口するものがある。特に外反する特徴は高並垣式土器にみられる特徴であることが注目される。Ⅱ類は器壁が厚く、調整はナデであることを特徴とする。口縁部は直口する。直口する口縁部は幅広い時期にみられる特徴のため時期決定の指標にはならないが、調整がナデのみである点から条痕調整の土器よりナデ調整の土器の比率が増加する二日市Ⅱb式土器以降と推測される。Ⅲ類は調整がミガキであることを特徴とする。口縁部形態は内湾ぎみである。調整がミガキであることから、別府原式土器及び政所式土器・中原式土器との近縁性が指摘できる。さらに口縁部形態が内湾ぎみである特徴から特に中原式土器後半期の土器群（Ⅲ～Ⅴ期）に類似する土器群と予想される。以上から本調査区で出土した土器は、綿貫編年の第2～6段階に位置付けられる。

【船引台地で出土した無文土器との比較】　清武上猪ノ原遺跡第5地区SC-313（秋成・今村2010）では4～5個体の無文土器がまとまって出土しており、一括性の高い土器群として捉えられる。「柏原Kタイプ」（上杉2003）と呼称される土器や山田第1遺跡（井田・秋成・今村2006）出土の爪形文土器と器形が類似する無文土器の出土から縄文時代草創期末、綿貫編年の第1段階に位置付けられる土器群と考えられる。また、この土器群の年代的位置付けについては土器付着炭化物の放射性炭素年代測定の結果（10900±40BP）からも裏付けられる。

清武上猪ノ原遺跡第3地区（井田・秋成・今村2008）では無文土器が一定量出土している。尖底の底部片の出土から陽弓式土器、綿貫編年の第6段階と定点があることが推測される。また、清武上猪ノ原遺跡第3地区で出土した無文土器は胎土に繊維痕を含む土器片が多いことが特徴である。これは高鍋町野首第2遺跡（尾園・重留・松本2007）や新富町音明寺第1遺跡（渡部・谷口・永田・金丸2005）出土の陽弓式土器においても確認されている特徴として注目される。

上記で説明した無文土器と本調査区出土の無文土器は、器形・胎土の点で異なっている。この差異は、おおむね時期差によるものと予想される。先行研究との比較により得られた結果と併せて考えると、本調査区で出土した土器は、綿貫編年の第2～5段階（縄文時代早期前葉）に限定できるだろう。なお、本報告書中で分類した土器群が全て同時期ではなく、第2～5段階の中のそれぞれ異なる時期の土器群である可能性も十分考えられる。

【小結】　縄文時代における本調査区が利用された時期は上記の考察結果及び先行研究の成果から、縄文時代早期前葉（無文土器）、早期中葉（下剥峯式土器・辻タイプ・押型文土器・縄文施文の土器）、早期後葉（塞ノ神式土器）、後期後半（納屋向式土器）と考えられる。また、石鏃の形態から縄文時代草創期においても利用された可能性を指摘できる。

2．縄文時代における本調査区の利用形態について

縄文時代において本調査区が利用されたのは縄文時代草創期～早期及び縄文時代後期と考えられる。なお、アカホヤ火山灰層下位小林軽石層上位で検出された遺構は縄文草創期～早期に属するが遺構内出土遺物が乏しく、放射性炭素年代測定も行っていないため詳細な時期は不明である。

縄文時代草創期に該当すると時期認定できた遺物は石鏃のみであった。検出された遺構の時期が明確でないため想像の域をでないが、縄文時代草創期に該当する土器の出土がないことから、台地の縁辺部に位置し、集落跡が確認された清武上猪ノ原遺跡第5地区とは異なる空間利用のあり方（例えば狩猟の場）が予想される。

縄文時代早期になると、多量の無文土器の出土から特に早期前葉頃活発に利用されたことが予想される。さらに無文土器は、縄文時代早期前葉の当地域において異系統の土器であることが注目される。先述の清武上猪ノ原遺跡第5地区では縄文時代早期前葉の在地の土器が出土している。当時期における本調査区の位置付けを考えるためにも清武上猪ノ原遺跡第5地区正式報告書刊行後、両遺跡の比較検討が必要であると考えられる。

縄文時代前期以降の遺構・遺物として確認できたものは縄文時代後期の土器1点のみであった。よって、縄文時代前期以降における本調査区は、縄文時代後期に小規模利用されたのみと考えられる。

第3節　古墳時代における五反畑遺跡B地区の位置付け

本調査区における古墳時代の調査では石棺墓1基、木棺墓3基、土壙墓1基、地下式横穴墓1基、周溝状遺

構２条が検出された。今回の成果により、本調査区周辺は古墳時代において墓域であったことが明らかになった。そこで本節では今回確認された墳墓の年代的位置付け及び被葬者像について考察していきたい。

１．副葬品の年代について

まず、墳墓の年代的位置付けについて、出土した副葬品の検討をもとに考察していく。なお、副葬品の年代観については先行研究（池淵1993、大賀2002・2005、森下1991・2002、和田2001・2007）を参考にした。

【１号木棺墓】　珠文鏡は、内区に３列以上の珠文が乱雑に埋められたもので、中期以降の特徴といえる。また、外区文様が鋸波文であり、後期を中心とする櫛歯文を用いた外区文様ではないこととあわせて考えると、１号木棺墓出土の珠文鏡は５世紀代におさまるのではないかと考えられる。鉄刀は、茎が茎尻に向かって直線的に細くなること、隅抉尻をもつことを特徴としている。中期後葉に多くみられる隅切・抉尻中細茎グループに位置付けられる。鉄剣は、茎が茎尻に向かって直線的に細くなることを特徴としている。中期後半に位置付けられる。ガラス玉の色調は黄・赤・黒・黄緑・淡緑・紺・青・淡青である。赤色不透明のものは弥生時代後期～終末期と古墳時代中期初頭以降に流通するが、後期後半以降は急激に衰退する。また、黄色不透明のものや黄緑色不透明のものは中期後半に出現するが、後期後半以降は衰退する傾向にある。以上の資料の検討を総括すると１号木棺墓は中期後半に位置付けられる。

【２号木棺墓】　出土した鉄剣は、茎が茎尻に向かって直線的に細くなることを特徴としている。浅直・斜角関中細茎であり、中期後半に位置付けられる。

【１号土壙墓】　出土した鉄剣は、茎が茎尻に向かって直線的に細くなることを特徴としている。浅直・斜角関中細茎であり、中期後半に位置付けられる。

【１号地下式横穴墓】　出土した圭頭鏃はわずかに刃部関をもつことを特徴とする。刃部関が明瞭でない点に疑問が残るが、中期中葉～後葉段階に位置付けられるものと思われる。

以上の検討から本調査区で確認された墳墓は古墳時代中期中葉～後葉を中心としてその前後に築造されたことが窺える。

２．本調査区で確認された墓群の構造

本調査区において周溝の可能性がある遺構が２基確認された。特に１号周溝状遺構は３号木棺墓に伴う可能性がある。その場合、直径６～７ｍ程度の周溝であったと推定される。しかし、３号木棺墓以外の墳墓周辺では周溝の可能性がある遺構は確認されていない。また、墳丘の存在を示す土層堆積状況も確認されていない。では、３号木棺墓以外の墳墓には元々周溝がなかったのであろうか。

ここで注目したいのが１号地下式横穴墓の竪坑埋土である。地表面から竪坑を構築した場合、アカホヤ火山灰層を掘り込むため、竪坑を埋め戻す際にアカホヤ火山灰ブロックを埋土に含むはずである。しかし、１号地下式横穴墓の竪坑埋土ではアカホヤ火山灰ブロックを確認することができなかった。竪坑埋土にアカホヤ火山灰ブロックを含まないという現象は古墳周溝上などアカホヤ火山灰層がすでに削平されている地点に竪坑を構築した際に起こりうると考えられる(1)。よって、１号地下式横穴墓が周溝上に築造された可能性を指摘できるのである。仮に１号木棺墓に周溝があり、その周溝上に１号地下式横穴墓を築造したと考えた場合直径７～８ｍ程度に復元される。

本調査区は削平を受けていたため、現状で確認できた周溝の痕跡は少なかった。しかし、上記の考察結果から本調査区で確認された墳墓は本来墳丘や周溝をもっていた可能性は十分指摘できるものと考えられる。ただし、本来墳丘や周溝をもっていたとしても直径10ｍ未満の小規模な古墳群であったと予想される。

３．本調査区周辺の墳墓

本調査区は清武川左岸に所在する。本調査区で確認された墳墓を除き、清武川流域に所在する古墳時代の墳墓は、現在のところ宮崎市木花古墳群のみである。また、本調査区から約３㎞離れた八重川右岸の加納地区に清武古墳群があったとされている。

木花古墳群は前方後円墳３基、円墳５基が県史跡に指定されたが、現存するものは前方後円墳２基（１・２号墳）、円墳１基にすぎない（財団法人木花振興会1980）。墳丘の形態と採集された円筒埴輪から６世紀前半の１号墳→６世紀後半の２号墳という首長墓の系譜がたどれるとされている（長津1993）。

清武古墳群は前方後円墳１基と数基の円墳で構成されていたが実態不明のまま消滅している（柳沢1997）。

4．被葬者像について

本調査区で確認された墳墓は、1～2種類の副葬品（鉄剣や鉄鏃・刀子）をもつものが多かった。その中で複数種類の副葬品をもつ1号木棺墓の被葬者は、この墓群の中で上位階層に属した可能性が高いと考えられる。また、丁寧な棺台を作る1号木棺墓と棺台を作らない2・3号木棺墓との差異からも裏付けることができる。

本調査区は大淀川南岸丘陵上にあり、その背後には宮崎平野が広がる。また、古代官道が本調査区付近を通っていた可能性がある（永山1999）ことから、本調査区周辺は都城盆地から青井岳、田野盆地、清武川を越え宮崎平野に至る際の交通の要所であったと考えられる。このような立地条件のもと古墳時代中期中葉～後葉頃に勢力をもった当地域の人々が墳墓を築いたものと思われる。また、本調査区に墳墓が築かれた時期は、宮崎市生目古墳群で前方後円墳の築造が終了し、宮崎市下北方古墳群で100m級の前方後円墳（県指定13号墳）が築かれた時期、つまり大淀川流域において盟主が交代した時期の前段階と考えられる。この点から想像を膨らませると、本調査区で確認された墳墓のうち、最も権力があったと思われる1号木棺墓の被葬者は、大淀川流域の政治情勢混乱の中、恵まれた立地条件を背景に勢力を伸ばした人物であったのではないかと予想される。しかし、その勢力も長くは続かなかったようであり、後期になると清武川流域では木花1号墳の被葬者が前方後円墳を築造できるほどまで台頭してきたと考えられる。

【第Ⅶ章　注釈】

（1）　稲岡洋道氏の御教示による。

【第Ⅶ章　引用・参考文献】

秋成雅博・今村結記　2010（3月刊行予定）　『清武上猪ノ原遺跡第5地区－3－』清武町埋蔵文化財調査報告書第32集　清武町教育委員会

有川孝行・上杉彰紀　2003　『湯屋原遺跡』都城盆地埋蔵文化財発掘調査報告書（2）　都城町教育委員会

池淵俊一　1993　「鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀剣類を中心として－」『古代文化研究』第1号　鳥栖県古代文化センター

井田篤・秋成雅博・今村結記　2006　『山田第1遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第18集　清武町教育委員会

井田篤・秋成雅博・今村結記　2008　『清武上猪ノ原遺跡－3－』清武町埋蔵文化財調査報告書第25集　清武町教育委員会

上杉彰紀　2003　「北部九州の縄文時代早期初頭の土器（1）」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号　九州縄文時代早期研究会

上杉彰紀　2005　「「政所式土器」研究の現状と課題」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号　九州縄文時代早期研究会

大賀克彦　2002　「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　清水町教育委員会

大賀克彦　2005　「（4）福童古墳群の玉類について－古墳時代中期後半における玉の伝世－」『福童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集　行橋市教育委員会

尾園賢二・重留康宏・松本茂　2007　『野首第2遺跡　第一分冊』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第158集　宮崎県埋蔵文化財センター

財団法人木花振興会　1980　『木花郷土誌』　財団法人木花振興会事務局

竹中克繁　2003　「3．南部平野部の古墳と古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』第29回九州古墳時代研究会（宮崎県大会）資料集　九州古墳時代研究会

長津宗重　1993　「89　木花古墳群」『宮崎県史資料編』考古2　宮崎県

永山修一　1999　「特論1　日向国の官道」『宮崎県史通史編』古代2　宮崎県

野口　淳　2007　「第5章　遺跡の空間分析」『ゼミナール旧石器考古学』　同成社

森下章司　1991　「古墳時代_製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号　史学研究会

森下章司　2002　「古墳時代儀鏡」『考古資料大観』第5巻　小学館

柳沢一男　1997　「第9部　宮崎市内の古墳」『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』　宮崎県

和田理啓　2001　「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

和田理啓　2007　「九州における古墳時代中期の鉄鏃」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集　九州前方後円墳研究会

渡部誠一郎・谷口武範・永田和久・金丸琴路　2005　『音明寺第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集　宮崎県埋蔵文化財センター

綿貫俊一　1999　「九州の縄紋時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集　九州古文化研究会

綿貫俊一　2008　「西南日本の無文土器」『総覧　縄文土器』　株式会社アム・プロモーション

図　版

発掘調査参加者

図版1　遺跡周辺の空中写真及びアカホヤ上面検出遺構

1　五反畑遺跡周辺から日向灘を望む風景

2　グリッドB・C区アカホヤ上面検出遺構（東から）

１　旧石器時代遺物【第１ブロック】出土状況（西から）

２　旧石器時代遺物【第４ブロック】出土状況（西から）

３　１号礫群検出状況（西から）

1　２号礫群検出状況から
（東から）

2　３号礫群検出状況①
（北から）

3　３号礫群検出状況②
（北から）

1　4号集石遺構礫充填状況（北から）

2　7号集石遺構礫充填状況（北東から）

3　7号集石遺構底石検出状況（北から）

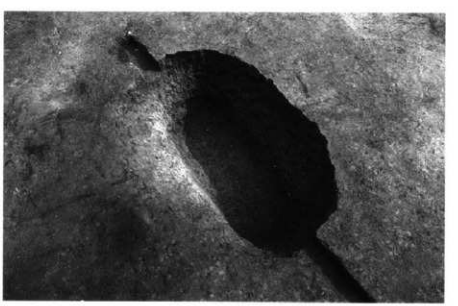
1　12号集石遺構礫充填状況（東から）

2　17号集石遺構礫充填状況（南から）

3　17号集石遺構底石検出状況（南から）

1　15号集石遺構礫充填状況
（北西から）

2　8号土坑土層断面
（北西から）

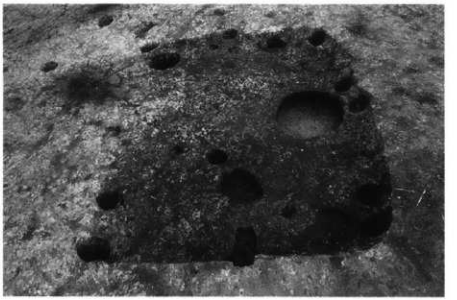


3　19号土坑完掘（南から）

1　１号石器埋納遺構遺物出土状況（南から）

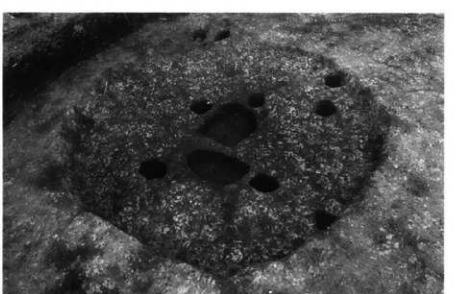
2　無文土器【第63図　20】出土状況（南から）

3　無文土器【第63図　19】出土状況（西から）



1　1号竪穴式住居跡完掘
（西から）

2　1号竪穴式住居跡焼土下
より出土した礫（南から）

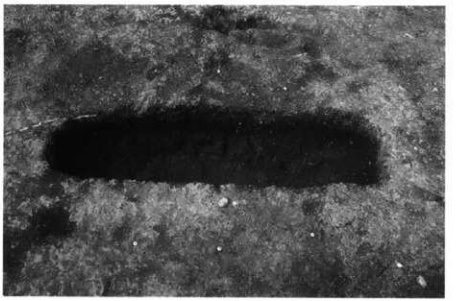


3　2号竪穴式住居跡完掘
（西から）

1　１号木棺墓遺物出土状況（南東から）

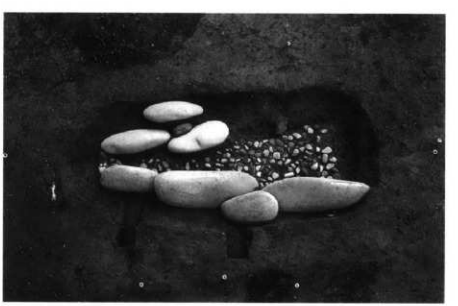
2　２号木棺墓遺物出土状況（南西から）

3　３号木棺墓及び１号周溝状遺構完掘（東から）



1　1号土壙墓完掘（南から）

2　1号地下式横穴墓遺物出土状況

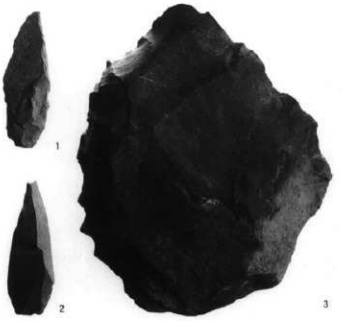


3　1号石棺墓検出状況（東から）

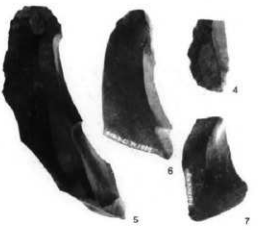
1　1号溝状遺構完掘
（北東から）

2　2号溝状遺構完掘
（北西から）

3　2号土壙墓完掘（南から）

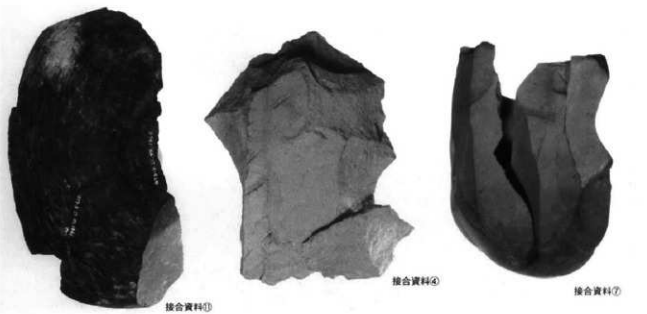


1　ナイフ形石器・スクレイパー

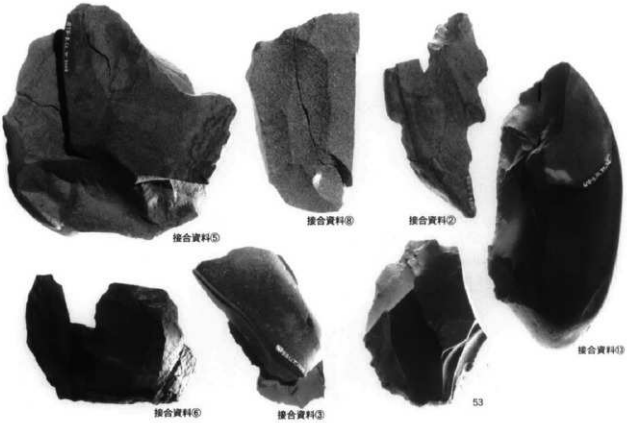


2　ナイフ形石器製作関連接合資料

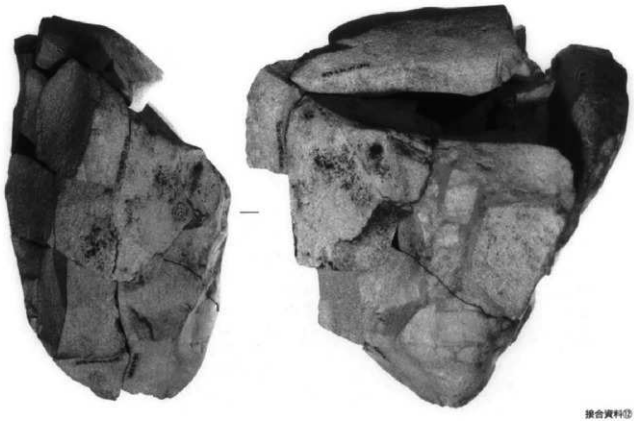
3　ナイフ形石器文化期接合資料①



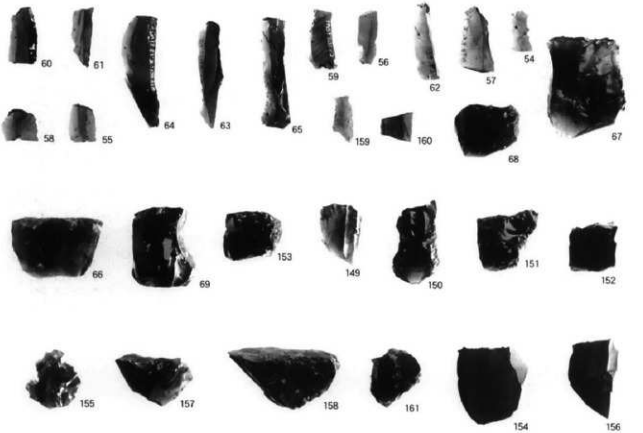
4　ナイフ形石器文化期接合資料②



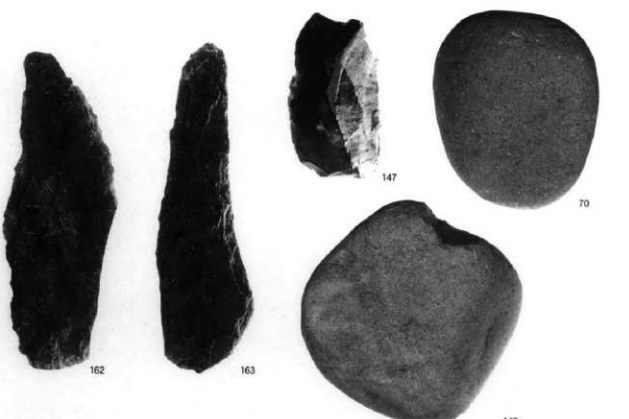
1　ナイフ形石器文化期接合資料③・スクレイパー



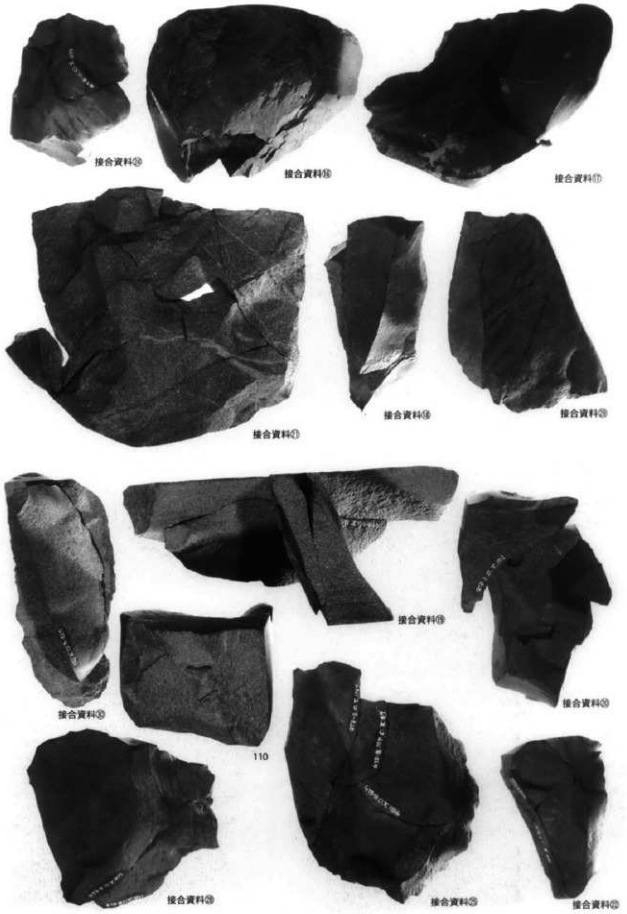
2　ナイフ形石器文化期接合資料④



1　細石刃・細石刃核

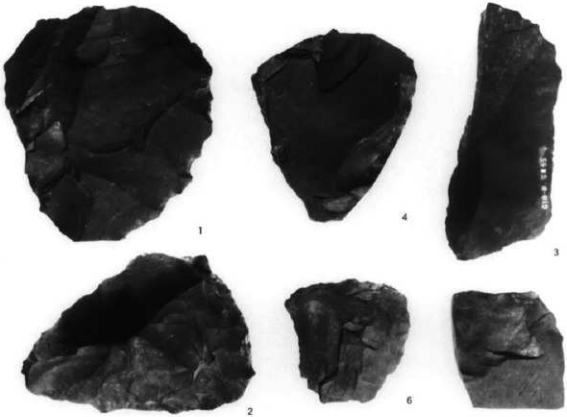


2　細石器文化期石斧・スクレイパー・敲石

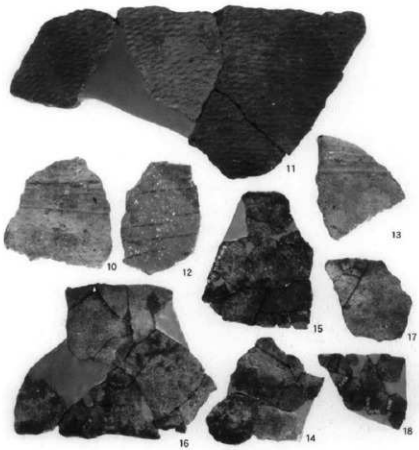


細石器文化期接合資料①

細石器文化期接合資料②



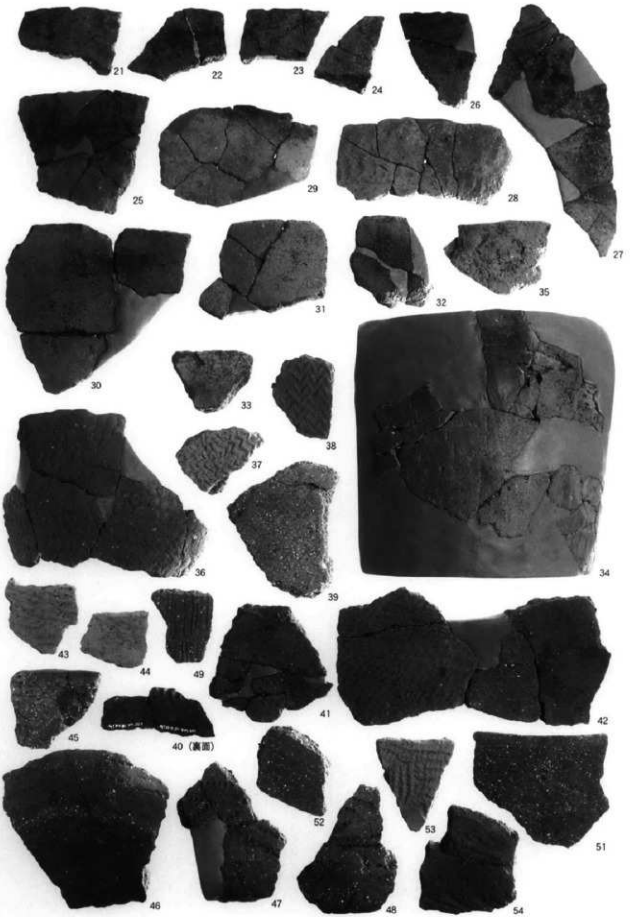
1　1号石器埋納遺構出土石器



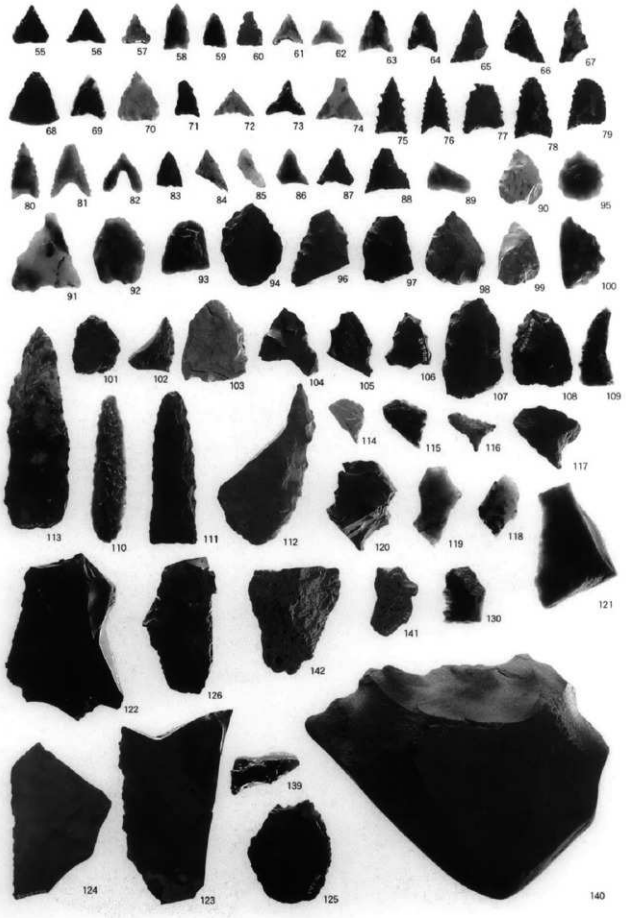
2　縄文時代遺構内出土土器

3　縄文時代遺構内出土台石

4　縄文時代遺構内出土敲石

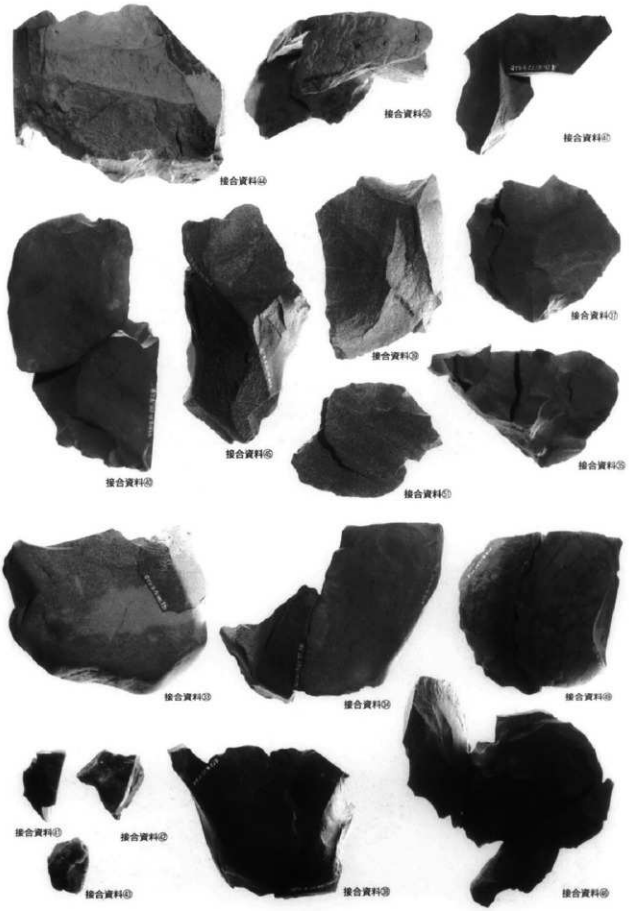

21
22
23
24
26
27
25
29
28
30
31
32
35
33
38
37
34
36
39
43
44
49
41
42
45
40（裏面）
52
53
51
46
47
48
54

包含層出土縄文土器

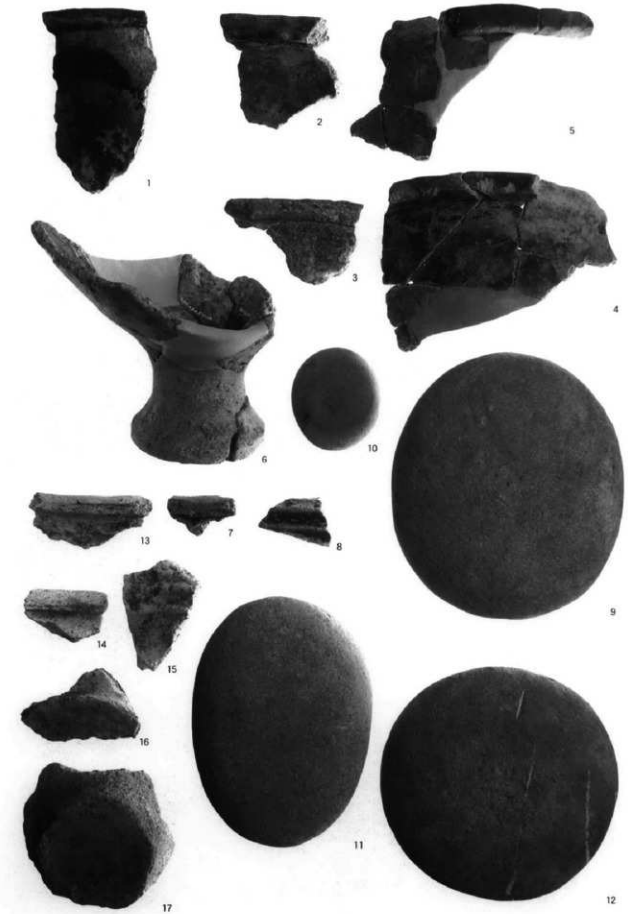


包含層出土縄文時代の石器

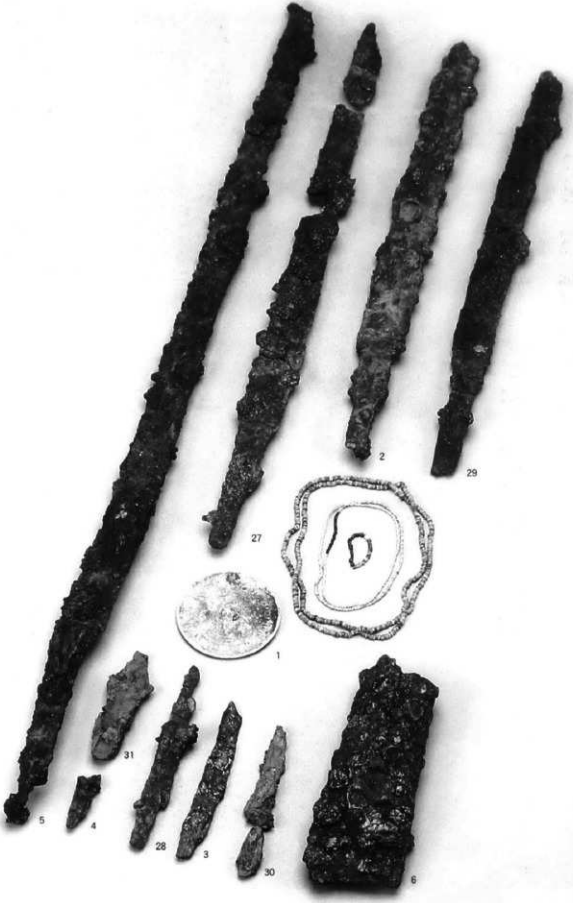
包含層出土縄文時代の石器及び接合資料①



包含層出土縄文時代接合資料②



弥生時代の遺物



古墳時代遺構内出土遺物

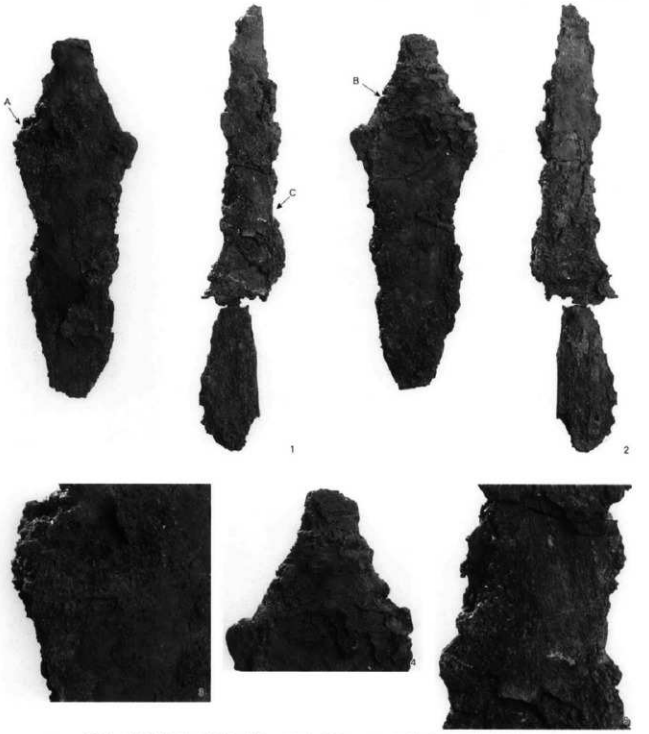
1　1号木棺墓出土鉄刀（5）　2　1号木棺墓出土鉄剣（2）　3　同木質付着状況（A）　4　1号木棺墓出土鉄斧（6）　5　1号木棺墓出土土刀子（3）　6　同背付着布　7　1号木棺墓出土刀子（4）

1　1号土壙墓出土鉄剣（29）

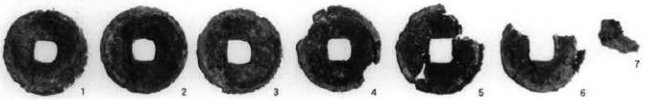
2　2号木棺墓出土鉄剣（27）

3　3号木棺墓出土刀子（28）

4　同上茎部下地巻き

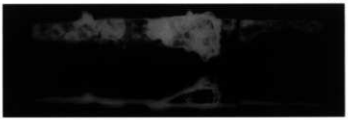


1　1号地下式横穴墓出土鉄鎌（左）・刀子（右）　2　同背面　3　布付着状況（A）
4　木質付着状況（B）　5　木質の上に布が付着している状況（C）



6　2号土壙墓出土銭貨

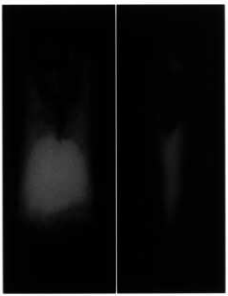
5


28

3

4

2


6

31

27

29

30

古墳時代遺構内出土鉄器X線写真

調 査 抄 録

フリガナ	ゴタンバタ
書名	五反畑遺跡B地区
副書名	県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編集者名	今村結記
発行機関	清武町教育委員会
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地
発行年月日	2010/2/26

所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東経	調査期間
五反畑遺跡 B地区	清武町 大字船引 字五反畑	清武町:224	31° 51′ 41″ (日本測地系)	131° 21′ 30″ (日本測地系)	07.12.6 ～ 08.5.29

調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
1,120㎡	道路関連	集落・墳墓	旧石器時代	礫群	石器(ナイフ形石器・細石器等)
			縄文時代	集石遺構・土坑・石器埋納遺構	縄文式土器、石器(石鏃・槍先形尖頭器等)
			弥生時代	竪穴式住居跡	弥生式土器
			古墳時代	石棺墓・木棺墓・土壙墓・地下式横穴墓	鉄器(鉄斧・鉄剣・鉄刀・鉄鏃・刀子)、銅鏡、玉類
			古代		土師器
			中・近世・近代	土壙墓・溝状遺構	陶磁器、銭貨

特記事項

ナイフ形石器製作に関連する接合資料の出土。古墳時代の多様な墳墓の検出。鏡面に布片の付着した銅鏡の出土。

清武町埋蔵文化財調査報告書　第30集

五反畑遺跡Ｂ地区

県営農免農道整備事業船引２期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日　平成22年２月26日
編集発行　清武町教育委員会
〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204
TEL 0985-85-1111

印　　刷　田中印刷有限会社
〒880-0022 宮崎市大橋１丁目110番地
TEL 0985-28-4724　FAX 0985-20-9285